
~生徒会長が愛死天流~

ねこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「生徒会長が愛死天流」

【Zコード】

Z4235D

【作者名】

ねこたん

【あらすじ】

超優等生な生徒会長、山内雛菊。そんな彼女の悩みは友達も彼氏もいないこと。でもある日からそんな、日々は終わりをつげて、爆走天使も予想できないような日々に。不良を愛した、生徒会長の暴走ラブコメです！

第1話・ほほ笑むのは、髑髏が天使！（前書き）

下手ですけど、『J』へ承ください！

第1話・ほほ笑むのは、謄讀か天使！

キーンコーンカーンコーン

4時間めの授業終了のベルがなり、みんながワイワイお弁当を食べはじめる。机をつなげて語らいながら弁当を食べていかにもたのしそうだ。

そんななか、ポツリと一人だけで弁当を食べている女子がいる。形のよい顔立ちをしており、肩より少し下まで伸びた栗色の髪を教室の開けっ放しの窓から入るまだ春の面影を残した風になびかせ、澄んだ茶色の目はどこか寂しそうであった。

山内
雛菊

彼女はここ青海高校の生徒会長で、成績優秀、スポーツ万能で顔も美人といつ繪に書いたような優等生。そんな彼女には欠点があつた。彼女の欠点は、友達が皆無だということ…もちろん、彼氏もいない。ドラマもアニメもタレントもよく知らないからわからないし、話についていけない。おまけにあまりにも能力がすご過ぎるために、みんなは近寄ろうとしないのである。浮いてる存在。彼女のことと言で言うとこうなつてしまつ。

1人の弁当がどんどん寂しいか…雛菊はガツガツと弁当を口に押し込む。ガヤガヤとうるさい教室のなかなぜか自分の周りだけはとても静かに感じるのである。弁当を食べ終わると、自分の居るべきじやない世界と感じてしまう教室からスタスタと出て行つてしまつた。

そんな、彼女がこれからとんでもない恋に落ちる！爆走天使だつてそんなこと予想もしなかつただろうに！

はじまり～はじまり～

何の意味もなく廊下をコツコツあるいでいる、1人の女子生徒が学校でも有名な不良グループに絡まれていた。全

「おーい 姉ちゃん、人にぶつかつといてワビもいれんのんかい？ああ？」

気が弱そうなそこは、ビクビクと振るえていて今にも泣き出しそうだった・・・・・。

「あつ・・・その・・・す・・すみませんで・・・した・・・」力の限りをつくして言つたようなその言葉に、グループの頭はこう言つた。

「はあ？きこえねえなあ！つーか、謝るだけで許すとかおもってんのあ？甘いんだよ！許してほしけりや金だしな！」

「いくら・・・です・・か？」

「1万でどうだ？」

血も涙もないような、冷淡な言い方で頭は言つてその子の財布をひとつたくつた！

「か・・・かえしてください・・・」

そのこは力の限りの勇気をだして言つたに違いない、しかし

「ああ？なんだと？いい度胸してんじゃねーかあ！」

その子の胸倉をしつかりつかんだ頭は、そこにごぶしを振り下ろそうとしていた。

目の前でその様子を、みていた雛菊だつて怖かつた、いくら生徒会長だといつても、不良を注意なんかしたらどんなことをされるかわからないからだ。しかし、会長の威厳をもつて注意しがるおえなか

つた。」引かれては一生罵られるとでもおもつたのだから？

「ちよ・・・ちよっとやー・やめなさこー・やの」嫌がつてゐるじゃない！」

グループの何人かの男が、雛菊にギロリと振り向き、怖い目でいるでくる・・・・・。頭は顔をあげて、雛菊をみるとニヤニヤしながら

「これは、これは生徒会長さん。正義の味方！」苦労をまです。」と嫌味をはいたと思つたらツカツカと近づいてきて頬に強烈なパンチをいきなりくらわせた。

くつ・・・

激痛が走る、床に倒れそうになつたと思つたらみぞうすにキックをくらい鈍い効果音とともに床に頭をぶつけた。

目に涙が浮かぶ、乱れた髪が顔にかかり、殴られた場所がズキズキと痛む。そして、頭はニヤニヤした表情を浮かべて、雛菊の襟を鍛えられた太い腕でガツチリとつかみ、引き上げて

「なんか文句ある？」

と聞く。それを聞いて雛菊の真つ赤な血の色をした唇、いや血が流れ出している唇が開いたとおもつと

「あるに・・・きまつてんじやない・・・

と小さな声で、しかし威厳のこもつた声が頭の耳にとどくやいなや、またもや雛菊を殴り倒した。

「いーかげんにしとけよ。 バカ女！－」

不良なんかに絡むんじゃなかつた。後悔の涙が雛菊に浮ぶ。不良達は、それぞれ攻撃態勢を身構えて雛菊に近寄つてくる。恐怖でいっぱいになりとつさに目をつぶる雛菊。

殴られる、殴られる、 真つ暗な田舎を見つめながらそつと思つた。パーン！

大きな音が響きわたり、あたりでヒソヒソ話をしてたやつらの声が消える。

しかし、痛みはない。どうしたんだろう？離菊がおそるおそる田を開いてみると、グループの頭は数メートル先でうつぶせの体勢でのびていた。頭の手下は青い顔で、離菊の横にいる男に田をやつていたが数秒後には後ずさりをはじめる。

青に染めた髪、学ランのボタンを全部あけていて、倒れている離菊の横で立っていた少年は一言だけ不良たちに言った。

「じゃま」

第1話・ほほ笑むのは、譲讓か天使！（後書き）

いやあー初書きです。下手ですがカンベンしてください。
あ！そろそろ、キャラの名前ですがとある漫画の会長さんとかぶつ
てしましました。ご了承を。設定は違うのでそれで勘弁してください。

1人でもたくさんの人人が呼んでくれたなら、僕は幸せ者です。こ
れからも連載していくと思うので、夜露死苦おねがいします。

第2話・保健室には先生がい・・・ない！？（前書き）

続

第2話・保健室には先生がい・・・ない!?

雛菊はあっけにとられた。いや、みていたものすべてがあっけに取られたに違いない。

不良たちすらびびつて身動きできない様子だ。どうやら、グループの頭はこの男にぶん殴られたに違いない。

この男、赤城幾斗あかぎいくとは、この学校N○1の不良・・・とまで言われてる不良である。喧嘩が強く、彼の機嫌を損ねると女でも地獄送りだとか・・・。そんな彼が不良グループの頭を1発で倒してしまったのだから・・・。いろんな意味で驚く。なぜ、驚くかは僕の想像におまかせします。

「ん・んにゃろ!」

多少声はびびってるものの、勇気?ある不良グループの下つ端1人が幾斗に飛びかかる。
きつと、とても怖かつたろうに・・・
・・・。

パーン!

また、あの音が聞こえたと思ったら、手下は床でうずくまっていた。みていた手下は、仲間を助けようと、幾斗に飛び掛るが20秒もたたないうちに、5人がやられてしまった。

頭がよじやく立ち上がり、手下に撤収の合図をする。実に不幸な連中だ。いや、自業自得かもね・・・。雛菊はそこまで觀ると、恐怖から逃れた安堵感と床で打った頭がガンガンするのとで、急に眠気が来たと思つたら、意識が遠くなってしまった。

夢をみた、なんの夢だったのかは忘れたが、とにかくとも楽しいような夢をみた

目が覚めたら、そこは保健室のベットの上だった。そうだ、自分は不良たちとのイザコザに巻き込まれて、いや突入してつて氣を失ったのだと思い出す。保健室に誰が運んでくれたのか?と思い、周りを見てみるとベッドの横に反対側を向いて誰かが座っていた。肩までのびた髪が美しい青色に染められていた。

ビクリと身体が反応した。

「赤城くん?」

無意識のうちに声が出ていた、彼は振り返つて離菊を見るやいなや。

「あれ? 起きた? 保健室のセンパーになかったからとりあえずベッドにねかせといたよ。」

「…………。どんな反応をみせればいいのか一瞬戸惑つてから、
「あ……。ありがとう。」

と少し恐怖を混ぜたような顔で言つた。幾斗はそれを観て、無難作に頭をかくと黙り込んで何かを考えるような顔をしていた。離菊は聞いた

「なんで、私を助けてくれたの?」

?マークが幾斗の頭の上に浮かぶ……その後、わかつたような顔をして。

「保健室に運んだ理由? 倒れてたから。」

・・・・・そうじやなくて

「じゃあ何だよ? 僕なんかしたか?」

「ほら、不良グループを倒してくれたじゃない!」

へ?という顔をする幾斗……。

「覚えてないの?」

「覚えてるけど、あれはあいつらが通行の邪魔だったから……。

「じゃあ、私のこと気づかなかつたの?」

「ダメ、俺ぼけっとしてつたからさあ……。」

それを聞いた雛菊は自然に笑っていた。

「なつ！なにがおかしんだよお！」

「『じめん、ごめん。ついつい・・・赤城くんつて面白い人だなあと思つて。』

高校入つて、はじめて人と話して笑つた。中学以来でとても嬉しかつた。

「・・・あつそ・・・俺は帰るぜ。疲れたし、眠いからな。」

少し照れたように顔を赤くした幾斗は、頭をボリボリとかいて立ち上がつた。

そして、保健室を出ようとすると、雛菊はあわてて駆け寄り、

「まつて。今日一緒に帰らない？今日のお礼にラーメンでもおい」

るからさあ」

幾斗は一瞬ためらつたが、すぐに「いいぜ」と反応した。

ラーメンを無料で、しかも極上の美人と食えるのだから不良の幾斗は心躍らせる気分だったに違いない！

クッソ羨ましいぜ！！（作者談）

幾斗は自転車通学で、徒歩通学の雛菊も自転車置き場についていく

「会長一チャリ通じゃないの？」

「違うよ。」

ふーん と言いつと幾斗は自分の改造自転車にまたがると、荷台を指差し「乗れ！」と言つた。

「だ、だめだよ！法律違反じゃない！」

「？ そ、うなん？ しらんかつた～ってことで乗れ！俺は、腹減つてんだよ！…はやくい」—「ゼ」

会長と不良は数秒睨み合つたが、幾斗のこわあ～い目つきに負けて雛菊はしぶしぶ荷台に乗ると、

「ゆっくり・・・走つてね」

おつと返事はしたものので、実行はしてくれなかつた。自転車はも

のすごいスピードで走り、雛菊は軽く悲鳴をあげながら幾斗の背中にしがみついていた。

人生初めての2人乗り・・・まさかそれが不良となんて雛菊は思つてもみなかつた。

学校の近くにある古びたラーメン屋についた。まるで大正からの古い歴史があるかのような古い古いラーメン屋だつた。中に入るとおきまりのラーメン屋のおっさんがいた。

おたがい注文をとる。2人の趣味が一致したのか、気分なのか知らないが2人とも醤油ラーメンを注文した・・・

ズルズルとラーメンを食べながら雛菊は幾斗の顔をうかがつた。まるでラーメンを睨むように真剣な目でラーメンを食べる姿は、そのへんの雑魚なチンピラがみれば裸足で逃げ出しそうなほど怖かつたが雛菊の視線に気付くと、顔をあげて薄ら微笑んだ・・・

「何みてんだよ？」

そう言つと幾斗はゆつくりと雛菊の額に手を近づけてテコピンを食らわす。このテコピンに何の意味があつたのだろう・・・とにかく額が痛い・・・

その後、なにかと話が盛り上がつた。不良と初めて話した雛菊、優等生とはじめて会話をした幾斗。・・・どちらもそれなりに初体験を行つた。まあ、悪い体験ではなかつたのだろうが・・・

「会長つて身長のわりによく食べるなあ～身長なんぼ？」

「え・・・157cmだけビ・・・」

幾斗の質問に少し頬を赤く染めながら答える雛菊。私つてそんなに食べてるかなあ・・・

「ちつせえ！－！わははつは

「え・・・そうかなあ・・・」

てか、なんで私バカにされてるんだりつへ。

少し話したところで幾斗は雛菊に言った。

「今日はありがとな。」

笑顔で言つ幾斗。不良も笑うんだ・・・じゃなくて！

「なにが？」

その質問に幾斗はニヤニヤしながら、

「会長のおかげで、午後の授業さぼれた。」

保健室でずっと雛菊に付き添つていたのだ。付き添つた？いや、隣のソフナーで寝てたが正解である。結果授業をサボれた・・・自然にため息が漏れた。

まあ・・ね・・・不良だから・・・

じょうがないか・・・

そして、ラーメンを完食後。

「あつ・・・お財布無いんだった。」

雛菊は自分の鞄をのぞきながら言った。

「はあ？マジ勘弁してくれえ・・・

ノーネと言われる不良はひどく青ざめた顔をしたとや。

うるく

第3話・学校ダッシュ。ゴールなし！

朝、学校に行き席につく。自然とあぐびがでる、それは昨日の夜あまり寝付けなかつたからである。不良とはいえ、学校ではじめて笑いあつて話ができるのだ。嬉しくて嬉しくて・・・

昨日のラーメン代を返さなくてはと、先生にクラスを聞くと、なんと自分と同じクラスしかも、後ろの席。いつも、後ろの席が空いてると思うたら・・・

授業開始チャイムが鳴つても、幾斗はあらわれず雛菊は心のビニカで、彼を待っていた。

なぜ？心に問うが答えは解りきっていた。「彼に会いたい。」

チャイムが鳴り響き、4時間目の授業の終わりを告げると同時に、お昼休みの合図でもある。また、1人で食べる弁当・・・。さつきもで、あんなに嬉しさでいっぱいだった胸が急に寂しさでいっぱいになつた気分だ。ガツガツと弁当を食べたあと、またブラブラと校内を歩いていた。

すると、昨日の奴らがまたやつてきた。昨日の倍、3倍？の人数の不良がどつとでてきたと思つたら、ぐるりと雛菊を囲んでしまつた。

「あれえー昨日の生徒会長さんじやんか？」

わざとらしく口を開く不良たち。

「昨日、あんなふうになつちやつたからって、女子相手にこの人数で仕返しに来るの？」

強気な口調で、雛菊は言った。でも、本心は怖かった。また、昨日

みたいになるんじゃないかなって。

「仕返し？人聞きわりーなあーちザーヨー！あんたと遊んでやるうと思つてるだけだよ」

あれ？さつきに言葉からは偶然みつけたみたいな言い方だったのに？不良つてバカなのかしら

「さあ、来てもらおうか。」

「いやー…

否定の声をあげる雛菊を不良たちはじっと眺めていた。

「いい加減にしろよ、ちょっと話があるだけだからさあーじゃなーど、力ずくでつれてかなー」とけなくなるからよー…」

「ヤニヤ笑しながら不良たちは雛菊に近づいてくる。さすがに、ヤバイと思ったのか雛菊はとっさに逃げる。不良たちの円のなかにできていたかすかな隙間、そこからスルリと逃げ出した。

「また！コラあ！！」

雛菊も不良達も全力疾走で走り、周囲の人々に迷惑をかけていた。雛菊は自慢の足で学校中を駆け回り、不良たちも必死で追いかけてくる。体育もまともに出たことの無い不良たちが雛菊においつけるわけも無く、不良達は雛菊を見失った。

「クッソー！」

雛菊はそつと物陰からその様子をみていたが、不良達が消えたのをみてホッとしため息をついて教室に帰ろうとした。

H R終了のチャイムが鳴つた。一日の終わりのチャイムが。今日は、生徒会の会議もないし早めに帰ろう。そう思つて、荷物をまとめ校門の前に行くと不良達がまつっていた。
えつ？

予想もしなかつたことに雛菊はおどろいてしばられ、呆然と立ち尽くしていたら、不良の一人が雛菊に気付いて

「おい、いたぞー！」

と声を上げると不良達は雛菊目指して猛ダッシュ！雛菊も走つて、

校舎の中に逃げ込む。階段をかけ上がり必死で逃げる！

「逃がすかあ！」

不良達は今度こそといつも氣迫で追いかけた。

いつのまにか、雛菊は屋上に追い詰められていた。

ヤバイ その言葉が頭をよぎる。不良達も屋上にあがってくると、じりじりと近づいてきた。雛菊もじりじりと後ずさりしている。

途中、足になにかが引っかかるって床にしりもちをつく。しかし、床の感触とはちがう柔らかい感触が尻に伝わってきた。

「いってーな！」

そう言ったのは今日、一日中雛菊が待っていた男性。すなわち赤城幾斗だった……。

第4話・校門を出る時間です

今日一日、待っていた彼が今、目の前にいる。

「いつてーな」

赤城幾斗は、怒鳴つて離菊に言つた。いい気持ちで寝てたのに起されで不機嫌なのだろう・・・。

「てつめ！喧嘩売つてんのか！？つてあれ？会長じやん。どつたの？」

と聞いて、離菊を見下ろすと離菊は涙をいつぱいためた目で幾斗を見上げていた。

「え？ええ？あれ？んだよ。俺なんかしたか・・・」

安堵の涙がこみ上げてきて、幾斗はそれにおどおどしていた。

「ああ？オイ、コラ！会長こっち来い！」

そういうながら、不良達が離菊に近づいてきた。幾斗は離菊が何で今にも泣き出しそうな顔をしてるのかがわからず、とりあえず離菊に

「おい、誰に泣かされた？俺か？俺なのか？」

そう聞かれて、離菊は首を横に振つて口を開こうとした。しかし、その瞬間一人の不良が離菊に飛び掛つた。

グキ

鈍い音が響き、幾斗の声が聞こえた。

「会長を泣かしたのテメーラか！？ぶつ殺すぞ？」

この学校の不良が何人束になつてかかつても、幾斗の相手にはならないだろ？。彼が一步、歩くたびに不良達は後ずさりしていた。

「ビビリが！」

幾斗が今度は飛び蹴りをくらわせたあと、アッパー、回し蹴り、ストレートなど数多くの技をくりだして不良達をフルボッコにしてしまった。不良達が屋上でのびてるのをあとに幾斗と離菊は学校を出

た。

菊は思つて。
無言で歩く2人、何か話さなくては、なにか話したい、そう、
菊住

「学校来てたの？」

「ああ？」

「なんで、教室来なかつたの？」

たてて寝坊したままでさ 遅刻した 途中から教室とか入り

そう言って、笑つてた。

「その生活毎日つづけているの?」

17

「じゃあ、明日から起立に行つてあけるわ」

タリー」とか言わせて終わるんだと思つたら、

「俺んちあつこだから」

指差した先には、おんぼろのマンションがあり、幾斗の家は2階の
202号室だそつだ。

卷之三

そう言って幾斗は帰つていつた。
鶴菊はそれを見送つたあと、自分の家に帰らうとした。

家に帰り着いて気が付いた。

ラーメン代返すの忘れてた。

0円玉1枚が入っていた。

ポケットには100円玉1枚と、50

第5話・友と想い人は一緒にやつへる。

ピンポン

雛菊は今、幾斗の家の前にいる。緊張しながら、チャイムを鳴らした。

「はーい」

出てきたのは幾斗くんじゃなくて、髪の毛を一つに結んだ少女で可愛い女の子だった。たぶん小学生くらい。。。

「どうなたですか?」

そうきかれて雛菊はどう答えるべきかなやんだ。正直に言つべきか。

「あ・・あの」「ああ!兄ちゃんの彼女か。待つて、にいちやん起こしてくるよ。」

「か・・彼女じや・・・」

言い終わる前にその子は家中に引っ込むとなにやら声がして、髪がぼつたぼたの幾斗がてきた。

「あつ。会長。おはよつ」

のんきな声が聞こえる。この人本当に不良なのか?

「あつ・・その・・・む・・迎えにきた。」

「もう、そんな時間?」

「うん」

幾斗は、部屋に引っ込むと、パンを一枚くわえて出でてきた。もちろん制服は着てた。着崩してるけどね・・・。

学校へ向かう道、一人の女子が2人に声をかけてきた。

「赤城くん。おはよう。あつー会長さんだ。おはよつ」

そこには同じクラスの糸河安曇いとかわあづみである。雛菊の斜め前の席に座っている人である。

「よおー」「おはよつ」

とつあえず答えた。幾斗くんと、安曇さんの関係つてなんだろ

う？

3人で学校に登校。ちょっと前の私からは、想像できない」とである。とりあえず、数ある疑問を解き明かそうとする。

「ねえ、幾斗くん。あの時家にいた女の子だれ？」

「ああ・・・妹。」

疑問解決。

学校について、席にすわり糸河さんに聞いてみた。

「ねえねえ 糸河さんと、幾斗くんてどんな関係なの？」

「私？幾斗くんの舍弟だけど？」

「えつ？なんで？」

「自分で、立候補したの。だって、幾斗くん強いし。私、前いじめられてたんだけど、幾斗くんの舍弟になつてからなくなつたから。感謝してるんだ。」

幾斗くんて・・・本当に不良？

「ねえ。会長さんは、幾斗くんとどんな関係？恋人？友達？舍弟？」

「えつ・・・・と。どうなんだろう？友達かな？」

「実のところ、友達かどうかも怪しい・・・

「会長さんは赤城くんのこと好きなんじゃないの？」

「えつ？なんで？」

やけに、焦つてた。雛菊はわかつてた。これは、ヒミツの話だが、自分が第2話田くらいから幾斗のことがすきなことを・・・

それから弁当の時間になつた。また1人か。そう思つと悲しくなる。

・・・弁当箱を開こうとしたら、安曇が近寄つてきた。

「会長さん。一緒に弁当食べない？屋上で。」

「えつ？いいの？」

「もちろん。いいのよ」

「いくつよ」

すく嬉しかつた。屋上に行くと、幾斗がいて「コンビニ弁当をむし

やむしゃと食べていた。

「おひ」

軽く、返事をする幾斗。

3人で円を書いて食べる弁当。最近、いいことづくしかな……。
あの不良グループの人たちにお礼の手紙でも書こうかしら。
そんな、冗談を脳内で作成しながら、雛菊は弁当をゆっくり食べていた。

「ああー疲れた。」

そう言って、弁当を食べ終わった幾斗は、屋上で「口ごとに」になつた。寝ちゃつた……。

幾斗がねてから、安曇と雛菊は少し話をした。

「会長さん、明日も一緒にお弁当食べませんか？私、はづかしいことに友達がゼロとして……。」

はづかしそうに、安曇が言つた。雛菊は笑いながら。

「じゃあ、今日から友達ゼロじゃないわね。明日も一緒に食べようへへ。」

雛菊の言葉、安曇の笑い声、幾斗の寝言……。3人の世界が1つにつながったような一瞬だった。

「眠くなっちゃつた……。」

そういうつて、安曇も床に寝転がると、空を見上げていた。雛菊も隣で横になる。

青く澄んだ空、白い雲 その下で3人はスヤスヤと寝をしていた……。

キーンコーンカーンコーン
チャイムが鳴る。授業開始のチャイムか？腕時計をみると、すでに授業が終わっていた。

「私・・・生徒会長なのに・・・」

会長はひびく、おひこんだとさ。

第6話・恐怖のダークヒーリングの醒

「う・・・

昨日、昼からの授業をサボってしまった。どうしよう・・・。
これは、さすがにヤバかった。下手すれば生徒会長クビになるかも
という不安があつたからだ。教室に入ると先生がいた。HRが始ま
つたが、先生はなにも昨日のことと言わないし授業が普通どうり開
始された。

「セーフーだったな会長！！」

後ろの席からニヤニヤした幾斗の声が聞こえる。コクリと無言でつ
なづくと、前を向いて安堵のため息をもらした。

授業中に寝息が聞こえる・・・前からも・・・後ろ
からも。

「ちよっと。赤城くん。起きなよ。」

とりあえず起こしてはみるが反応がない・・・。

「糸河さんも起きてよ。」

なんとか起きたみたいだが、その数秒後にはまたいびきをかいてい
た・・・。
やれやれ

さて、屋上で今日は幾斗くんはいなかつた。いたけど、弁当食べて
すぐ元どつかに行ってしまったからだ。彼女にでも会って行った
のかしら・・・?

そこで、しばらく雛菊と安曇はとある話をしていた。

「会長さんに相談があるんです。」

「な・・・なに？」

「私・・・好きな人がいるんだけど・・・」

一瞬ドキッとした、もし・・・もしその好きな人が幾斗くんならば・・・そう考えるとなんだか怖かった・・・

「へ・・へえー・・だ・・誰？」

「は・・・恥ずかしくて言えないよお・・・・・・・」

「言つてくれないと相談のれないよ？」

本心は違つた。好きな人が幾斗くんではないか、それだけが気になつていた。それだけを聞きたかつた・・・・・。それが、恋する乙女つてもんよお（江戸っ子ふう・・・・・）

「じゃあヒントね」

と安曇が言つた。安曇のヒントは

「私の近くにいる人で、あんまり不良には見えないけど、不良な人」

というものだつた・・・・・安曇さんは舍弟だと言つてたから、幾斗くんが近くにいる人だ。しかも、不良だといつ・・・・・。

なにか、重いものがのしかかつてきたように雛菊はズシリと倒れた。

午後の授業中、ずっと考えていた。つまり、安曇さんの相談は「好きな人がいるんだけど、どうやつても告白できない。」というわけである。つまり、安曇さんが幾斗くん?に告白できればいいのだ・・・。

びづする私・・・・・。

もし、安曇さんの告白を手伝つたとして、もし幾斗くんがOKしちゃつたら?怖い・・・でも、もし拒否したらせつかくできた友達

を失う事になりかねない。

どちらにしろ何かを失うのだ……

そう、下に下に考へてる離菊は授業中、あきらかに暗いオーラをだしていた。

授業終了後、離菊と安曇は廊下を歩いていた。みんなもう校舎からでていて人はあまりいないようだ……。すると……

「おつ！生徒会長さんだ！」

そう言つて、またまたいつぞや幾斗にボコられた不良グループのやつらがあらわれた。なにかと絡んでくるのがこいつらであった。

「ねえ！会長こいつあきひよお」

そういうて近づいてくる。安曇は離菊の前にでて、

「私の友達をいじめないで」

堂々とした態度で不良達の前にでた。しかし、離菊はみのがさなかつた。安曇の後ろに回されていた手は確実に震えていた。

ああ？と不機嫌そうな声をあげる不良達これは、ヤバイのでは？そんなことを、本能的に感じていると、1人の不良が他の不良達を黙らせた。そしてなにやらヒソヒソと話し始め。

「失礼しました。」

と軽く礼をすると立ち去つて行つた……。

この子、いったい何をしてそんなに恐れられてんだろうか？

幾斗くんの舍弟だから？

「だいじょうぶだつた？」

そう言つて、笑顔で答える安曇さん。離菊はドキッとした。

どうして、こんなに悩んでたんだろう？私のことを「こんなによ

くしてくれる友達がいるのに……それなのに……私は自分のことしかみてなかつた……。

雛菊は決意した。安曇の手伝いをしようと。そのことを安曇に言うと安曇は笑いながら「ありがとーっ」って言つて抱き付いていた。

作戦はこうである、”明日の放課後に幾斗くんを屋上に連れ出し、2人きりになつたところで、安曇が告白をする”
まあ極めて単純な作戦ではあるがそれには田をつぶついていただきたい。

ぴぴぴぴ

田覚ましの音が鳴り響く。運命の一日がここに刻まれる事になる。

第6話・恐怖のタークヒュンクの鯉（後書き）

作者に感想ください。どんなことでもここのお願いします。

第7話・真面目な質問、不真面目な答え

今日はなんだか天気がいい。お日様も元気いっぱいを感じだ。

いつものように幾斗を起こしに行つた。今日の告白が成功してしまえば、私はもう幾斗くんを起こしに行けないのでは?もしかして、一緒に登校できるのもこれで最後かも・・・

そんなことを思つてみると、決心が鈍りそうになる。

決心したことは、決心したこと・・・。絶対に曲げない。

それは、生徒会長としての威儀と誇りを持つてこそ、出来る事なのだろう。

学校につき、授業がはじまり、あつという間に昼休み。弁当を食べながら安曇は雛菊に「ありがとう」とか感謝の言葉を言つてた。雛菊はそれを耳には通すが、流してしまつていた。

わざとではない。すべては幾斗を想つ気持ちでだった。

放課後、こんなに一日が早く感じることがあるとは・・・雛菊はそう思つた。できるだけ永くあってほしいと願つた授業もあつさり終わつてしまいもう時間である。心臓が自然とドキドキしている。とりあえず、幾斗を捕まえなくては・・・

「赤城くん、ちょっとこいかなあ？」

「なんだよ？」

「ちょっと屋上いかない？」

「なんで？」

「お……面白いものやつてるんだよ……観に行こうよ」
幾斗は不思議そうな顔をした、

「屋上で？」

「う……うん」

「面白くなかったらぶつ殺すぞっ！」

「う……うん」

そうやって、なんとか幾斗を連れうしに成功した。

雛菊は、屋上へつづく階段をのぼりながら幾斗に話しかけた。

「赤城くんには、好きな人とかいる？」

さりげなく、聞いてみると

「うん。……いるよ」

さりげなく答えられた……

「誰？」

心臓がバクバクする、なんでだろ？ 答えが怖くて怖くてたまらないようだった……しかし、幾斗は

「教えねーよ。バー！カ」

舌をペロリとだして、雛菊を笑うと走って屋上にかけだして行つた。

私の役目は終わった……そう思い屋上の1個下の階の階段に座っていた。自然に涙がこぼれていた。まだ、失恋したわけじゃないのに……そう自分に言い聞かせていたが、あふれ出す涙を止めることが出来なかつた……。

第7話・真面目な質問、不真面目な答え（後書き）

「お前、お手紙、ハメントありがとうございました。うれしくおもいます。ありがとうございます。」

第8話・そんなことがありますか・・・?

待つて いる時間が、随分 永く 感じられたのはなぜだろ？・・・・・
その時間、膝を抱えてうずくまつていた。

離菊のもとにかけよる足音がしたのは、それから少しつづてからである。離菊もその音に気付き、顔をあげると幸せ100%みたいな顔で安曇が近づいてきた・・・・。そして、

「そ・・・それは・・・よかつたわね・・・そりだ、で、返事は
?返事せぬ?だったの?」

最後の希望をすべてそこに注ぎ込んだと言つても過言ではない。お願い、お願い

すると、安曇はゆっくり口を開いた。

「OKだつて。私、すっごく嬉しいよ」

最後の希望の手綱な切れた・・・・。

— そ、う・・よ、か「た、じや、ない」

そう言って、祝福の言葉を送るしかなかつた。・・・。

しばらくして、安曇はやつと立ち去ってしまった。雛菊はショックで胸が締め付けられるような痛みに襲われ、もはや泣く事も出来ないくらい気持ちが逝つてた・・・アボトボと廊下を歩き、やつ

とことで靴箱にたどりついた。・・・。

「おー、今更！」

「さうか？」ともなく幾斗があらわれ、歩く屍のよつたな離菊に話しかけた。

「まあ……おもしろこと言えばおもしろかったな……まさかあの糸河が告白するだなんて……」

「え？ ……よかつたね……」

そう言つて離菊は学校を出た。

朝がやつて来る、おわかれんなに早く失恋するだなんて誰が予想しよう。

離菊は家を出ると、そのまま学校に行つた。もはや、彼女ができるだけ起きて少ししつゝがどいにある？

昨日は、あまり眠れなかつた。自分の気持ちを安寧にも幾斗にも伝えなかつた悔しさが離菊の脳内でグルグル回転している。

後ろの席に目をやつてみたが、幾斗はなぜか学校に来ていないのか席にはいなかつた……。

昼、安曇と弁当を食べていた雛菊は、安曇に聞いてみた。

「赤城くん、なんで今日休みなの？」

「寝坊でもしたんじゃないかな？起こしに行かなかつたの？」

「なんで？あなたが彼女になつたんだから彼氏の面倒くらゐてもいいんぢやない？」

ちょっと嫌味に聞こえたかもしない、自分のせいどころなつたの人にあたるなんて・・・私つて最低かも・・・

安曇は不思議そうな顔をして、

「ちよ・・ちよつとまつてよ・・・私の彼氏は赤城くんぢやないよ？」

「へ？だつて昨日、幾斗君をつれてつたら告白できたつて言つてたじやない？」

「でも、話が組み合わない？なんでだろ？・・・そこへ

「会長！なんで起こしにきてくんなかつたんだよ！寝坊しちまつたじやねーか！」

そう言つて、幾斗が2人の近くに腰を下ろし、聞いてくる。

「ね・・・ねえ。昨日、糸河さんは、誰に告白したの？」

幾斗に聞くのが一番早いだろ？と思つた雛菊はさつそく幾斗に聞いてみた。

「はあ？武藤にだろ？たしかそうだつたよな、糸河！？」

「う・・うん」

少し、赤い顔をして、安曇は言つた。

「・・・つまり すべて私の勘違い？

身体のすべての力が抜けたかのよう、雛菊の身体はへなへなと床に倒れた。

「か・・・会長さん！だいじょうぶ？」

安曇の声がするが、すべての悩みが一瞬でたち消されたといつ安心感で、もう燃え尽きていた……。

少しあつて雛菊が聞いた話だが、武藤勇気くん（糸河の好きな人）があの日、偶然屋上に来たため安曇は雛菊が呼んでくれたと勘違いしたのであった。

幾斗はといふと、それを影でみていたらし。

昼休憩が終わりに近づいてきたので、安曇と雛菊は弁当を片付け、教室にもどらうとした……。

「会長さん。武藤くんがね、明日から一緒に屋上で弁当食べていいくつて言つてきたんだけど……・・・幾斗くんはいいつて言つてたけ

「会長さんば？」

「も・・もちろんいいわよ。」

その、武藤くんって人とも仲良くなれるかしら？ そう思っていた
雛菊に安曇は言った

「会長さん。私、今回の一件でわかつたんだけど・・・」

「なにが？」

「会長さんて、幾斗くんのこと、好きでしょ？」

生徒会長はひどく、赤面したとや。

第8話・そんなことがありますか・・・？（後書き）

「メンソーラーありがとうございます。これからも、メンソーラーお手紙をお待ちしております。よろしく、お願いします。

第9話・レモンヒルズ、暑くてタリーズ

時間的なことがまだ、はっきりしていなかつたみたいなので紹介します。

現在、7月の中旬。もつ少しで、高校初めての夏がやつてくるころあいです。

「あつー

ズボンの裾をめくりあげて、ヤンキースタイルになつている幾斗が今にも枯れそうな声で言つた。季節は夏！何年も土の中で育つてきたセミたちが、初めての地上で大合唱をおこなつている季節である。

「ここ」、青海高校はまあ、普通の高校なのでクーラーもないし、水泳の授業が無い！昔はあつたらしいが、学校の事情で無くなつた・・・。

時は昼。屋上で4人の人影が弁当を食べている。雛菊、幾斗、安曇、そして新メンバーの武藤だつた。武藤は、前回の話をみてたらわかるように、安曇の彼氏である。まあ、不良で髪は金で耳にピアスつて感じのかつこうである。教室では、安曇の隣の席・・・。

「赤城くんは、夏休みなんか用事ある？」

「安曇が幾斗に質問した。幾斗は

「バイトがあつけど、ずっとじやねーから暇な日もあんじやね？」

「会長さんは？」

「わ・・私は、生徒会の仕事があるけど、たぶん大丈夫よ」

それを聞いて、安曇は満足そうな顔をすると

「じゃあ夏休み、4人でどつか行こうよ

「ちょ・・武藤君はだいじょうぶなの？」

とりあえず、武藤にもと思い雛菊は質問すると・・・

「僕ですか？だいじょうぶですよ。」

みなりに似合わず、言葉が丁寧なのが特徴だ。なるほど、だから安曇が不良ぼくないと言つたのか？

「武藤君には、あらかじめ聞いたの

そう安曇が説明すると、

「で？いつ？どこに行くんだ？山？海？川？映画館？それともデパートか？」

幾斗の質問に安曇は「ふつふつふつふ」と得意げに笑いながら。

「夏といったら、祭りでしょ？」

まあそういうわけで、8月に夏祭りに行く事が決定した。

夏祭りと言えば、浴衣！安曇と雛菊は7月の終わりに2人で浴衣を買いにショッピングに行き、高校生が買える値段の浴衣を買った。雛菊はピンクに花、安曇は青に蝶の模様が描いてある浴衣だ。しかし、着かたがまったく解らなかつたので、浴衣屋の店員さんに丹念に教えてもらい、それから3日後にやっと着こなせるようになった・。

祭りは、8月4日。つまり明日である。離菊はドキドキしていた。友達と遊びに行くなど初めてだし、しかも幾斗と一緒に行けるのだ・・・。変な妄想が頭をよぎってもおかしくない。胸の高鳴りがピークに達したのと同時に携帯電話の着信音が鳴った。

ダダダ、ダン！ダダダ、ダン！ダダダ、ダーン！
ベートーベンの運命の着信音が鳴ると、離菊は携帯電話を持ち上げ電話にでた。

「はい、もしもし？」

「あ、会長さん？私」 明日の集合時間は5時だったけど、私と武藤くんちょっと遅れるから、先に祭りに行つてくれない？」
と安曇からの電話であった・・・

またに、妄想がピークに達する？瞬間だった。

これは、運命かもしれない。

ねえ？ルートビッヒ・ヴァン・ベートーベンさん？

第9話…ルルルルルル、書くタリ～ゼ（後書き）

作者に感想、手紙をよかつたらくだせご。おまかじておつます。

第10話・祭り会場つて・・・茶碗の中の米粒の気持ちがよくわかる。

現時刻は4時55分！雛菊はすべての準備を整え、家を出ると
じろだつた。自然と胸が高鳴り、顔がニヤけてしまつ・・・

私としたことが・・・

集合場所は、青海公園の前であつた。いそいそと玄関を飛び出し、
雛菊は5時ぴたりに公園についた。幾斗は雛菊より前に公園に來
ていたらしく、公園のベンチに座つてコーヒーを飲んでいた。雛菊
はあわてて近づいて・・・

「『』めん、待つた？」

雛菊の質問に幾斗は、

「うん」

と答えた。遠慮の無いやつなのである。

「でも、集合時間ぴたりだからいいんじゃね？」

そう付け加えると、幾斗は「はやく行こうぜ！」と叫つて、ベン
チから立ち上がつた。

ついでに書いとくけど、幾斗のファッショնはGパンに黒Tシャツ
つて感じでまあ普通だった。雛菊は言つまでも無く、浴衣である。

祭りがおこなわれるのは、隣町である。電車にのつて2人は隣町
へ行こうとした。

ガタン「トン」ガタン「トン」

あ…暑苦しい まあ、誰が乗つてもそう思つだろ？ 仕事帰りのօつさんや祭りに行こうとする若者などで電車の中はあふれかえつていたからだ。

なんとか、隣町までやつてみると駅前の大広場で盛大なお祭りがやつていた。

「うおーはじめて來たけど、すげー規模だな」りやあ
幾斗が感激の声を上げている。

とりあえず、広場に入つてみると・・・やつぱりすゞい人の数・・・屋台は何個もありどれから行こうか迷つぼびだ。

「たこ焼き！たこ焼き食べよつぜー！」

「う・・うん」

幾斗の提案に雛菊は賛同すると・・・

「次は、焼きそば食おつぜー」

「・・・・」

「会長！次は、りんご飴！その次は、お好み焼きで・・・次は・・・」

「・

・・・・・・つて・・・食べ物ばつかじやない！ と突つ込みたくなる！ いつたい何個食べるんだろう？ ・・・食べすぎじゃないかなあ？

雛菊は、たこ焼きだけにしといた・・・。

それから少しあつてからである・・・雛菊は広場内を右往左往していた・・・幾斗とはぐれてしまつたからである。幾斗が「牛串買つてくる」といつてどつか行つてしまつたきり帰つてこない・・・

「はあ・・・」

ため息が漏れた・・・トボトボと広場内を歩いていたが、最後には疲れて近くのベンチにチョコパンと座つた。

なんだか、おなかすいてきた気がする・・・せつせつ幾斗くんと食べとけばよかつた。考えてみれば、たこ焼きしか食べてない・・・たくさんの人が楽しそうに歩いてる、私は1人で寂しそうにしてる・・・ただはぐれちゃつただけなのに、とても寂しく感じた。なぜだらう・・・。

孤独つて・・・

すると、誰かが後ろから肩をたたいてきた。ビクッと肩が反射的に動いた。誰？

「会長ー、ビニコつてたんだよー！探したんだぜー！」

そう言つて幾斗が牛串を1本離菊に差し出した・・・

「はいよ。俺のおじり・・・たく、会長がいなくなつちやつたらさめちやつたけどな・・・」

すじく嬉しかつた・・・

「ごめん・・・ありがと。」

私をいつも孤独から救つてくれるのは、幾斗くんだけだあ・・・

あつくてあたたかい何かが心の中をくすぐった。

「会長、そいやあ糸河たち来てたぜあつちで待ってるぜー。」

まあ、そんな感じで全員集合一てなわけでおもいつきし祭りを楽しんだ！

「赤城くん。私、金魚すくいしたい」

雛菊がそう言つと、

「ええー金魚つて食えねーじゃん！」

食べ物のことしか考えてなかつた・・・

とりあえず金魚すくいをしてみた、安曇は1匹もそれなかつたみたいだし、武藤も1~2匹だった。雛菊も2匹だけだった・・・しかし！

「赤城くん、何匹とれた？」

雛菊が聞くと

「あ？ こんなに・・・」

たらいいつぱいの金魚をみせる・・・1、2、3・・・軽く1

00匹はいる

「赤城くん、こいつの得意なの？」

「はじめてやつたんだけビ・・・」

その後、幾斗は射的、ヨーヨースクイ等で脅威の特技を発揮していた。まあ、商品の山つてわけである。

「大量！ 大量！」

4人が喜びながら歩いていると、雛菊が真っ白な服に身をつつんだ

男の人にぶつかってしまった。

「す・・・すみません」

雛菊が男の顔をみると、グラサン、リーゼントといかにもヤンキーつて感じの男が立っていた。

アワワワワワ 「これは、まずいんじゃない?

そう思いまわりを見ると、安曇も、武藤も幾斗も白い服を着た男たちに囲まれていた。

白い服、それは間違いない特攻服だった・・・。

すると、1人のリーダっぽい男が4人に近づいてきた・・・そして、

「久しぶりだな、武藤！」

そう言って、雛菊たちを睨んだ・・・

第10話・祭り会場つて・・・茶碗の中の米粒の気持ちがよくわかる。 （後書き）

作者に感想ください。おねがいします～なんでもいいので、

ブログです～キャラクターについて詳しく載っています。

<http://star.ap.teacup.com/neko>

見てみてください。。。。

白い特攻服の男たちは武藤に田をやり、

今田は？なんの用ですか？まさか、また遠征ですか？」「ぐくぐく

そう嫌味に言うと私たちをぐるりと眺めると、

て・・・・「俺がちをなめでんてかこんが支一、並は」がうねてき

幾斗、安曇、離菊は何のことだかまったく理解できない・・・。
遠征？下つ端？

すると、幾斗がわかつたぞ！つて感じで腕をポンとならすと、

そう質問した。
・
・
・
。

「いかにも、白龍爆走連合のものだ！」

やうはり、総理には、一にて口へんをい放かあるとほ聞いてたが、の隠帳つゝておまつはねえ、じか、勘定つづけ一ぞくれば

いかな？俺たちは族じやないし、遠征しに来たわけじやないんだけ
ど？」

幾斗の言葉に白龍とよばれる族の総長らしき人物が言った。

「 そうか、 それは悪かった・・・でもな、 この男ははなしぢやお
けねえ！」

そういうて、武藤を指差す・・・武藤くんってなにしたんだか?

「白龍さん、ぼくはもう爆鬼天は抜けましたよ？だから、別にいいじゃないですか・・・」

そう武藤は言つ・・・

「えつ・・・武藤つて、もとゾッキーかよ？あははははははマジ？あはははは」

そう言つて幾斗が笑つていた・・・。武藤君はもと、暴走族なんだ・・・まあ不思議は無いけど・・・

（）で説明

それは1年前の夏のことである、（）青海町と宝美町（隣町の名前）に2つの暴走族チームが生まれた。青海に爆鬼天、宝美に白龍爆走連合。仲がよかつたかと言えば、そんなことはまったく無かつた。2チームは激しく競い合い、時には争い、喧嘩した・・・・・爆鬼天に所属していた武藤は、とある喧嘩で白龍のチームの頭をボコボコにしてしまったわけである。その後も戦いは続いたが、武藤は高校に入学すると同時に爆鬼天を脱退したのであつた・・・

「抜けたとか関係ない！あの時の恨み、きつちり払わせろ！」

そう言つて、白龍のやつらは、鉄パイプやら木刀やらバットやらを持つてゾロゾロ集まってきた。軽く20人はいる・・・・（）の5倍・・・

「あの時攻撃してきたのはあなた方でしょう？返り討ちにされたくせにこの人数で仕返しをしようとするなんて聞いたことありませんが？」

武藤が余裕そうな表情で言つた、

「るせえー！と言わんばかりに数人の族が4人に飛び掛る、もち

ろん安曇や雛菊であつても問答無用！

「キツ

なにか鈍い音がした・・・敵の奇襲に田をつぶつていた雛菊がそつと目を開くと、自分をかばつて背中を木刀で殴られた幾斗がいた・・・。

続けて鉄パイプがくる・・・

バン！バン！バン！

鉄パイプの猛攻をうけた幾斗は唇から血をたらしながら四口四口と立っていた・・・武藤も同じようにボロボロにされてるみたいだつた・・・

「んにゃう！」

そう言って武藤が特攻！しかし、袋叩きにされている・・・やはり人数差がある・・・

「ゆるして欲しけりや 土下座しな！バーカ！」

そう言つてくる！

「誰がするかよ！」

幾斗が言い返す！そして、チュルリと唇についた血を手でぬぐうと「せつかく楽しく祭り來たのに、お前らのせいでがっかりだよ！クソが！真面目に殺すぞお前ら！」

と言い放つ。どにまでも強気だ！

しかし次の瞬間、バットで殴られ地面に倒れてしまった。

雛菊はヤバイと思った。このままだと確実に病院送りだ・・・そして決心した。

「どうれ、ゆるしてください。お願ひします。」

やつぱり白龍のやつらの前にひれ伏した・・・よつするに土下座したのだ。

パシヤア

携帯のカメラのシャッター音がした・・・。雛菊が顔を上げると白龍の奴らは一矢一矢しながら

「これ、青海高のやつらにこれ、おくつとく~」

そう言った。

「かまわないわ! そのかわりゆるしてくれるんでしょ? うね?」

「ゆるすわけないじゃん。」

パーン

聞いたことあるような音が響く、グシャ! セツセシヤメが撮られた携帯が誰かに踏み潰される。

「調子のんなよ?」

幾斗がゆっくり言つと3人の白龍の人気が地面でのびていた・・・この光景どつかでみたような・・・

パーン

少し離れたところでも同じ音がした、武藤の前に2人の男が倒れている。

「な・・なんだ、お前ら!」
なんだかお決まりの言葉だ・・・

すると、幾斗が白龍の総長の襟をつかみittiた。

「ああ、誰でしょうね？」

総長が腕に手をやると、黒猫がニヤリとわらった入れ墨がしてある。
・
・

「ひい・・・い・・・幾斗さん？幾斗さんですか？」

「ああ、そうだ。」

それを聞いて族の奴等は、ビビッテ動けなくなり最後には

「ひ・・ひくぞー幾斗と武藤じや勝てるわけねえー！」

そう言つて消えていった。

私の友達および好きな人つて、とんでもない人なんじゃないかな
あ？

あらためてそう思ひ離菊だったが、いまさらである。

第1-1話・猫は「タシでもねへなる（後書き）

アクセス数が少なくて寂しいです。おもしろくないなりコメントくれ下さい・・・なおします・・・

番外編をつくりました

爆音戦争

<http://ncode.syosetu.com/n5350>

武藤や幾斗がかわった、中学時代の族。爆鬼天と白龍爆走連合の勢力争いの最終決戦を書いたものです。暇でしたら読んでみてください。ありがとうございましたコメントください。夜露死苦お願いします。

第1-2話・フェルマーの最終定理より深刻な問題・・・(前書き)

テスト終了しました・・・

第1-2話・フェルマーの最終定理より深刻な問題・・・

「それでは、みなさん、これからも青海高校の生徒だという自覚をもつて行動してください。以上です。」

そう言つと離菊はぺこりと礼をすると朝礼台から降りた。

永かつた夏休みが終わり、青海にも秋が訪れようとしているのである。まだまだだけど・・・

その後、教師による永いグダグダ話が続き、退屈な時間が過ぎた。・・・大げさに言つとみんな目が死んでた。（教師以外・・・）

青い色一色の空の下のグラウンドで全校生徒が集合して、現在朝会中だ・・・

夏休みにはイロイロあつたが、それも今では楽しい思い出だ。・・それは安曇にも武藤にも、もちろん幾斗にも同じであつた・・・

「会長、よくあんな人前で堂々とものが言えるねえ・・・たいしたものだなあ・・・」

幾斗が感心の声を上げる・・・

やつと朝会が終わったころ、教室に向かう廊下での話である。

「ぼくも、感心ですよ・・・さすが生徒会長さんですね」

武藤が冷やかしなのか本気なのかわからないような言葉をかけてく

る。

「そ・・・そんなことないわよ・・・」
多少照れくさそうに雛菊はつぶやいた・・・。安曇も一ノ一コしながら雛菊にちよつかいをだす・・・。

今日から、また楽しい学校生活が後れるんだ・・・。
雛菊の胸はつきつきしていた・・・。

すると・・・。

「あつ！おい、赤城！武藤！ちょっとこっち来なさい！」
教師の中の1人、生徒指導の日向野ひがのが武藤と幾斗を呼び止めた・・・。

「ああ？」

態度の悪い返事をすると、日向野は・・・。

「2人はちょっと生徒指導室に来なさい」

「はあ？タリーなあ～」

そう言いながら2人は生徒指導室に連行された・・・。

なにかしたのかなあ？心配そうに2人を眺める雛菊と安曇・・・。

「まあ、あの2人なら生徒指導なんて御茶の子さこいだらうけ
ど・・・・・」

安曇の言葉に雛菊は納得しながら教室に帰った。

授業が開始された。

「えーと、こここの問題は正弦定理を使ってだな・・・。

前の席の安曇は「どうとスーパー」というかわいい寝息をたてながら深い眠りについていた……やれやれ

「よし、じゃあ山内一樹の問題はどうやって解くんだ?」

数学教師の柳原^{やなぎはら}が雛菊に質問する、こんな問題雛菊にとつては簡単であつた……

「えーと 余弦定理です……」

「それはどうして?」

「三角形の辺がすべてわかつているため、余弦定理のほうが簡単に行えます」

「その通りだ」

まあ、雛菊が頭のいい事を証明しただけです……。雛菊なら20世紀最大の難問(フェルマーの最終定理)を1日で証明しそうだ……(ようするに頭がめちゃめちゃいいってこと……)
この後もsinAがなんちゃらcosBがどうしたこうしたと授業が進んでいった

4時間目の授業が終了して、チャイムが鳴る……

安曇と雛菊は屋上に上がろうと廊下を歩いていて、ちょうど生徒指導室にさしかかった瞬間、生徒指導室のドアがガララーと開いたと思つと、めちゃめちゃ怖い顔の幾斗とそれと同時に怖い顔の武藤が出てきた……。

雛菊と安曇は一瞬退いてしまった、まあ誰でも震え上がるつづきの怖い顔であった……もしこの顔を泣いている子供が見たら、無理しても泣くのを止めるだらうといつ顔である……。
とにかく2人はキレイだったのである……。

「で何があつたの？」

屋上で弁当を食べながら、雛菊が幾斗に聞くと不機嫌そうに

「別に！」

ただそれだけである・・・武藤のほうも

「何でもありませんよ・・・」

キレイでいても敬語なのがこいつらしい・・・

いつたい何があつたのだろうか・・・この顔からみて絶対なにかあつたに違いない、いつもなら生徒指導されたつてまったく動じない2人である・・・

いつたい何があつたのだろうか？雛菊の疑問が頭の中をグルグルまわっている間に、空には暗黒の雲が支配する場所となっていた・・・よつするにてんを悪いってことである・・・

ポツンポツンと雨が降りはじめた・・・これから始まる大波乱の予言のように・・・

フェルマーさん・・・オイラー・・・ド・モルガンさんでもいいや、

こんなことにはならないって定理をだしてくれない?
そう、後々後悔するはめになるのであった・・・。

第1-2話・フェルマーの最終定理より深刻な問題・・・(後書き)

久々に投稿します。

第1-3話・～運命の鳴る頃に～（前書き）

お久しぶりです　～～

第1-3話・～運命の鳴る頃～

「ちよつとまで幾斗・・・これ以上やつたら承知せんからなー武藤もだぞー絶対禁止だ！」

「ふざけんな！このクソ教師！」

「な・・誰がクソだ！」

生徒指導室での会話が幾斗の脳裏によみがえる・・・

「クソがあ！」

自然とが身体が動き、近くにあつたゴミ箱を蹴り飛ばしていた。

ガゴーン！

ゴミ箱がガランと倒れ、中のゴミが散らばる。まるで幾斗の心の心のようになつた。

なんで・・・なんで俺が・・・

不安と悔しさで思いがいっぱいになる・・・

「畜生・・・」

考え込む幾斗の背中を武藤がポンポンとたたくと
「気にする事ないですよ、あんなのシカトすればいいじゃないですか？」

「そうだな。」

キーンコーンカーンコーン

5時間目の授業がはじまるチャイムが聞こえる。

2人の不良は雨の中、校門を出た。

後姿が雨にぼやけて消えていった。

午後、雨が降り始めた・・・

5時間目が始まったころには大雨となり、教室からみる窓から水がバケツをひっくり返したような勢いで滴れている。今、後ろの席に幾斗はいない・・・・。もちろん武藤もいなかつた。

静かな教室に教師の声と雨音が響き渡った・・・

安曇はなんだか寂しそうな顔をして授業を流していた・・・

雛菊はため息ついた・・なんだか面倒なことになつたのかもつしれないと思つたのだろう・・・。

学校も終わり、すでに雨も小降りになつていて。幾斗と武藤の靴箱には靴が無かつた・・・

「帰つたんだ・・・」

「そうだね・・・」

2人でそういうと、別れを言つて帰つていつた・・・・・

バシャバシャと水溜りを踏んづけた時に水が飛び散る音がする。靴がドロドロになりながら雛菊も安曇も家に走つて帰つた。

誰もいない家に帰つてきた雛菊は部屋に上がりすぐベットに倒れこんでしまつた。

雛菊の母親は、有名なヴァイオリニストで父親は大会社の社長。父の会社は大型電気ローンで日本でも有名な店である。最近では、海外にも進出した。2人は仕事でほとんど家にはいないのでいつも雛菊は家で1人である。

友達も、彼氏も、家族もいない。孤独の中で生きてきた少女。それが、彼女だった・・・

今は違う！ちゃんと友達がいて、相談相手がいて・・・そして・・・好き人がいる。

彼女にはそれが幸せでしかたなかつた・・・だから、幾斗や安曇や武藤はかけがえの無い存在だつたのだ・・・

学校に行きたくなつた。

はじめてそんな気持ちを抱いた雛菊だった・・・

学校に行く前に毎日ちやんと幾斗を起して行く。それが毎日の習慣になっていた。

いつも、ひどい寝癖で出でてくる幾斗がおもしろかったし、幾斗の妹さんも可愛かった。毎日の楽しみである。

「かいちょ～お。オッハ～」

寝ぼけて言う幾斗・・・というかそのネタ古くないですか？

いつたん顔を見せた後、すぐ部屋に引っ込み、2分後には学校での幾斗が出来上がっている。いつたいどんな作業を・・・見てみた

い気もある・・・。

「あー行こつか。」

「う・・・うん

マンションを出て、幾斗と並んで歩く・・・

最近、幾斗は自転車通学から徒歩通学に変わった。実際、徒歩通学だったのだが許可を取らずに勝手に自転車通学になつたのだった・・・

・それがもとに戻つただけだつた・・・

「赤城くーん。会長さーん」

「コーコしながら元気に走つてくる安曇とそれに続く武藤。

「会長、おはよー！」ぞこます。」

敬語で挨拶する武藤にあいさつして4人で登校する。

風が髪をなびかせる。暑かつた夏にそろそろ終わりが来るのだろう・・・セミも鳴かなくなつた。

校舎の中は生徒達のしゃべり声や叫び声、歌声が響き渡り実に青春っぽい・・・

幾斗や武藤はツカツカと校舎をのし歩き、その後を雛菊と安曇はついて行く。教室までさほど遠くない。階段を上がつたらすぐだ・・・

教室に4人が入ると、今までしゃべっていた人たちがいつに静まり返つた・・・

いつものことであつた・・・

なぜなら、幾斗と武藤は超不良、安曇はそのパシリにして彼女、雛菊は生徒会長である・・・

当然と言つては当然であつた・・・

しかし、なぜかいつも以上にだんまりとした空氣がする。なぜだろう?

4人が席に座つて話し始めるといつしかその空氣も元のガヤガヤした空氣に戻つていつた・・・

HRが終わり、授業開始までの休憩中に教室に慌てて入ってきた教師がいた。年齢は34歳で髪はロング・・・少し美形?のその教師は教室になにやら入つてくるなり、

「ちよ・・・ちよつと・・・武藤と幾斗は生徒指導室に来なさい」

「はあ？ 日向野ーまた昨日のクダンねー話じやねえだらうなあ？」

？」

「昨日のことだー注意したのになるとわかつてないじゃないか！」

来い！」

そう言つて2人は生徒指導の日向野にまた、連行された・・・

昼休憩、2人は屋上に顔を見せることも無く、午後の授業にも出でていなー・・・・・

武藤と幾斗は不良なので、生徒指導室はあたりまえなのかもしけなかつたが、雛菊にとつてはそれは嫌だった。なんせ学校で会える時間が短縮するのだ・・・・・

結局、その日幾斗と武藤には会えなかつた・・・・

日が暮れて、雛菊が家に帰り着いた。手を洗い終わると、自分の部屋に行き一休みする。その後雛菊は机にかじりついて勉強をする・・・。

今日の数学・・・今日の英語・・・予習に復習、頭のいい雛菊はそれなりに努力をしているのだ。

その時、携帯電話の着信音が鳴つた・・・ベートーベンの運命の音が鳴る・・・・

「はい・・もしもし雛菊ですけど・・・・

「あ・・・俺、幾斗だけど・・・・」

幾斗だった。雛菊は少し胸を躍らせた・・・用事はなんだ

るひー・

少し期待がこもり、自然と携帯電話を強く握ってしまう・・・する

「 明日から、起きてこなしてくださいから。……………じ ゃ 」

ブツ 電話が切れた・・・切れたのただただボー然と立ちすくむ
しかない雛菊だつた・・・・

世界が止まったように感じられた一瞬だった・・・・

第1-3話・～運命の鳴る頃～（後書き）

まだまだ下手な小説ですが、読んでくれれば光栄です。出来れば、コメントください・・・まつてます。

第1-4話・トマトの花火をとむるトマトの命題一

え？

まったく意味がわからない。突然の電話で突然の言葉で……あまりにも突然すぎる出来事に離菊は混乱していた……

「……なぜ？……どうして急にそんなこと言われたのだろうか……まったく検討がつかない。」

幾斗くん、ついに私のことが嫌いになっちゃたんじゃ……それ以前に好かれてもいなかつたとしたら？

脳内で”嫌い”という言葉がグルグル回っている……

自然と涙がこぼれてきた……枕が涙でぐしょぐしょになった。
きっとなめたらしおっぱいのだろう……毛布にもぐりこむ、不安や恐怖とは違うなにかとても寂しいものが心の中でうごめいている感じだった……

幾斗に電話しようと思った。そしてなぜかを聞きたかった。しかし、携帯電話を握ると指が動かなくなる……手が振るえてまるで金縛りにあつていいようだ……いや、実際にあつていいのかもしれない。

その後、何度も電話をかけようと試みたが失敗に終わった。

次の日、悲しみと寂しさで朝まで一睡もしないまま雛菊は学校に出かけた。

トボトボと通学路を歩きながら、登校する雛菊に安曇が声をかけてきた。

「余暉ちゃん。おはよー。」

「うん・・・おはよー。・・・」

安曇のあこやつに雛菊は海底の深海魚のうなづき声のよつな返事を返す・・・

「ど・・・どしたの?」

雛菊のあまりの暗さに驚いたのか、スットンキョンな声を上げる・・・

「・・・糸河さん・・・ちよつとね・・・」

どつ答えていい河から無ごとのでとりあえずそつ答えておく・・・
雛菊のあまりの暗さに安曇も黙つてられずに

「な・・・なんなの?教えてよー私、友達でしょー余暉ちゃんとやう言つたよね?だつたら相談のるからさあ・・・」

そんな安曇の優しい言葉に雛菊は涙ぐみながら・・・

「い・・・い・・・糸河ちゃん つわーん

「うううわあ ああ

泣きついて来た雛菊に驚きの声をあげる安曇・・・

「え?赤城君がそんなこと言つたの?こつもあんなに仲良かつた

のに・・・・

学校についてから安曇はHRが始まるまでの間、雛菊の相談にのつていた。

「なんでだろ？ 私、なにか嫌われるようなことしたかなあ？」

「なにか心当たりは？」

顔を下にして心当たりがないかを頭の中で検索するが、雛菊はすぐ

に顔をあげて

「わかんない。」

「・・・・・」

さすがの安曇もまじつていいようだった。なんせ、手がかりがまったくと言つてよいほど無いのだ・・・そして最後の手段に出ることにした。

「じゃあ私が赤城くんに聞いてこようか？」

安曇の提案を雛菊ははじめは嫌がっていたものの、少しあつてから考え直して、その仕事をお願いすることにした。

今日、雛菊が起こしに行つたわけでもないのに幾斗は武藤とともに学校に来ていた・・・・・教室にはいなかつたけど・・・・・昼休憩、安曇は幾斗に聞きに行くのだ！

キーンゴーン・・・・午前の授業終了チャイムが鳴り、ついに昼休憩が来てしまった・・・・

「じゃあ、きいてくるねえ～」

昼休憩、そう言い残して安曇は教室を出て、足取り軽く、テテテテテと廊下をかけて行つた・・・・・

久しぶりに1人で弁当を食べていた、だれも食べる人がいないの

だからしょうがない……だまつて弁当を食べながら安曇の帰りを待っていた。

きつと、なにかの誤解があつたんだ……

そう心に言い聞かせて、自作の卵焼きを口に放り込む……口のなかで最初は力強く噛んでいたものの、だんだん力が入らなくなってきた。

「ゴクン

なんとか飲み下すと、次のオカズに箸を伸ばそうとした……その時

「あ……あの……会長さん……その……」
安曇の声がした、離菊は一瞬ビクリとしたが安曇だと気付く、どうだつたか尋ねる……

「えつと……その」

「答えてくれたの？」

離菊の間に安曇はコクリとうなずき、ゆっくりと口を開いた……

「迷惑だからだつて……」

「えつ？」

「だから、迷惑だからだつて言つてたよ……」

安曇の言葉で、離菊は上空4000mを飛ぶ飛行機から突き落とされた気分になつた……そしてやつと口を開いた……

「ううん……だ……幾斗くんにごめんねつて伝えとい、もう一度と迷惑かけないからつて……」
それが離菊の精一杯の言葉だつた……

私の存在は、赤城くんにとつて邪魔だつたんだ……そんなこ

とも気付けなかつたなんて・・・私、最低！

自然と、教室を飛び出していた・・・

「かいちょさーん　かい　ちょ　さーん　かい　ちょ

安曇の声がはるか後ろから聞こえてきた気がした・・・でも、雛菊は気付けなかつた・・・

トイレに駆け込み個室に閉じこもつた・・・鍵を閉めた瞬間、涙がどつとこぼれ出た・・・

「めん・・・」「めんね、幾斗くん・・・私、一度と幾斗くんに迷惑かけないから・・・私、一度と幾斗くんに近寄らないから・・・

う・・グス・・・ぐすっ　う、グス、ヒック　ぐすっひっく

誰も居ない女子トイレで生徒会長の鳴き声がこだましていた・・・

第14話・トマトの花やとなりのトマトの成長ー(後書き)

久しぶりの投稿です。いつも見てくださるかた、感謝しています。なにぶん経験が少ないもので、コメント、感想を出来ればいただきたいです。お願いします。

第15話・Black day 消せない口ウソク（前書き）

少し、変態になってきたような・・・すみません。

第15話・Black day 消せないロウソク

今日、9月6日は山内雛菊の誕生日である……世間一般の高校生の誕生日と云うと友達や彼氏、親などからプレゼントをもらい、祝ってくれるところのが普通だろう……

そんな中、普通の誕生日をおくれない女子高生がいた。誰かはわかると思いますが……そう、山内雛菊である……

キーンローンカーン……

朝、雛菊は学校に来るのが苦痛でしじうがなかつた……昨日、幾斗が言つたことがあまりにもショックでしじうがなかつたからだ……

登校中、足が重くて何度も立ち止まつた……学校に行つたらまた迷惑かけるんじやないだろつか……そう思つたからであつた。しかし、行かないわけにもいかず、結局学校に到着した……

学校では、幾斗は言つまでも無く、武藤と安曇が今日はやけに冷たかつた……なにか話をうそと声をかけると生返事が返つてくる……

とうとう友達も無くしかけているんじゃないだろうか?

雛菊の心の傷は深くなるばかりだった……

そして、授業が始まった……

先生の話なんか耳に入らないまま午前の授業が終了してしまった。・
・・今日も静かに1人で弁当を食べるはめになつた・・・。

私は、友達ができたからつてすこし調子に乗りすぎていたんじゃ
ないだろうか・・・だから、みんな・・・

雛菊は心の中で深く反省していた・・・。別に彼女が悪いわけ
でもなんでもないのに・・・・・

3人は今頃なにをしているのだろうか・・・。屋上で楽しそうに弁当
を食べているのだろう・・・

涙をこらえながら、雛菊は弁当を口に押し込んだ・・・

1日の授業が終わるのがすぐ永く感じられた。時計壊れてるの
かも（違います）

しかし、時というのはちゃんとたつもので、永く感じられても時
は流れているのだ……

授業が終了し、生徒は各自、部活に行くなり帰るなりしている。雛
菊にはまだやるべき事があった。もうすぐはじまる文化祭の資料を
まとめなくてはいけないのだ。

誰もいない生徒会室に入り、会長専用の机に座ると一人黙々と仕事を始めた。

すると、突然携帯電話の着信音がなった…

「はい、山内ですけど？」

電話に出るとそれは実の母からであった…

「離菊？私よ～元気にしてる？」

「あ・・お母さん。うんしてるけど？」

母の問いに離菊は何もなかつたような口調で返事をする…

今日、離菊の母と父は家に帰つてくる予定なのだ、そりやあ実の娘が16歳の誕生日をむかえると喜びのに、ほつとくわけにもいかない。今日、両親が家に帰つてくるのだ。離菊は心の奥では心底楽しみにしていた…

すると、母は

「あのね、離菊…今日、私もお父さんも家に帰れなくなっちゃたのよ…」めんね

「え？そ・・そんなあ…」

「本当に…」めんね…いまの仕事が一段落したらすぐ帰るから…」

離菊は内心、本当にガックリきていた。久しぶりに両親に会えると思つたら帰つてこれないと言われたのだ。

誰だつてガックリするのが普通。そしてダダをこねるのが普通かもしれない…

しかし離菊はまったく声を変えず

「いや、いいの。予想はしてたから。じゃあお仕事頑張つてね。
じゃあ

ブツリと電話を切ると離菊は机につづぶせになってしまった…

いつも不幸が続くと誰しもそうなるだろう…まして、離菊は今日誕

生日なのだ…

5分ほどつづぶせになつていたがまた顔を上げてまた黙々と仕事を再開した…

そこへ

「お誕生日おめでとう。ぼくの雛菊」

そんなキモイことを言いながら誰かが突然生徒会室に入つてきた・・。

「だ・・・だれ？」

雛菊の問に入つてきた男は

「ぼくだよ」

そつ言つて、顔をみせる

そこには、雛菊が予想もしていなかつた人物がいた・・・

え?せ・・・せんせい?

「先生……？」どうしてんですか？ていうか、ぼくの雛菊つて……あのお・・なんの冗談でしようか？」

そう、そこに立っていたのはまさしく生徒指導の先生。田向野だつた……

「じょうだんなんかじやないよ。君はぼくのものじやないか」何気ない口調でとんでもない事を言い出す。ですがの雛菊も

「え・・その。先生！ そういう冗談、本当にやめてください。」と拒絶の態度をとつた。しかし、田向野は雛菊の話をまったく聞いていない様子だった。「ヤニヤしながら雛菊を眺めている。それはとてもいやらしい目つきだつた。

雛菊は危険を感じ、外に出ようとするとドアの前に田向野が立っているため出れない……逃げ道が無いか周りを見るがそんなものどこにもない。ヤバイ……

そうしてこの間に、田向野はジリジリと雛菊に近寄つてきていた……。何がじうなつているのかまつたくわからない……なぜ私はこの先生にならわれているの？ 雛菊は田向野に精一杯の拒絶の言葉を言った

「先生、やめてください。本当に……

言つてゐる途中、田向野がいきなり前進してきて雛菊の腕をガシッと捕らえた。

「イタつーや・・やめて……」

「そんなこと言つちゃつて・・・本当は嬉しくせに」

そんな妄想じみたことを言いながら自分の腕を雛菊の背中にまわしていく……そして雛菊の身体を自分に引き寄せようとする……

「い・・・いやー、やつー、やめて！」

雛菊は抵抗しようとするがまだ16歳の少女が男のしかも大人に力で勝てるわけ無く、無理やり抱かれてしまつた。

田には涙が浮かんだ。もちろん嬉しさではない。恐怖ゆえだつた。
・・肩に田向野の臭い息がかかる・・・これからどんなことをされるのか・・・想像するだけで気分が悪くなつた。

「この人、狂つてゐる。

雛菊はそれだけはわかつた・・・。気持ち悪い。そう思つた。そんな雛菊などおかまいなく田向野は

「雛菊、いい臭いだねえ」

と変態的なことを言つた。

「つこの一変態！ はなしてよ！」

雛菊は必死に叫ぶが田向野は聞き入れない。むしろ雛菊が叫ぶ姿をみるのが嬉しいようだつた。そして、

「ねえ、そろそろ自分に素直になれよ。ぼくのことが好きでたまらないいくせに。」

そして、顔を強引に近づけてきた。

「いつ嫌あ！ いやあ！」

泣きながら叫ぶ雛菊に田向野の脣が重なるひつとした瞬間・・・。

雛菊をつかんでいた腕ははずれ、さつきまで目の前にあつた田向野の顔も目の前から消えた・・・。

力が抜けたように雛菊は床にヘナヘナと座り込んだ・・・。

田向野は頭を生徒会室にあつた机で強打していく うううう と
うなつっていた・・・。

「そーゆことか！ おかしいと思つたぜ！」

その言葉を発した人を見て雛菊は絶句した・・・。

あ・・・あかぎくん？

「会長、だいじょうぶかよ！」

まさしくそれは幾斗だった、雛菊が日向野とキスする1秒前に幾斗は日向野の頭に強烈な跳び蹴りをくらわしたのだった。

「ど・・・どうして？助けてくれたの・・・？」

助けてくれた幾斗に雛菊は涙をポロポロと流しながら質問する。そんな雛菊をみて幾斗は手で雛菊の涙をぬぐつてやり、

「俺の大事な人だからな。会長は！」

そう、照れくさそうに言つた。

その言葉を聞いて、雛菊は幾斗に抱きついた。幾斗も抱き返してくれた。

あつたかくていい臭い・・・・

幾斗の胸に顔をうずくめて雛菊はうれし泣きをしていた。幾斗も雛菊の自分より小さな身体を優しく抱いていた・・・そして

「かいちょー。誕生日おめでとう」

幾斗がさわやいた言葉に雛菊は胸が熱くなるのを感じた・・・・

第15話・Black day 消せないロウソク（後書き）

なんとか書き終わりました。正直、書くのがはずかしかです・・・
o r n

コメント、感想くれたら嬉しいです。

まだまだ疑問がじゅうまんしていると思いますが・・・それはまた次回ノシ

第16話：のほーんでアッハーンな秋（前書き）

今回は真相の大公開です。

第16話・のほーんでアッハーンな秋

「会長さん、大丈夫？」

「会長、無事ですか？」

そう言いながら2人の男女が入ってきた。まさしくそれは武藤勇氣と糸河安曇だつた……。

2人とも頭に三角のパーティーハットをかぶっていた……。

「う・・うん」

幾斗に抱かれたまま雛菊は答えた……。

「2人ともどうしたのその頭の……えつと……帽子……？」

当然の疑問に武藤、安曇、幾斗はニヤニヤしながら

「いやあ、本当は会長が生徒会室で一人になつた時にクラッカーを鳴らしながら誕生日会を決行してビックリさせる予定だったんだけどよ……」

幾斗が残念そうに呟く……。

「日向野先生が生徒会室について、会長をことあんなことやつてゐるんだもん」

安曇も続いて言った。

「困っちゃいましたよ。正直、かなり驚きました。」

武藤が感想を述べ……。

雛菊は少し前に事を思い浮かべる……。かなり恥ずかしくなる。

・・・

私、あんなとこみられてたんだ……。

「まあ、でも会長が無事ならいいのか！」
幾斗がそう言つと3人は一齊コリ笑いながら

「かいちょー誕生日おめでとぉー！」

クラッカーが鳴る、今年は最高の誕生日になりそう。雛菊はそう思つた・・・・

「うううううううん？っておーーー」「ウハアー！」

突然、日向野が復活した・・・立ち上ると雛菊に近寄つてくる・・・
・またかあ！

パーン　パーン　スパーン

まあ、当然のオチで日向野が床に倒れた・・・顔面に幾斗が最初に、
武藤が2回目に、最後に安曇が強烈なビンタをくらわした・・・・

正直、可愛そつだ・・・・まあ自業自得だけど・・・・

ウゥーウン

パトカーのサイレンの音が外です。

そう、パトカーはここに近づいてきているのだ・・・

「会長さん、わたしが呼んだいたよ、ポリスさん」

安曇が一囁二囁ながら答えた。

その後どうなったかといつと

青海高校の体育教師、および生徒指導担当の日向野正行^{ひがのまさゆき}氏は婦女暴行、変態罪で警察に逮捕された。その後の調べで麻薬を乱用し、極度な幻覚、妄想症状に襲われていた事がわかった。

離菊も、被害者として警察にイロイロ聞かれたが、何事もなく終わった。あつたことと言えば、そのニュースを聞いた離菊の両親は遠い遠い外国からすつ飛んで帰ってきた。まあ、少し遅れた誕生日会もしたらしい。

幾斗の迷惑発言の件の真相は実にアホらしいものであつた・・・。日向野によつて、幾斗、武藤は離菊に近づくなど指導を受けたらしい。日向野は

「お前らが離菊に近寄るから、離菊は勉強にも集中できなこと言つていたぞ！もつちかよるな！」

こんな感じの指導をしていた。まあ、わかるとは思つが、田向野が幾斗たちを離菊に近寄らせないための嘘だ・・・・・

離菊に近寄らなくなつた幾斗に理由を聞きに行つた安曇・・・・・
幾斗は

「俺が離菊に迷惑かけてるから・・・・」の意味で「迷惑だからだ
よー」

と言つたが、安曇は聞き間違えて、とこつか意味を確認せず離菊に
伝えたのだ・・・・・

やれやれ

田向野の事件が終わつたあと、誤解はとけて一件落着した・・・・・
。

まだ、カップル成立とまでは行つてないもの、前よりは比べ物
にならないほど幾斗と離菊の距離は縮まつた・・・・

今日もまた屋上で弁当を食べつゝ。こんなに学校が楽しいなん
て・・・・・

離菊は、深く幾斗、安曇、武藤に感謝していた。

「の人たちがいなかつたら私、どうなつていただりう・・・・・
そんなことを思いながら、今日も一日が終わる。

「『が私の居場所！今は胸をはって言える。それは雛菊だけではなかつた。

今、生徒会の会議の時間だ、生徒会室で各委員会の委員長が集い、会議している。

そんな、生徒会室のドアの前に2人の不良がヤンキー座りしていった。武藤と幾斗だ！

あの事件以来、生徒会室に雛菊が居る時は2人がドアの前で番を張る事になった。

その恐ろしいほどの守護の力に、青海高校内では「生徒会守護隊」または「生徒会親衛隊」とよばれるよつになつた。

後に雛菊たちが卒業した後、正式に委員会として発足するほどだつた・・・

どんな高校だよ！

学校の帰り道、幾斗と雛菊は商店街を歩いていた。あまり人がいなくなってしまった商店街をコシパンと優等生が並んで歩いていた。

「ねえ、赤城くん……」

雛菊が幾斗に話しかけると

「会長、もうつるみ始めて結構立つぜ、幾斗でよくな?

幾斗の言葉に雛菊は少し頬を赤らめながら

「えっ・・・あ・・・うん・・・じゃあ幾斗くん」

少し照れくさかった、下の名前で呼ぶだけでこんなに照れくさいことは……

「なんだよ?」

幾斗になにげない返事に雛菊は

「じゃあ私のことでも雛菊って呼んで……」

ドキドキの瞬間……

「いいぜー!」

雛菊は立ち止まってしまった、その言葉が嬉しそぎて……何

気ない日常がこんなに楽しいなんて……

「はやく～行くぞ雛菊～」

「あつ～ じめん～」

幾斗の背中を追いつぶに雛菊はかけていった・・・。

次回、新メンバー登場・・・。

第16話・のほーんでアッハーンな秋（後書き）

いやあ、これからが大変です・・・コメント、感想くれたら嬉しいです。どうぞよろしくお願いします。

第17話・番外編1、オタクとギャルのハナストーリー（前書き）

今回は少し、番外編です。新メンバー登場

第17話・番外編1、オタクとギャルの「アフストーリ

秋、そろそろ夏の猛暑も終わり、食欲とか、読書とか、スポーツだの秋がやって来る・・・

（）（）青海高校も本格的に秋に染まっていた。そんな、普通の高校の1年B組6班のことである。

1人は優等生、2人は超不良、1人は不良の舎弟にして彼女・・・そして、もう1人居るはずなのだが高校が始まつて夏休みも終わつたというのに未だに顔をみせないやつがいる。ようするに引きこもりである。

その引きこもりの少年は、さすがに夏休みが終わったのに学校に一度も行かないというのはマズイと思い、今日、高校生活初めて、学校に登校したのだ・・・

その少年、佐山友一^{さやまゆういち}は学校に来て思つた。

来なければよかつた・・・

学校に登校し、教室に入つたら「お前だれ？」って目で見られる。そりやあ登校したこともないのに誰かが知つていたらおかしい・・・

自分の机に着席すると、隣はスゴイ美人・・・後ろは・・・髪を青に染めた不良・・・前は普通?の女の子でその横は金髪、ピア

スの不良だ・・・

「おい、お前誰？」

幾斗が突然、友一に話しかけた。

「ひつ！あの・・・その・・・佐山友一と言こます・・・あの・・・
その」

「ふーん、みかけねえ顔だなあ？」

幾斗がジロジロと友一を見回した。友一は怖くなつて、

「ア・・・あの・・・すみません。その・・・」

「はあ？」

普通に言つたつもりなのだらうが怖い・・・幾斗は不思議そつな顔で友一を見た。睨んだとも言つ・・・

「幾斗くん。そんな怖い顔で言わなくとも・・・」

雛菊が幾斗に言つた。

「俺、そんなに怖い顔してつか？」

「うん」

雛菊と幾斗は普通にしゃべつていた。

友一は思った、なんでこの人、こんな不良と話せるんだろう・・・

?

授業が始まり、先生が話し始める。武藤も幾斗も安曇も寝息を立てながら寝ている。

「」の班でまともに授業を受けているのは雛菊と友一だけだ・・・

授業中友一は思った、どうせ学校に来てもぼくは一人だ、友達もない。なんのために学校に来ているんだろう・・・。やっぱ俺には引きこもりがお似合いだな。明日はまた部屋から出るのをやめよう。明日はどのゲームをして遊ぼうか？

別にゲームが大好きなわけではない。友達がないから学校に行つても楽しくない。だから、学校なんて行きたくないのだ。

なんだかんだで昼休憩、さっさと弁当食べてしまおう。そう思つた。一緒に食べる相手なんかいない・・・。そう思つて弁当箱を開けた瞬間。

「おい、ユーチつたか？お前も一緒に飯くわねえ？」

幾斗が急に声をかけてきた・・・

「え？あつのお・・・そ・・・」

「ああ？どうなんだよ！はつきりしろよ！」

幾斗が怖い顔をし始め、友一は断るうと思つたが、安曇が隣で「ユーチ君も行こう行こう」とはやし立てたので結局ついてしまつた・・・

幾斗たちについて屋上行くと、屋上にはあの金髪、ピアスの不良と隣の席の美人の女の子がまつていた。

「わりい～おくれた。」

「新入り連れてきたよ～」

幾斗と安曇が軽くあいさつすると友一を紹介した。

「ユーチつづらしい」

幾斗が言つた・・・

ぼくの名前は友一だけじゃな・・・こわいなあ

友一は弁当を食べながらそんなことを思っていた。

それから、毎日、学校に来た日はこの4人組と弁当を食べる事になつた・・・

この4人が、悪い人たちではない事はわかつたが・・・そんなに好きにはなれない。こんなうわつづらだけの集団なんか・・・こんな暴走族みたいな集団なんか・・・好きになれるはずない。

そんなことを思いながら毎日が過ぎていった・・・学校に友一が行かなくなると、行かなかつた日にかならず友一の家に4人が尋ねてくるようになり、学校にいくしかなくなつてしまつたのだ・・・

はあーめんどくさい！

それからしばらくしてのことであつた。いつしか雛菊を殴つた青海高校の不良集団が廊下をのし歩いていた。最近、また調子に乗り出した彼らは学校の西側トイレを本拠にして学校を荒らしまわつて

いた。

今日も、廊下に落書きをしている真っ最中である。

そこに、1人のギャルが歩いていた。化粧にパーマ、マニキュアといった具合に顔黒以外ちゃんとやつてるギャルであった。彼女はこの学校でも有名なギャルで、なぜ有名かは簡単。

1匹狼だかれである。つまり、友達がないということ……。

友達がないギャル、初めて聞いたという人もいるのでは？

なぜか、この話には孤独を生きる人たちが多いのはなぜ？（作者

（談）

そんな、ギャルの少女が廊下を歩いていた。当然、不良集団は彼女を絡んだ。

「おい！ねえーちゃん。口々を通りたきゃ 金だしな！」

「そうだー金だせこらあ！」

威しをくらい、ギャルの少女もさすがにビビッていた。しかし、彼女には彼女なりのプライドがあるようすで

「嫌です！」

とすっぱりこと断った……。

「はあ？調子乗つてんのか！」

不良が叫ぶが、恐怖を顔に出すことなく、

「お前らがな！」

つまりん意地張って、怪我するのはたいてい弱いもの……。どうして、こんなやつらがいるんだろう……。

「今なら、まだ許してやるぜ？」

不良の最終警告を彼女は完璧に無視した

「お前に許されなくてもいい！」

そう言い放つたと思ったら、当然の如く殴られた。

彼女は床に倒れた、不良達はマジでキレていた。彼女は半殺しにあうのは間違えなかつた。そう、間違えなかつたのだ……そしてその綺麗な顔が傷物にされてしまうのだろう。誰もがそう思った。

「や……やめろよ」

そこには、虫の鳴くような声がした。つまり小さな声が……

「ああ？」

不良達がいっせいに振り向いた。

「や……やめろって言ってんだろ。」

やつ言い放つのは、引きこもりだった友一だった。

不良達はいっせいに笑つて、友一を見た、そして……

「……」、保健室で、傷まみれになつた友一をギャル少女、
山中美貴が手当していた。

「あんたさあーなんであたし助けたわけ？」

美貴が友一に質問した……友一は当然の如く言った。

「君が……いじめられてたから……」

「

本心は違う、美貴が友一の好きな恋愛ゲームの主人公の似てて可愛かつたからであつた・・・（単純）

「そなん・・・あんがと、でもむちやすんなよ。」

ギャルはひきこもりに向かって微笑んだ・・・

「まさか、あんたみたいなのが助けてくれるとは思わなかつたらなー感謝してるぜ」

美貴はそう言って、保健室を出て行つた。

残された友一は胸がキュンと来るのを感じた・・・

これって、鯉？（変換間違いじゃないですよ）

（ww）

第17話・番外編1、オタクとギャルのハナストーリー（後書き）

感想、コメントくれたら嬉しいです。よろしくお願いします。

第1-8話・番外編2、オタクとギャルのハナストーリー（前書き）

ふふふ

第1-8話・番外編2、オタクとギャルの「アストーリー

屋上で昼ご飯。僕、佐山友一は不良少年2人と弁当を食べていた。

今日はなぜか女子2人はいない……たぶん生徒会の仕事か何かでいそがしいのだろう。少し前の僕ならこの2人をものすゞくにわがつていた……でも最近気を許してやる気がする。

引きこもりだった僕を、初対面のぼくを急に誘ってくれたような人たちだ……悪い人じやないんだろうなあ……

そこで、思い切って聞いてみた。

「あの、赤城さん。」

そう呼びかけると、幾斗は友一に顔を向け、動かしていた箸をとめた。

「赤城さんはどうやって奈良さんと恋人どつしになつたんですか？」

その質問で幾斗は口の中でモグモグと食べていたおかずを吹き出してしまった。そして、少し赤い顔をしながら。

「はああ？」

と返答した。友一はとまどいながらもう一度質問する。

「俺は…と…とくに雛菊との関係ねえぜ？」

「えつ？ なんですか？ ぼくはつきり付き合つてるとこと…

…」

「んなわけねえーだろがつあああ！あんな美人で優秀で完璧天才少女と、俺みてえーなダサイ、貧乏不良が付き合えるわけねえだろうがつああああ？」

怒ってるのか照れてるのかわからないような幾斗の顔をみながら。

「す…すみませえ～ん」

と謝る友一。

そんな2人の会話に武藤が首を突っ込んだ。

「まあまあ、コーチくん。恋の相談なら僕がのりますよ」

「」やかスマイルで友一に武藤が話し掛けた。

「じゃ…じゃあお願いします。」

恋では、友一や幾斗より1歩大人な武藤が友一の恋について聞いた。友一は、助けたギャルの事、そのギャルに惚れてしまったことなどを実際に正直に打ち明けた・・・

「おめえーよく頑張ったな。」

幾斗が感心の声をあげる。そりやあ、たくさんの不良相手に元引きこもりがケンカを売ったのだ…武藤も幾斗もおどろいた。そんな根性座つてるのは、筋金入り不良と、その舍弟と、誇り高い生徒会長様と、友一ぐらいいだろ？…

みなさんならやりますか？おつかない不良十数人にケンカを売るなんてこと…（注・作者ならやりますが、みなさんは危ないのでやめた方がいいかと…）

「ぼくも感心です。あなたは優しいのですね。」

「そこまでできるんだつたら、告白なんて余裕だな～」

幾斗が友一にそつ言つと、友一は顔を真っ赤にして

「直接は…ちょっと…無理です…」

不良二人は大きなため息をつくと、

「じゃあ、手紙でいいですか？ 手紙なら困どむかつて言わなくていいじゃないですか？」

武藤の提案で、友一はラブレターを書くことになったのであった…

「あ・・あの内容はどんなのがいいですかねえ？」

そんな友一の素朴な質問に…幾斗は

「うーん。こんなのでどうだ？ 好きです。付き合ひてください。

」

と答えた

それ、シンプルすぎ…

「じゃあこんなのどうですか？」

次に、武藤が口を開いた。

「I want you . I need you . I l

ove you . by Yu - ti .」

武藤の提案に友一も幾斗も唖然としてしまった…

キモすぎだろ？ それ… てか、外国人かあ？

「じゃ……」・・・こんなのがつだ・・・・・

そうして2人の不良に手伝つてもらつて・・・結局は自分でラブレターの内容を決めた。（つまり、不良2人はあんまり役に立つてないという事…）

出来上がったラブレターをもう一度読み直す。

よし、完璧だ！ そして友一のラブレター大作戦（大乱闘とも言う…）がはじまつたのだ…

時は放課後、安曇の情報だと彼女、山中美貴は放課後必ず音楽室でピアノを弾いて帰るそうだ…

つまり、音楽室に居るつて事…

友一は、胸を高鳴らせながら音楽室にむかった…

音楽室に近づくたびに、バッハの曲らしきピアノの曲が流れてくる……

音楽室までもうすぐ！そう思い、足取りが速くなつた。

そして、音楽室まで残り10mを切つたところぐらいでピアノの曲が急に止まつた……ゴトンという鈍い音がする。友一は焦つた。なにがどうなつているのか？なにかあつたんじやないだろうか？

いそいで、音楽室の中へ飛び込むと中で美貴が前回、美貴を絡んでいた不良たちに暴行を加えられていた。仕返しなのだろう……不良達はなにげない顔で、美貴を攻撃していた。徹底的なのがこいつらだ！

不良たちは最初は気付かなかつたものの、数秒ほどボー然と立ち尽くしている友一を見て、

「おいおい、力モがねぎしょつてやつてきたぜ」

と友一のほうを振り向いた。が、友一はまったくビビつてはいなかつた。むしろ、怒つてゐる。

最愛の人人が目の前で倒れているのだ、そんな酷いことするやつを許しておくなよなやつじやなかつた……

キレた友一は不良たちにきつい睨みを利かせたために不良たちも友一に攻撃態勢を取りはじめた。

しかし、不良達が攻撃するのよりワンテンポ早く、友一は1人の不良を殴り倒していた。

「彼女に手をだすなあ……！」

続いて、2人目飛び蹴りを食らわせた。引きこもりとは思えない動きである……

しかし、3人目にいこうと身構えた瞬間に顔面に強烈なパンチを食らった。

不良たちのリーダは、友一が先ほどのパンチでよろめいている隙に回し蹴りを友一に与えた……

派手な音をたてながら、友一は床に倒れた。

不良達は友一をぐるりと囲むと、

「かっこつけてんじゃねえーよ！オタク野郎！」

ゲラゲラ笑いながら、不良達は友一に蹴りを食らわしまくった。

ドカ グキ ドス バッス

音楽室中に鈍い音が響き渡る・・・・・

友一は痛みでなにも感じなくなっていた・・・

もう、終わりか・・・ そう諦めようとした瞬間、美貴が不良達に

「いい加減にしろや！あんたらの相手はアタシだろ？かかつてこいよ！」

と言い放つた、不良達は

「そうだつたなあ～」

と、言いながら友一から離れ美貴に近寄つていった・・・ 美貴は後ずさりしながら不良達が近づいてくるのを眺めていた。

「やめろぉ！」

友一は血だらけの身体で、美貴の前に立ちふさがった・・・

「おいおい、クイーンを護る、ナイト様だぜ？」

そういうながら。不良達は友一に近寄つていった・・・。

「バーク」

そう言つと、不良は「ぶしを振り上げた。友一は恐れもないかのように瞬きすらしない、ただ不良を睨みつけ、美貴の前に立ちふさがつていていただけだった。

「ゴーゴーン

派手に鈍い音がした。友一も、不良達も、美貴も一瞬思考が停止してしまつた・・・

な・・・なんだ？ 友一が自分を見る、

殴られてない・・・

次に不良をみると、壁に頭を打つて苦しそうにもがいていた。

そして、その横で金色の髪を揺らしている男がいた・・・

武藤さん・・・

遅れて、もう1人登場した・・・

赤城さん・・・

「 ょお！ 大丈夫か？」

幾斗が友一に問うがすぐ訂正して

「 大丈夫じゃなさそだな・・・」

と言つた・・・

幾斗と武藤は数人の不良を2分で始末すると、美貴と友一を保健室に連れて行つた。

保健室まで来ると、武藤と幾斗は帰つてしまつた・・・

しばらく沈黙が続く、保健室には先生がいないようなので、美貴の手当てを友一がしてあげた・・・

美貴は、自分より傷が多い友一を眺めながら・・・

「 な・・・なんで。 なんで助けてくれたんだ？ 首、つっこまなかつたら、こんなことにならなかつたのに」

自分のせいで怪我をした友一をみながら美貴は心配そうに言つた。

友一は思つた・・・チャンスだと、手紙を渡す・・・チャンスだと・・・

無難作にポケットに手を突っ込むと、手紙を持った・・・しかし、持ち上げようとした手紙を友一は持ち上げなかつた・・・

「 山中美貴さん。 ぼくは、あなたに始めてあつたとき」「 田ぼれしてしまいました。だから、だから。」

美貴は友一を拒否する姿勢なんかちつとも見せず、ただただ友一を

見つめていた。

「そんな、好きな人が・・・あなたが目の前でやられている姿なんか、みたくなかつたんです。山中さん、ぼくは頼りないですが、必死であなたを守つていく覚悟です。だから、ぼくと付き合つてください。」

言つた瞬間、ポケットの中の手紙を握りつぶしていた・・・

風がヒュ～と通つた・・・（シケタわけではありません・・・）

やわらかい、秋の風が・・・2人は少しの間、みつめあつていたが、美貴がクスッと笑うと

「必死で守つてくれよ、ナイトさん」

「そう美貴は呴いた・・・

その後の話だが・・・

みごとにカップル樹立をはたした友一は幾斗と武藤に深くお礼を言った。

美貴は実は1年B組の2班だったので、席替えの時、6班に移ってきた。（席替えは自由、ついでに美貴は幾斗の隣になつた・・・・・）

屋上で弁当を食べる仲間がまた増えたが、誰一人嫌がる人はいない。

逆に嬉しがつてるのが現状だ・・・・

「ねえ、赤城さん。なんで、あの時助けてくれたんですか？」

友一は幾斗に質問した・・・・すると、幾斗は

「お前は、俺の友達で俺らは仲間だろ？仲間たすけねえ奴がどこにいんだよ！」

その言葉で、友一は完璧に幾斗たちの仲間にに入ったのだった・・・

ぼくは幸せもものだ・・・・。あなた方が
いて、本当に良かった。

友一は心の中で、幾斗たちに感謝の言葉を述べた・・・・・

第1~8話・番外編2、オタクとギャルのハーストーリー（後書き）

いやあ・・・やっぱ疲れました。新キャラの登場つてあんがい難しいです・・・。

次回から、雛菊が主人公にもどります。武藤、安曇、幾斗、雛菊、そして新キャラの美貴と友一を加えた、学園ラブコメに・・・もどります。

感想、コメント、よければお願ひします。

第19話・夜鷹の夢～鬼殺し編！（前書き）

サブタイトルは、内容とあんま関係ありません。

第19話・夜鷹の夢～鬼殺し編！

時は10月17日……

雛菊は今日、学校の帰りに、安曇、美貴と近くにあるデパートに来ていた。

去年オープンしたそのデパートはかなりの規模で、電気屋、本屋、食品売り場、プラモ屋、おもちゃ屋、数々の服屋、その他雑貨屋など数多くの店の集合体であった……。なぜ、3人がそんなところをうろついているかと言つと3人とも目的があるのだ。

美貴の目的は極めて簡単。買いたい服があつたらしい……。

安曇は「……安曇の妹、糸河龍子の誕生日プレゼントいとかわりゅうじ」を買いに来ていた。

雛菊は「……最愛の人、赤城幾斗に誕生日のプレゼントを買にきていたのだ……。

実は幾斗と安曇の妹の龍子は誕生日が10月20日で同じなのである。

まあ、そんなこんなで買い物の真っ最中なのでした。

雑貨店で……

「ねえ、龍子にほりちがい」と思つ?」

ちこやなぐまのぬいぐるみを持つて手に持つて、安曇は雛菊に聞く

「え……と……」「へん わ……わからん。」

当然の返答である……なぜって? 雛菊は龍子を一度もみた事がないし、しゃべったこともないのである。それに、安曇が持ってきた2ひきにくまのぬいぐるみもあり変わりがない……ようするにどちらでも同じなのである。

「ね……おんなじじゃないよ! ほら、耳の長さが違う! 」
「まけえ! そんなとこひまでわかるかあ! つか、そんなに変わつて
ねえだろ! うがあ! 」(作者の突っ込みです。お気になせりす)

「じゃあくまと猫のぬいぐるみどりちがい」と思つ?」

今度の質問は簡単だ……雛菊は

「ね……猫のほうがかわいいと思つけど……?」

と答えた、安曇が参考にしてくれたら何よりである。しかし、安曇は

「えー 絶対くまのほうがいいよ。よしつべくまにす。

と結論を出していた。

じゃあ聞かないでほし……

当然の思想である。

レジに安曇はくまのぬいぐるみを持つていて、お金を出してい
た……

雛菊は迷っていた。幾斗になにをあげれば喜ぶか……そういう経験が少ない雛菊は、年頃の男子が（しかも不良が）なにをあげれば喜ぶのかまつたくわからなかつた……

人に聞くのが一番かと思い、雛菊は安曇より頼りになりそうな美貴に聞いた。

「ねえ、幾斗くんにプレゼントしようつと思つんだけじ、なにがいいかなあ？」

美貴はそれを聞いて、腕を組み考えるポーズをしていた……かれこれ3分ぐらゐ……そして

「会長の……」

「わ……わたしの？」

「身体！」

顔が真つ赤になつていたに違ひない、雛菊は美貴をポカポカ殴りながら

「バカー！」

「冗談だつツーの！ちょ、おちつけえ～」

美貴はだめだつたので、安曇に聞くことに……

「ねえ、幾斗くんにプレゼントあげよつと思つんだけじ、なにがいいかなあ？」

「うーん、わからないかなあ？」

さ……さすが……私より経験あるからすぐわかるんだあ～

雛菊は期待した。

「だから、やっぱ年頃の男子が喜ぶのは……」

「よ……よろこぶのは？」

「身体！」

ガックリきた。それじゃあ美貴と一緒にじゃない！まったくもつて参考にならない！　いや……までよ、安曇や美貴が本氣で言つてるんだとしたら……？

て、ダメダメダメー

「これ以上このネタで書くと△指定しなくてはいけなくなってしま
います。」

「もおーー2人とも冗談言つてえ！」

頬を赤らめながら、雛菊はブンスカ怒つていた。

「だつて、かいちょーイジメたらムキになるから可愛いんだもん。

」

「そりだよそりだよ。」

美貴と安曇が声をそろえて言つてた・・・・

そんなこと言われても嬉しくない！

「じゃあ、真面目な話！赤城くんは不良だから、やっぱアクセサ
リーとかいいんじゃない？」

安曇にしてはまともな意見だ・・・・

「アクセサリー？って言つてもいろいろあるじゃない・・・・

雛菊がそう言つと

「例えば、ネックレスとかさ・・・・ビーグー！」

美貴はネックレスを提案・・・・

「ほかにもいっぱいあるよお～チーン、ブレスレット、ピアス、
イヤリング、ピアカバー、ミピアス、ベロピアス、ネイルピアス、
リング・・・

べらべら喋りまくる安曇をみながり立がほぐす、雛菊と美貴であつ
た。

なんで、そんなに詳しいんだろう？そんな疑問は後にして雛菊は

「あ、あのわあ、やつぱよくわからないから、ネックレスにする
雛菊がそつ言つと、なぜか残念そうな顔をしながら安曇は

「そう・・・」

と返事をしていた・・・

ネックレスにきまつたのはいいが、ネックレスにだつて何種類もあるのだと、この雑貨店だけでも軽く100種類はある・・・
形、色、質、大きさなどもそれ違う・・・

他人のプレゼントを選ぶのは、これが楽しいと思う人も世の中にはたくさんいるのだろうが、俺はあまり好きになれない・・・（
作者談）

「かいちょ～これなんかビリよお？」

美貴がネックレスの1つを指差して言つた。そのネックレスは、銀で作られた女の人の裸？のよつた形のネックレスだった。

「それ・・・幾斗くん。怒ると思うなあ～」

はつきり言つて、そのネックレスはキモかつた・・・

「じゃあ～これは？」

安曇がでつかいハートのついたネックレスを指差す・・・

「えつとそれは・・・変じやない？というか、ハートがでかすぎでしょ？」

チエーンに似合わず、ついているハートはかなりの大きさだった・・・

こんなふつに、あーだ、こーだ言つてゐる間に、2時間も時間が

たつてしまつた……

2時間、3人が頭をよせて考えた結果（真面目に考えたのは雛菊1人……）幾斗へのプレゼントは縦長の銀板に小さなハートの石がはめ込まれていてものに決定した……

3人は、暗い夜道を通って家に帰らなくてはいけなかつた……自分らが悪いのだからしかたがないが……

家に帰つて、ネックレスを包みに入れる。キレイなリボン。キレイな袋。

全部自分で買ったものだ……

問題は、どうやってわたすかである。

とりあえず練習をしてみる

「幾斗くん。いつもありがとう。」これは、誕生日のプレゼント

うーん、ノーマルすぎ……

「別に幾斗くんのために買ったわけじゃないけど、あまつてだからあげる！」

うーんなんかツンデレみたいでやだなあ……

「幾斗くん、このネックレスを私だと思つて、つ・け・で」

キモイな……それは……

「これ……やる……」

それは、冷たすぎでしょ……

そんなこんなで悩んで、結局決まらなかつた……

ラブストーリーなら当然ののようなネタなわけでして……

そんな悩みの多い生徒会長はついに本番の日を迎えてしまつ。

10月20日の朝。

安曇の計画では、龍子（安曇の妹）の誕生日会を安曇の家でやるので、それに幾斗をよんでも、一緒に祝う……

そんな、すごく単純なアイデアに生徒会長、美貴、武藤、友一は大賛成していたのだ……

学校にて、安曇が5人に、誕生日会に出席する人数を発表した

出席するのは

安曇、武藤、友一、美貴、雛菊、幾斗、龍子、露子（幾斗の妹……
第5話参照）の8人である。

実は、龍子と露子は幼いころから仲がよく、現在も同じ小学校に通う親友同士だ。

糸河家と赤城家はそんなふうな関りがあつたのだ……

・

「もちろん、全員出席だよね？」
と安曇が5人に聞くと

「ああ、・・・俺はいけねえーや・・・」

そう、幾斗が呟いた・・・

第19話・夜鷹の夢～鬼殺し編！（後書き）

久しぶりの投稿です。呼んでくれたかた、ありがとうございます。
できたら、コメント、感想、お手紙、評価、どれでもいいのでや
つてください。お願いします。

第20話・夜鷹の夢～妹殺し編（精神的に）（前書き）

あはっは

第20話・夜鷹の夢～妹殺し編（精神的に）

「な・・なんで？」

安曇がとつたに幾斗に聞いた。幾斗は一瞬考えて、から

「別に、理由なんてないけど？」

そう平然と答えた、

「なんで？せっかくみんな赤城くんの誕生日を祝おうついで
るのに！」

安曇は幾斗の言葉に納得できなくて反論する…

「誕生日・誕生日つて、ペーペキつむせえんだって！誕生日くら
い静かにさせろやーバーカ」

「なつ…なにがピー・ピキよお…じゃあ、赤城君はわたしたちが迷
惑だつて言いたいの？」

幾斗と安曇が猛烈なケンカを繰り広げた。安曇の言葉に少し幾斗は
退いたが

「ああーそ�だとも、迷惑だよ。誕生日会は、俺がいなくたつて
龍子つつう主役がちゃんといるだろが！」

幾斗がそう言つと、安曇は少しこわばつた表情をしたがすぐもとの
顔に戻つて

「2人ともが主役なんですよー！」

安曇が幾斗を睨んだ、幾斗も安曇を睨んでいたが数秒が過ぎたとき
離菊が

「幾斗くん、それはちょっと酷いんじゃない？みんな、幾斗くん
のためにしてるのでー！」

離菊が、やう言つと幾斗は、少しがつがりしたような顔で

「マジー・うざえー、勝手にしろやー！」

と、一聲あげると、スタスターと帰つてしまつた。

離菊たちははいつもと様子が違う幾斗の背中を心配そうに見送るしかできなかつた……。

しかし、その後どうすることもできなくて、幾斗を除いた5人は安曇の家でパーティーを開いた。主役はもちろん安曇の妹の龍子だつた。パー・マのかかつた髪を膝まで伸ばしたかわいい女の子。それが龍子だつた。みかけに似合わず、安曇よりしつかり者だ……。

離菊や武藤は、何度も幾斗に電話してみるもの不出ない。

今回で12回目になる、幾斗への電話をかけようと離菊は携帯電話を開く、そしてボタンを押そうとした瞬間。

「お兄ちゃんは？」

そう誰かが後ろから問いかけてくる、離菊が後ろを振り向くといつも幾斗を迎えていた時に出てくる幾斗の妹、赤城露子あかぎり るこが立つていた。2つに結んだ髪がクルンとカールしていてかわいらしい。

「幾斗くん、誕生日会いきたくないって言つてたんだけど、なんでかな？」

離菊が逆に露子に問う……すると

「やつぱり……今日は誕生日だから……」

「やつぱり……小さく呟く。

「じ・じ・じつむつ」と……

離菊は露子の顔をのぞきながら尋ねた。露子は丸い目でしつかりと

「じつは

「幾斗、お前に守るべきものはあるか？あるなら、強くなれ
よ、そして死ぬ氣で守れよ。わかつたな、幾斗、いく、と、

皿代の「タツ」の中で幾斗はぐつたりと横になつて過去の夢をみてい

たが、どうやら夢から覚めたようだ・・・・・

「親父・・・・・」

幾斗はそう呟くと、のんびりと起き上がり上着を羽織ると家を後にした。

幾斗は一人夕暮れの川べりを、コシコシと歩いていた。いつものように、胸を張ってヤンキー歩きをしていない。まるで、ヒロインの女に捨てられた後の、真っ赤なスーツを着た大怪盗の3代目のように背中を丸めて歩いていた・・・・・

どこか、悲しそうな表情の幾斗は数十分ほど川べりを歩いていたが、川べりの道の交差点の場所で、交差点を横切り、川に背を向けて歩いた。

時折、幾斗は口にたまつた唾を地面に吐いては、なにかやりきれない気持ちを抱えているかのように顔をしかめていた。何を考えているのかはわからないが、ただならぬ気持ちを抱えているのは間違えなかつた・・・・・

歩いて、歩いて、幾斗が行き着いた場所は、小さな囲いに囲まれたお墓だった。その中にある、ひときわ大きな墓の前に幾斗はたたずんだ・・・・・

赤城家と書かれている墓を、幾斗はいつまでも見つめていた。

「露子たちのお父さんは、とある会社のサラリーマンをやつっていました。人柄がよく、優しかったお父さんは、上司にも大変していたんです。当然のようにお父さんは出世しました。お父さんの成績は会社でトップと言つても過言ではなかつたからです。そのころ、お父さんには古い友人がいたんです。その友人のことをお父さんは大層、信頼していました。きっとその友人もお父さんのこととを信頼してくれていたと思います。

しかし、お父さんが出世するたびにその友人はお父さんに嫉妬を抱いていたんです。お父さんのことが、死ぬほど妬ましくて、その友人は・・・お父さんを、殺したんです。ちょうど、今日の今頃です。私の家では、お兄ちゃんのための誕生日パーティーが開かれました。その時、その友人も家に来たんです。よくやるじゃないですか、ケーキの上のロウソクの火を電気を消して暗くしてから吹き消すっていうのが・・・その時もやつたんですね・・・お父さんが電気を消して、お兄ちゃんがロウソクの火を消そうとした瞬間、幸せが膨らむ瞬間・・・その友人は、ロウソクになにかわからないけど、ガスか何かを吹きかけたんです。家中に、火が回り・・・幸せな家庭は吹き飛びました・・・お父さんは、私とお兄ちゃんとお母さん、そして自分を殺そうとした友人までを外に逃がしたために、逃げ遅れて死んでしまいました・・・。

だから、お兄ちゃんは・・・お兄ちゃんは・・・自分の誕生日が大嫌いなんですよ。露子は小さかったからあんまり知らないけ

「……お兄ちゃんはもう、結構大きかったので……たしか、小学5年生の頃です。お兄ちゃんは、誕生日になるとこいつもその時のことを思い出していた……」

露子は、幾斗の過去を簡潔に雛菊に伝えた。

雛菊は深く後悔した、なんにも事情をしらなかつたくせに、幾斗にあんなことを言つてしまつたのだから。

「幾斗くんに謝らなへぢや……」

そう思つたら、もつすでに雛菊は安曇の家を飛び出でていた。雛菊が急に飛び出してしまつたので、武藤や安曇、龍子たちは驚いて雛菊を呼ぶ

「山内さんあーん

「かいちょーあーん

「ひなぎく・・・・・さ・・・・・ん・・・・・ひ・・・・

遠くのほうでみんなが雛菊の名前を呼んでいた……。でも、雛菊は振り向かない。

「のすゞ」スピードで走つてしまつた雛菊を、龍子は見送りながら

「わすが、お兄ちゃんが必死になる女の子だなあ」

「ついで、いつまでも雛菊の背中を見送つた……」

幾斗くん、ジーニーのいるだろ？・家にいるかなあ？

雛菊は、走った。血漫の足で走った。はやく、幾斗にあいた
くて・・・はやく幾斗にあつて、謝りたくて・・・

午後10時の街中を女子高生が全力疾走していた。

そして、幾斗の家があるマンションの階段を駆け上がり、幾斗の
家のベルを鳴らす・・・が 応答がない。

「幾斗くん・・・私だよ、雛菊だよ。お願ひ。いのんだったら開
けて」

ドアをノックしながら、雛菊は幾斗を呼んだが、出てこない・・・

そんなことを続けていたが、なにも食べてない上に走った後な
で体が疲れきついて、雛菊はドアの前にペタリと座り込んでしま
った。

数十分という時が流れた・・・・雛菊はドアの横にち
ょこんと座つて、膝に顔をうずくめていた。眠むと空腹が雛菊を襲
つた。

そこへ

「う？え？雛菊？」

午後11時、幾斗ははやつと、家に帰宅したのだった。

「あ・・・い・・・幾斗くん。そ・・・そ・・・そ・・・

雛菊がしゃべるつとしたら

「とりあえず、家中はいれよ・・・・・」

そう言つて、幾斗は雛菊を招き入れるとコタツにすすめた。

「10畳にしては、今田は冷えた田だつた・・・・・

「あ・・・の・・・幾斗くん、露子ちゃんから・・・話をして・・・

今日は、学校あんなこと言つて・・・・・『めん』

雛菊は頭を下げた・・・・すると

「ああ・・・俺こそワリィ。ちよつとイライラしてたからや。」

そう幾斗が言い終わると、2人の間に沈黙の時間が流れた。口
タツのファンの回転音だけが鳴り響く・・・・・

雛菊は、プレゼントを渡す事を思い出し、渡さうとするが・・・・
どう渡せばいいのか・・・・

なんかイロイロ考えたのになあ、シンデレラなくて、冷たいや
つじやなくて・・・・えつと、その

脳内が混乱していた、心臓の心拍数が速くなり、手が震えてきた・
・・・

私・・・緊張してる？

「あ・・・あの幾斗くん・・・・その・・・・・

幾斗は、「なに?」と答え雛菊をみつめていた。

混乱した頭で雛菊は言つてしまつた。

「こ・・・これ、プレゼントのネックレス。幾斗くん、このネックレスを私だと思って、つ・け・て

チーン

一瞬、世界の空気が凍つた氣がした。雛菊は我に返つて自分の言つてしまつたことを考え、体から蒸氣が上がりそうなほど恥ずかしくなつた。

「なあひああああなまつはせまつはせまつはせまつ
」
「あみ」

幾斗は大爆笑！

「おいおい、雛菊。冗談ウマスギ！！わああつあはははつはは」

まあ、[冗談で片付けられた]・・・・幾斗は思いつ
きり笑つた後・・・・雛菊と冷凍食品の夕飯を食べてコタツで横に
なつた。

電気を消して、暗闇の中、幾斗の声がした。

「なあ、雛菊。俺の親父さあ、この田に死んだんだ……」

「うん・・・・

雛菊は、どんな声をかけてあげればいいかわからなかつた。

声に詰まつた雛菊に幾斗は

「親父さあ、死ぬ時、自分を殺した男まで助けて死んだんだ・・・・・・
・その時親父、なんて言つて死んでいたと思う?」

暗いから、幾斗の表情はみえない。悲しそうな顔をしてるのかな?
苦しそうな顔をしてるのかな?

雛菊は、みえない幾斗の表情を思い浮かべた。そして、心配になつた。すると

「親父のやつ、炎の中で俺に　俺つて、ヒーロみたいじゃねえ
一か?幾斗?わあつはつはつはつはつはつはつはつはつはつはつは
ながら死んでいきやがつたよ。」

そして、やけに楽しそうな口調で、

「変な、親父だろ?でも、自慢の親父なんだ

「うん・・・・

せまいコタツ・・・雛菊は幾斗の背中にしがみついた。今だけは、
コタツのぬくもりと、闇で幾斗との密着を許してくれる。

優しい、シャンプーの香りが幾斗からする・・・柔らかい臭い
と、幾斗の体温を感じながら雛菊は幾斗にしがみついたままスヤス
ヤと眠つてしまつた。

親父、俺の守るべきものせ、こいつかもしれねえーや。

星だか、空だか、幽靈だかになつた親父、今の俺をみてるか
…めいやめひや「ういやましげだろつ」

幾斗はそつぶに心の中で報告すると…クスッと笑って、雛菊
の寝言を聞きながら眠りについた…

「たつだいまーお兄ちやん、昨日龍子ちやんの家に泊まつて
来たから~」

そう言いながら、妹、露子が帰ってきた。そして、リビングに入る

「お兄ちゃん？」

露子がみたのは、コタツで離菊と抱き合つて寝る実の兄であつた。

「あつ・・・露子・・・・」

ପ୍ରଥମ ପତ୍ର - ୧୯୫୩ ମେସାହି

妹は、焦つて立ち去った。

第20話・夜鷹の夢～妹殺し編（精神的に）（後書き）

いやあ～書くの大変でした。次回は、安曇の物語になるかも？　□
メント、感想ください。あと、好きなキャラ教えてください。

キャラ人気投票所でござります。みなさん、ご協力お願いします。

<http://vote2.ziyou.net/html/neotto.html>

第21話・鋼鉄のキルマーク

まあ、ラブコメだからベタラブの話もあつていいんだろうが。

今回は、高校生の現実的な悩みの話です。

10月、ここ青海高校はそろそろ期末試験の時期に入りました。クラスでも、ピリピリした空気がただよい、みんな机にかじりついて勉強をしている。

一部の人を除いて……

「期末試験だなんて、タリイー」

グダグダと文句を言いながら、幾斗はしかめつ面をしていた。

「そんなこと言つても……しかたないでしょ？」

雛菊が平然と答える。

「そりやあ会長さんは頭いいから余裕だらつけど……私なんか……」

そう言つと暗くなる安曇。

「試験？流しつけばだいじょ「ぶつしょ！」

能天氣発言をするのは美貴

「はあー。試験だなんて気が重くなりますね。」

不良の発言には思えない武藤の言葉

「では、僕は帰つてゲームするんで。」

試験に興味なしな、友一の発言

「俺は……サボる！」

サボリ宣言を堂々とする幾斗

5人の言葉を聞いて、雛菊は

「はあー。しょうがないんだから。」

と少しあきれた声を出す。まあ、このメンバーでまともといえるまともな人種はただの1人もいないのだからしようがないといったら、しょうがないのかもしないが。。。それでも学生の本分は勉強！それをよく熟知している生徒会長、山内雛菊は不良、ヤンキー、ギャル、舎弟、オタクどもに大声で言った

「今日！勉強会するわよ！」

雛菊の提案により、今日は勉強会をすることになった。場所は私立図書館である。めずらしい図書館で、24時間営業という異様な営業時間を誇る青海の勉強熱心家のメッカである。つまり徹夜OKという場所・・・・

本の数は県内トップの3億7千万冊で日本だけではなく、アメリカ、ドイツ、デンマーク等の普段見れないような本もかなりの数おいてある。

読書の秋だ何だ言われるこの季節にはもつてこいの勉強場所なのがもしれない。

そんな、巨大かつ広大な図書館の中のすみの机に6人は腰掛けると勉強を開始した。

カリカリカリカリ

ゴリゴリ
ケシケシ
カリカリカリ

最初はみんなノートや問題集にペンを走らせていたが、数分後には雛菊を除いた5人がノートや教科書、問題集を投げ出していた・・・

集中力がまったくもたないようだ・・・今までろくに勉強した事の無いような人種なので、やっぱり慣れていないのだろう・・・

「ぜつんせんわかんない・・・・」

幾斗が机にうつ伏せに顔をうずくめた。どうたら、脳みそがパンクしたようだ・・・情報量の限界のなかもしれない。つて、幾斗の頭つていつたい何キロバイト入るのだろうか・・・いや、バイト?まさか、ビット?

安曇や美貴もグダグダし始めた。

前に、「乱れた浴槽」という成人向けの本を読んではないがみたことがある、この場合は浴槽ではなく「乱れた勉強会」だなあ(作者談)

雛菊は、そんなみんなをみながら、ため息をつく。あきらめのような、情けなさのような、そんなため息を・・・・

しかし、雛菊はそんなふうに勉強会が乱れていくのを黙つて見過ごすようなあきらめの早い女でも、生徒会長でもなかつた。スッつと静かに立ち上ると、まず安曇のもとに駆け寄った。安曇は数学の問題集を開いてはいるが全然出来ていない。ようするに解

答欄が真っ白ということである。

雛菊はその問題集の問1と書かれた図形の問題を指差し、安曇に答えが解るか尋ねるが、当然の「」と「安曇は解らない」と意思表示をした。

「ここは、この定理を使えば簡単よ。」

雛菊は安曇にヒントを出した。「安曇は問題の図形を5分ばかりにらんでいたが、雛菊のヒントを活用してスラスラとまではいかないがペンを走らせはじめ、3分後には解答欄に答えを記入した。満面の笑みで安曇は

「かいちょーさんーできたー」の問題できたよー

とまるで新しいおもちゃにスゴイ機能がついていてそれを、母親に見せる子供のよつな顔で安曇は雛菊に言つた。

雛菊はその問題を除きこみ数分考えてこると、

「ねえ、これ間違つてるよ・・・」

世界が凍りついたような一瞬だった・・・安曇の頭の上にガーンと大きく書いてあるのが見えそつである。

「じや。。。じゃあどうやるの?」

安曇が雛菊に教えをこつ。

教えてくれと言われたからには、引き下がるわけにはいかない。ましては、教えてあげなくてはいけない。なので、雛菊はバカな安曇に一から十まですべて丁寧に教えた。やりかとも、とき方も。。。。

その後、なんとか理解した安曇に雛菊のお手製応用問題をやらせ、結果がボロボロだったので出来るようになるまで徹底的に叩き込んだ。

「こ・・・これでいいの?」

安曇は離菊に48回田の再回答をみせる。

「これ、ここ間違つてるでしょ！計算でミスしてたりもつたいないじゃない！」

それは、それは、本当のスバルタ教育であった。それは、虎の穴（店じやないよ）のごとく、修練の門（アームじやないよ）の「」とくその時の安曇にとって、人生で一番つらいくしかつた出来事であつたらしご（安曇談）

安曇は78回田の再回答を離菊にみせると、ようやく会話がもらえた。離菊はホッとため息をつくと安曇以外の人をみまわした。

すると、やつさまで寝ていた幾斗もP-Pのゲームをやつていた友一も、マニキュアをつめに塗つっていた美貴も、音楽プレイヤーで平然と音楽を聞いていた武藤もノートやら問題集やらに真剣な眼差しでペンを走らせていた。

あんな、スバルタされではたまんないとでも思つたのだろう・・・

いらん話になるが、スバルタ教育のはじまりは、古代ギリシャのスバルタってどこではじまつたんだ。古代ギリシアのポリス・スバルタでは、子どもは国の財産として大事にされていたんだよ。スバルタの子どもは12歳になると厳しい軍事的な訓練をやらされ、その過程で体に障害を生じた子ども等を殺害していく、残つたものだけをスバルタの市民として育てた。アテナイ（今のアテネ）の、自由で芸術や弁論を尊重した教育の対極がはじまりなんだ。

昔にくらべたら、今のスバルタなんて・・・ふむ、歴史とはよく勉強してみるものだなあ。

実は勉強した経験があまり無いとは言え、実はこの5人にもちゃんと得意教科があつたのである。』

赤城幾斗は数学が得意。『実は幾斗のお父さんはパソコン関係の会社に勤めていた。（死んじゃったけど……）そのお父さんにPCの技術と知恵を叩き込まれている。そのため、PCによるハッキングや不正ダウンロード、プログラミングなどはおてのもなのである。知つての通り、ヴェージックにしろCCCにしろ、パールにしろ、C言語にしろ計算が必要である。そのため、幾斗の計算スピードは半端ではない。』

武藤勇氣は生物が得意。両親とも生物学者で、世界を飛び回っている。幼いころから、本を読むのが好きで周りにある本（両親の本）ばかりよんでいたので、生物や物理はお手の物。

糸河安曇は国語が得意。実は将来の夢が小説家！そのため、何千何万という本を読んできているため、国語の読解力は最強。昔から幾斗と仲がよく、よく漢文を一緒に書いていたため漢字も得意。（漢文って言つても、夜露死苦、とか、爆走天使、とか鬼魔愚零とかそういうヤンキー文字である。けして、春眠暎を覚えず、などと高度な漢詩なんかをかけたわけではない。）

山中美貴は英語が得意。日本だけではなく、アメリカやイギリスのファッション誌や通販を読んだりするので英語は大の得意。そのほか、フランス、イタリア、ドイツ語などが話せるといつども国際的なギャル……

佐山友一は社会が得意。戦争ゲームや三国志、歴史を背景にした

ゲームを数多くこなしてきているためである。それに、戦闘機や戦車、戦艦などのプラモデルを作つたりと歴史には興味があるらしい。そのほか、桃太 電鉄等の地理的ゲームもかなりの数やつているので地理も得意。じつは、外国のゲームをやつたりするので英語もなかなか出来るという、つわもの。

得意な教科は人それぞれなのですが、この5人を総合してそれには無駄な知識まで付け加えた脳みそをもつのが山内離菊となるわけである。

勉強会開始から3時間が経過した。明日の歴史のテストにそなえてみんな、年代の暗記に励んでいた。

「えーっと1939年が第2次世界大戦、1940年にドイツ軍がベルギー、オランダ、フランスを降伏させた。」

友一がとてもマニアックな暗記をしていた。そんな問題でるのか?

「なあ、大日本帝国憲法発布の口口あわせつてどんなん?」

幾斗が離菊に問う

「えーと、1889年だから、1889(ひとはやく)覚えよ憲法、じゃないかしら?」

離菊がこたえる。

「じゃあ、日清戦争は?」

今度の間に離菊は少しつまつてから

「1894(ひとつくつし)の戦争 つてのでビリ? と自作の口口を言つ。

「なんか、覚えにくくない? それ・・・

友一が口を挟む。

「覚えてこくいんだつたら、自分で作ればいいんだじゃない？」

安曇が詰つ。

「いんのどひですか？ 一八九四（ひとはくし）つも肉大好きとか・

・・・

武藤のしゃほじ「口」。

「いやこや一八九四（ひとはくし）しきゅつた、なんでどひよー・」

美貴のひどい「口」

「いや、一八九四（ひとはくし）い のはうがこいでーす」

安曇の提案

「！ ！ ！」

その後、数分間みんな好き勝手にしゃべりやーしゃべりやーわーわー言つていたが、幾斗が

「一八八九（こつぱみつせゅうしょ）にケリを入れる！ でいいだろーが！」

なんで、ケリ入れるんだつ。なんで急所なんだつ？ もざまな疑問をのこしてそれに決定してしまつた。

その後、3時間も勉強し結局帰る時間は10時半・・・ 教える雛菊も教えられる5人もクタクタであった。

帰り道の同じ雛菊と幾斗は、一緒に帰っていた。

「ああーあ。今日はマジだるかつた。勉強なんてよー

不良だもの思つのは当然だらう。でも、雛菊は疲れたけど、今日が楽しかつた。そりやあ、幾斗にとつちゃあダルかつただらうけど雛菊にとつてはそんなことなかつた。

その、幾斗の言葉を聞いて離菊は少しうつむいた。そして

「ううう……」「でも、今まで一番楽しい、勉強だつたぜ」

雛菊は謝ろうとした、しかし幾斗にさいぎられたのか、偶然かぶつたのかはわからないがその思いは届かなかつた。

でも、雛菊はうれしかつた。同じ思いだつたことが、楽しかつたつて言つてくれた事が。。

「明日のテストがんばろうね」

月明かりが2人分の影を優しく映し出していた。

「それにしても、急所にケリは清がかわいそうだなあ
・・・・問題そこですか？」

第21話・鋼鉄のキルマーク（後書き）

いやあ。本当に久しぶりの投稿になります。みなさんもうしわけありません。リアルは忙しくって・・・

みんなの感想、コメント、手紙を心からお待ちしております。

第22話・雪結晶と紅い薔薇（前書き）

お久しぶりです

第22話・雪結晶と紅い薔薇

期末テストも、全員無事に終わった。（赤点をとらなかつた。）

あとは、ながれ行く平和な高校生活を満喫するだけとなつた青海高校の6人。

みんながみんな個性的で共通的な不思議な6人。不良、ヤンキー、ギャル、優等生、オタク、舎弟。。。

みんな、孤独を味わつて、みんな周囲に追われて・・・
孤独、死、仕事、いじめ、差別、チクリ、無愛。。。彼らを孤独にくくり付けていたものはそれぞれ違うが、彼らは自らその孤独の鎖を断ち切つた。

きっと、今は幸せなのだろう・・・

「やべえー学校遅刻するうー」

猛ダッシュで走る青髪の不良。

「幾斗君がなかなか起きないからじやない。」

隣では、超美人な女の子が不良に文句を言つていた。どこにでもあるような青春の光景。走る一人の学生を周囲の人は、温かく、また懐かしそうに眺めていた。誰にでもあった青春。それは人によっては悲しかつたり、楽しかつたりとさまざまだが、それは自分が生き

てきた証なのである。

もう冬である。今年はまだ雪は降っていないが、だいぶ寒くなつてきていた。まあ、いつ雪が降つてもおかしくない状況というわけである。北風がビューと音を立てながら空を通りぬけて行く。

雪は降つていなが、すでにこの時もう、本当の冬がやつてきていた。心が凍りつくような、冷たい冷たい冬が。。。。

「あつー雛菊ー！ わりい。先に学校行つてくれ。」

校門を田の前にして幾斗が急に言い出した。

「え？ あつ？ 学校田の前だよ？」

「ちゃんと行くつて。でも用事すませたあと・・・昼飯までに行くからわあーー！」

そう言つて幾斗は学校と逆の方向へ走り出していった。雛菊はその後ろ姿を見送ったあとに、学校に入った。ギリギリ授業も始まつていなかつた。それどころか、担任の先生の急用で1時間田が自習になつてゐる。ラッキーだ。

いつもの生活がはじまる。“普通が一番” そう誰だつたか忘れたが歴史上有名な偉人も言った。

そひ、普通の生活が今日も始まると思つた。そして、席につこうと思い、自分の机に近づき椅子を引っ張り出す。なにげない、普通の出来事をはじめようとしたその瞬間。

ガターン

「ふざけんなよーー！」

かん高い女子の声が前の席の方で聞こえる。雛菊が目をやると、机につづぶせになつた安曇の姿があつた。そして、それをとり囲む怖い顔をした女子達がいた。

「いい加減にしろよー。マジきもいんですけど?」

「くさいんだよー！害虫女！寄生虫！」

「おい、これどうする？マジでシメちゃう？」

安曇を囲んだ女達は、安曇に口々に暴言を吐いた。聞くにたりない汚い言葉を安曇に吐いていた。

「わ・・わたしが・・なに・・・を・・・したって。・・・。」「
はあ？わかつてないの？」

泣き声で質問をしようとすると安曇を怒鳴り声で押しつぶす。雛菊は混乱した。なんで安曇があんな状況か・・・どうしてそうなつたのかが・・・

でも一つだけはつきり解つていた。これは”いじめ”なのだと。

床には安曇のカンペんケースが落ちていて、鉛筆、消しゴムがみるも無残な姿になつっていた。カンペんケースはボコボコに凹んでいるし、安曇の机には”死ね”や”害虫女”など数多くの暴言、中傷的な言葉が書き込まれていた。

雛菊はかなり混乱した。友達・・・友達がいじめられている。雛菊が混乱するのは無理も無い。相手が相手だったのだ。

彼女に逆らつたらどうなるか、みんな知つていた。彼女は、この青海高校でも一部の女子のボス格であるが、その力は強力で逆

らつたものは女子の”群れ”に酷い、残酷な仕打ちを受けることになる。

しかし、そんなことを見て見ぬふりをする離菊ではなかつた。いじめを受けている生徒が目の前にいてそれは親友・・・自分は生徒会長。安曇が何をしたのか知らないけど、そこまでやる必要などあるはずがない。手が少々痙攣しているが、そんなのを気にしていたら安曇が大変なことになる。

離菊は席を立つと安曇の席の横に立つて。

「やめなさいよ」

と、やや小さめの声で集団の中に割つて入つた。女子集団の目がいつきに離菊に向けられる。冷たい視線が離菊に集中砲火をあびせるが、離菊も負けじと睨み返す。喧嘩の得意な幾斗ならまだしも、そうではない離菊が睨んでも怖くない。ましては、可愛いほどである。。。

「会長さん、いいことに来ましたねえ。ちょっと聞いてくださいよ」

茶髪にショートヘアの女子が離菊に言つた。

「ここに、あたしのものを盗もうとしてたんですよー。こうなつて当然じゃないですかあ？」

そういう終わると、女子達が一斉に

「私もやられたあ・・・「私なんか・・・」

「私も・・・「私は彼氏を・・・」

「私は・・・私は・・・私は　私は　私は・・・・・・

と口々に被害起訴を行う、無論安曇がそんなことするはずが無い。しかし、ここで反論すれば生徒会が危うくなる。生徒を疑つてばかりで、友達をヒイキする会長とか言われそ�であるのは、確かだつた。

雛菊はまたもや混乱した。 答えは明白である、いじめはいじめである。ここは制裁を加えるべきだ。

震えながら、机に顔を押し付けている安曇をみるともう制裁を加えなくては、気がすまない気がした。

飛び掛ろうとした瞬間、

「さつきからみてたら調子のつてんじゃねえーぞ、こりあー！」
いきなり美貴が乱入した。女子達も一瞬引いたが、すぐ体勢を変えると美貴に対して攻撃態勢を構える。

その乱闘にまぎれて雛菊が乱入し、ギヤーギヤーワーと騒ぎが始まった。第1次でも第2次世界大戦でも同盟国側は圧倒的に数が少なく、連合国側に物質量で大敗したように、雛菊たちはたつの3人、といつても安曇はふせてているだけなので事実上2人である。
・・・敵は10人前後・・・

男子のように殴りあつたりはしないが、口などで相手を攻撃していく・・・女子の喧嘩である。

そこに、1人の女子が声を張り上げた

「安曇なんて、しねやあー！」

ガツシャーン

その女子の言葉がおわる少し前に、大きな音がした。みると、机が派手にひっくり返つており足を振り上げた赤T－シャツの不良と、髪を綺麗に整えた男子が立っていた。いずれも厳つそうな顔をして女子達をにらみつけていた。

まぎれもなく、我らがむっちゃん（武藤）と友一であった。

「お前ら、死ぬか？」

武藤の唇がすこしづかれて開いた。

第22話・雪結晶と紅い薔薇（後書き）

いやあ、今回短くてすみません。イロイロ忙しくてなかなか書けませんでした……

感想、コメント、心よろお待ちしております……

第23話・ゴーヤは食べられたくないから苦いのに、それを人間は・・（前書き

いつも、お久しぶりです。

第23話・ゴーヤは食べられたくないから苦いの、それを人間は・・

武藤と友一が怖い顔で立っているにもかかわらず、女子達は安曇を罵った。

安曇と雑菊と美貴が武藤に視線を向けると、武藤はいつものサワヤカ微笑スマイルではなく、言葉敬語ではなくなっていた。

「聞こえてねえーのかあ？ああ？」

「ひじその不良、まあ不良なんだが・・・そのへんの不良と同じような声をだした。

しかし、女子はまったくの無視。武藤に顔も向けやしない・・・ただ安曇を攻撃していた。

武藤は女どものボス格につかみかかった、するとそいつはまるで木の枝でも引っかかっていたかのような華麗なしぐさで、武藤の手を掃うと、まるで雑草でもみるよつた目つきで武藤を見た。そして、自分より背の高い雑草にすまし顔で

「なに？」

と答える、

ヤバイ 雜菊は思つた。武藤は完全に怒つたらしい。マンガなら頭に黒十字に似たイラマーク?が出てきそつなほどだ。今にも殴りそうだ。

雑菊は内心少し思つた・・・ やつちやえ! もちろん美貴もそう思つた。

「お前、自分がなにしてんのかわかつてんの?ああ?」

「あら、かつこいい事。」

女はクスリと笑うと、武藤の田を見てはつきりと

「悪いことしたやつを懲らしめてなにが悪いのかしら?『ゴミの味』方は『ゴミ虫だけですよ。あなたも『ゴミ虫なのがなあ?』」

そこまで言い終わると、女は武藤の顔から皿をそらしてその他諸々の女を引き連れてその場を立ち去つた。

クソ！ 雛菊も武藤も友一も美貴も胸糞悪い。すぐにでも追つて行つてあいつらをボコボコにしてやりたいと思つていた。女どもが出て行つたのと同時に、先生が入つてきた。

「だいじょうぶですか？」

昼休憩、武藤は安曇の擦傷を見ながら言つた。ただの傷だが、女子にとつて肌の傷は大敵なのだ。そのことをよく知つてゐる武藤と美貴は安曇をとても気にしていた。友一はといふと。。。心のそこでは「たいしたことないじゃん」とは思つてゐるもの、口では大丈夫？などと聞いてゐる。空氣の読める男なのだ。

「うん。このくらいの傷。。。なんとも」

実際、安曇は肌の傷などたいして気にしていなかつた。昔から幾斗と悪い事してきてるので、かすり傷なんてへつちやらである。しかし、傷ついたのは肌ではなく心だ。心の傷は当分癒えないのと同時にいじめも当分続きそうだ。ことに、武藤や友一、幾斗が女子のいじめに関わるのは実はものすごく難しいことだ。理由は簡単。ココは共学とはいえ体育、保健などの授業、そして着替えなどは女子と男子がバラバラになる。（まあ当然か？）今日のような特殊な日は少なく、だいたいは女子だけに、そして安曇が一人になるときに攻撃される。

その後、安曇はいじめがはじまつた日、理由、内容を話しあった。まのいい雛菊がそれをまとめた。

「つまり？」

ある日、安曇が歩いてゐると一人の女の子がありました。そのことは

大そう困っている様子でした。安曇がどうしたのか尋ねると、その女子は先日、男子更衣室に彼氏が大事なものを間違えてもって入ってしまい、それが今日無ければこまるそうだ。彼氏にとつてもうつたら？それか、ほかの男子に取つて来てもらつたら？と言つと。そこには、今日は彼氏が学校を休んでしまつたの。あんなものほどの男子には絶対に見られたくない。といつのである。困りはてたそのことをみて、安曇は決心した。そして、私が取つてきますといい、男子更衣室へ。クサイ更衣室の中をシャツとかパンツとかをかきわけ探していたら。。。。

わづきの女の彼氏にみつかつて、シャメを撮られて、ばらされたくなかつたら金出せつて言われて拒絕したらあんなつたと。」

[安曇が「コックリ」とうなずくと、まわりのみんながため息をはく

「いやあ、安曇はまつたく悪くないんじやない？その話聞く限りでは？」

美貴の言葉に全員がうなずく。まつたくである。

「そういえば、幾斗くんは？」

「ああ、幾斗さんなら生徒指導室ですよ。」

遅刻したことで、柳原先生（数学教師および担任）に説教されてるらしい。今日は一日、そこで勉強だそつだ・・・・しないだらけど・・・

「じゃあ、対策というわけで、友一君と僕と幾斗さんで代わりばんここ安曇さんを見ておく。相手が来たら応援を呼ぶつてのでそうでしょうか？」

「いいんじゃないですか？武藤大佐。」

武藤の計画に、友一は戦争ゲーム風に言つと。

「バカ野郎！そういう時はなあ、相手のとこ行つてボコボコにしてやるのがいいに決まつてんだろ？」

そういうながら屋上に入つてきた単純思考の青髪不良は、妙に機嫌悪そうな顔をしてた。

「しかし、幾斗さん。相手がどのくらいの人数かとかまだわかつてないんですよ？もし、ボコして生き残りがいれば、安曇さんが男子のパシ等をあさつている写真が全校に・・・」

武藤の言葉に顔を蒼くする安曇。

「ちょ・・・ちょつとまつて、その安曇にお願いした女の子に誤解を解いてもらつたら？」

おお～と武藤達から歓声があがるが、安曇は静かに首を振つた。安曇の顔がさつきより少しだけ暗くなると、小さく口を開けて。

「さつきの子たちの中に、あの子・・・まじつてた・・・」

え？

「ちょ・・・ちょつとまつよ、それビリーハー」とだ？

美貴が目を丸くして問う。いや、確認を取ろうとしているのだ。美貴だつてわかつてる、その女は安曇を裏切つたと言つ事を。。。。

「けつ、気に食わない女だなあ！」

幾斗が心のそこからの気持ちを言つと、安曇は申し訳なさそうな顔でみんなを見上げた。

「そんな顔しなくていいんですよ？あなたは、なにも悪くないんですから。」

武藤がサワヤカ微笑スマイルで安曇をはげます。

「じゃあ、マズその女をとつ捕まえようぜ！」

美貴がこぶしをグッと上に上げる。雛菊も軽くうなづくと屋上をおりよりとした。そのとき

「口うあー・幾斗ー・ビー行つてたあー・トイレに行くつてこつてたじやないかあー。」

柳原が屋上にやつてきて、幾斗を捕獲にかかる。

「つおー・ヤベー・じやーなお前らー。」

幾斗は屋上を走りまわりながら、雛菊たちにお別れを言いかけって階段を降りていった。はあ・・・

午後の授業が終わり、HRも終わってからは帰るだけとなつたとき安曇を呼ぶ声がした。隣の組のしらない女子である。安曇がその女子のところへ行くと、その女子は

「先生が、多目的室に来るようひって書いてたよ。」

と教えてくれた。安曇はお礼を言つて、雛菊たちに先に帰つてくれと伝える。多目的室は案外近いところにある。なのでよく先生達も、生徒指導室のかわりや進路指導室としてもつかわれる

ていうか、読者のみなさんは怪しい「オイがするな」と思つている？でしようが、実は安曇には先生に怒られる理由がたくさんあります。別に呼ばれても不自然じゃないんですね。武藤たちもそれを理解していたし。。。 （作者談）

私、成績悪いからなあ。今日から、放課後補習とかかなあ？

別の意味の不安を抱きながら、安曇は多目的室のドアを開けて中に入った。

夕日が落ちかけ、多目的室の机をオレンジ色に染めていた。そして、数人の女子達の影を真っ黒に染めていた。

安曇は自分の足に力が入らなくなるのを感じた。

しまった、だまされた。

女子達の真ん中で、やけにニヤニヤした女が一輪の薔薇を片手に添えていた。

薔薇は、夕日に染まって鮮血を浴びたよつに輝いていた。

第23話・ゴーヤは食べられないから苦いのに、それを人間は・・（後書き）

いつも、ものすいじくお久しぶりです。実はオレも、イロイロ忙しくて。。気付けば、かなりの時間更新してませんでした。その期間中、コメント、手紙をくれました読者のみなさま、まことにありがとうございます。これからも、頑張って書いていきますのでどうか感想、コメントお願いします。

さて、今回はじめて書いてみました。やっぱ難しいですね。ベタになつて申し訳ありません。

では、

第24話・Born in die・(前書き)

お久しぶりですかねえ？長いけど、読んでみてください。
マチすみません。

ガシャン

「きやあ！」

安曇は女子集団から逃げようとドアに駆け寄るが急に足に激痛が走り歩けなくなっていた。女の一人が安曇の足めがけて椅子を投げたのだ。教室専用の椅子はそれなりに重量があり、安曇のような足の細い女の子が食らえば堪つたもんじやない。すぐに足は赤く腫れ上がつてしまつた。

「どこに行くの？」

またあの女だ。そいつは、ニヤニヤと人の悪い笑顔で近づいてくると、目に涙を貯めた安曇の美しいというより可愛らしい顔に薔薇の花を茎ごと押し当てた。

顔に無数の傷ができる。まるで、猫にでもひつかれたようだ。血が染み出し、頬をつたる。薔薇の棘とは恐ろしいものだ。

「まだ、わからないの？」

女は言うが安曇には解らない。解るはずない。なんで自分はこんなことをされなくちゃならないのか。安曇が静かに首をふると女子達は安曇を囲むと、・・・・・、

「お前、どしたんだよ？」

次の日、安曇が学校に来ると突然幾斗の質問を浴びさせられた。無理も無い、足にはシップ、顔には無数のバンドエード、手等にも軽い包帯が巻いてある。怪我を見ても暴力を振るわれた事が一目瞭然だし、もともと女子達に狙われていたのだから安曇を怪我^ヤつたのはあいつらに間違はない。

心配そうな友達の視線を感じ、安曇は辛かつた。

『めんなさい

心なしか、謝っていた。

安曇はその後、幾斗達にどんなことを聞かれようと何も答えなかつた。ただ机にうつぶして、かすかに感じる女子の冷たい視線を身をもつて受け止めていた。何度も質問しても、なにも答えない安曇に不安を抱く5人だったが今のところ何かをしてあげることは、できなさそうだった。

しかし、これ以上安曇に手を出させると何にもいかないので授業の合間の10分休憩時に安曇を除く5人が集まりどうするか話し合つた。

「私は、先生に相談したほうがいいとおもつ。そうしないと、高校生活中、ずっと安曇が狙われると思うの」

「でもさあー女子のほとんどがあの女を恐れてるですよ? □封じされて、都合悪くなるのは目に見えます。」

「先生に言つべきか言わないべきか、雛菊と友一が話し合つていると今はまだ、言つべきタイミングじゃないとおもいますけど? それに、教師に相談しても相手が裏で口を合わせれば一貫の終わり」

武藤が残念そうに口を挟む。美貴も考えはするが何も浮かんでこない様子だ。

結局、なにも考え方なかつた5人は安曇をみはつて不振な女子(または男子)が近づいてきたらブロックするということになつた。

実は、この結論はものつすぐ珍しい結果である。この5人が頭を寄り合わせるのに、なにも考え方ないで常識的な戦法で相手を

迎え撃つなど前代未聞とまでは行かずともマレなのは、間違いない。

それから、1週間。雛菊はものすごい勢いで忙しい日々を送るようになり生徒会室から出るのも困難なほど仕事が発生してしまった。そろそろ秋のイベント、文化祭がやってくるので予算割り、集計、イベント、執行部の選抜など雛菊には多すぎる量の仕事が舞い込んでくる。それでも雛菊は、暇があつたら安曇と行動をともにして女子の攻撃をブロックしている。普段は美貴や武藤、友一や幾斗が安曇の親衛隊をやっているが3人は男子であり、いつも一緒に居れるわけではないのでほとんどの場合、美貴が安曇をさりげなく護つてゐる。

余談になるが、安曇をかばつたせいでこここんとこの雛菊の支持もあまりいいものではなくなつてきている。今月の生徒会支持率調査によると、前回92%だった雛菊の支持率は51%まで減少。約半減するという事態になつてている。あの女のおどしでほとんどの女子が怖気づいたに違いない。学校の半分の生徒つまり女子の支持率が低下したことから見ても圧力が何かをかけたのは間違いない。

あつ書くの忘れたけど、あの女は3年生である。つまり、並大抵の女子が反抗できる相手ではないと言つことである。

それでも、美貴や雛菊があいつに反抗したのは友情とか仲間とかそんな”簡単”に言葉に出来るものではない。熱く、熱く熱せられた鉄の鎖が身体を縛りあげるような苦しみかなにかが、胸を締め付け口から鮮血が流れ出しそうになる。辛さと痛みが自分のものではないのになにか伝わってくるからだ。もちろんそれは安曇の苦しみであり、武藤たちの苦しみであることは当然の如く雛菊や美貴は解つていた。

時は10月後半、今年は何故か寒い秋が訪れていた。今日、雛菊たちは毎年行われる文化祭の準備の真っ最中で校庭にテントを張る作業をしなくては、いけなかつた。飲食店関係のテント等を立てている。テントといつても、学校行事用のテントで（あたりまえか）かなりの広さがある。そのテントを校庭だけに20個・・・大変な作業なのである。

「会長、これはどこに張るんすか？」

「校舎横に張つて、たぶん相談室のテントだからー。」

「りょーかい」

文化祭実行委員と生徒会役員が校庭を忙しく走りまわる。回天の日差しの中、もうすぐ訪れるであろう冬の使い魔”北風”が校庭の中を悠々と駆け巡り小さな砂嵐を作ると、また悠々と通りぬけていく。紅葉が落ちて裸の木が山の半数をしめている。

冬と秋のはざま。動物達はいつせいに土にもぐるか南に逃げるかしてこの厳しい季節が過ぎ去るのを待とうとする。

タラララーラララーララララーララララッタラ

現場の監督をやっていた県立青海高等学校生徒会会長山内雛菊の携帯電話が激しくチャクメロを鳴らしながら電話受信の合図を送った。

「はい、山内ですけど」

雛菊が携帯をひろげて、耳に押し当てるとき読者の80%が予想しているはず・・・の・・・内容が聴こえてきた。

「雛菊、私。美貴。今、本館校舎4階の女子トイレで安曇がつかまつたみたい。助けに行くから一緒に来て！」

大きな声が電話から漏れ出し、雛菊の半径1m以内ではその声が容易に聞き取れる。それは、美貴からの安曇が拉致されたという緊急報告であった。いつかこの日が来るだろうと予想していたとはいえ、こんなクソ忙しいときだなんて・・・

雛菊が電話を切る。助けに行くべきか？しかし、公共事業を捨てて個人を助けにいけば確実に生徒に迷惑がかかる。人の上に立つ物は私情を権力に持ち込んではいけないと雛菊は充分承知していた。胸糞悪くてもしうがなく、現場の指揮に戻ろうとする。

すると、青海高校の副会長である平本彩が「二二二二」しながら雛菊の横に立っていた。

「雛菊さん、なんてあなたはバカなんですか。こんなところでこんなことしてる場合じゃないでしょ？」

「へつ？」

突然の話しかけに、戸惑う生徒会長をよそに副会長はとゞめの言葉を刺す。

「現時点より校庭テント張りは、副会長平本彩が指揮をとる。部外者はすぐに立ち去りなさい。」

マイクを通して校庭中に響き渡る声。無口な女の子である平本彩の貴重な大声であった。

普段無口で、無表情な副会長は普段の数百倍分の言葉と、普段絶対に見せない微笑を雛菊会長に送ると。なにも無かったように後ろを向き、テント張りの指揮に戻った。雛菊はあっけにとられたが、彼女の背中にはしっかりと「早く行け！」と書いてある・・・気がした

数十人の3年生の女子生徒が安曇と美貴を囲むと、厳しい顔立ちで2人を睨みつける。美貴は平然と立っていたが安曇は動搖を隠せない様子で、ガクガクと震えている。本館4階女子トイレ。ここは今、別の名を修羅場または戦場である。男子の援軍を呼ぶわけにもいかないこの場所で2人は孤独な戦いを強いられていた。囲まれた二人は身動きがとれなくなっていた。トイレ掃除用のモップ、ほうき、カツポカツポ（つまつたの取るやつ）を向けられて一步動けば汚れた水のついた掃除道具の餌食になってしまふ。そこえまたあの女が出てきた。

「どう、土下座して謝つて、慰謝料払えばゆるしてあげるよ」

かわいく言つてくるの逆に美貴の堪忍袋の緒を切らす原因となりそうだ・・・

「土下座ならいいけど、金はねえ・・あんたらにはもつたいないじやん」

もつともつとの髪を美貴は搔き揚げながら、明くまで強気の姿勢で言つ。

「土下座は出来るつて言つのかい？」

「上つ面だけの行動なら誰にだって出来るしね。」

美貴とその女は睨み合い、互いに火花を散らしていたが痺れを切ら

したその女は美貴を殴ろうとする。

「あんた、名前は？」

突然美貴が名前を聞く。女は一瞬ためらつたが

「佐々木友美^{ささきともみ}だけど？」

と不機嫌そうにこたえる。その答えを聞いて、美貴も大そう不機嫌そうになる。

「あんたみたいな女の名前の漢字とあたしの大事な人の名前が2文字も一緒なんてきにくわなあーい」

注 佐山友一 佐々木友美 佐 友

美貴のその言葉を聞いて、友美（さつきの女）はどんどん眉毛を吊り上げていく。ようやく爆弾ボーンといったところで友美の合図で掃除道具がいつせいに2人を襲つた。2人の服に汚れがつきまくり、掃除道具攻撃の後にバケツに汲んできた水を2人にドバッとかぶせ、2人の制服は取り返しのつかないものになっていた。紺色の制服とスカートがグチャグチャになり、黒いネクタイがブラウスに張り付く。前髪があでこに張り付き水滴が頬をつたつて流れしていく。美貴が必死に反抗を試みるがホースから放出される水を顔に受けて、身動きできなくなっている。いつももつさもつさに膨らんでいる美貴の頭は今、頼りなくしぶんでいた。

第2波の攻撃が来そうになつたとき彼女はやつてきた。トイレのドアがものすごい勢いで開きほつきを担いだ生徒会長が入ってきた。

ほつき？

離菊はほつきを剣のように構えると女どもに突っ込むがすぐに後ずさり。。。。。おい！さつきの勢いはどうに行つた！

トイレの掃除用具たちが離菊に向けられる。ほつきで抵抗するが

数が多くある。

敵が雛菊に掃除道具を向けている間、床にペタンと座り込んだ安曇は隣に座っている美貴に

「なんで、なんで私のせいなのに美貴・・ちゃんとか・・かいちよーさん・・とか巻き込んでるんだろ・・うね・・?私・・なさ・けない・・ね」

途切れ途切れの言葉に美貴が不安を持ちながら安曇をみると、安曇は床に転がっていた石鹼を持ち上げて女どもの1人にぶつけていた。

えっ？ 美貴も雛菊も硬直した。あ・・安曇？なにやつてんの？ みたいな心境のなか

安曇はお構い無しに、落ちているものを投げまくり、しまいには落ちていたカツポカツポをつかんで女どもに突進した。

数人の女子が吹っ飛び、トイレの出口が見えると安曇はそのまま出口に突進すると外へ飛び出し、ビチョビチョの服のまま廊下を駆け抜け、階段を飛ぶようにあがつていった。

トイレに残された女子はボーゼンと立ち尽くし、われに帰つた雛菊と美貴はいそいで安曇の後を追つた。

階段を上がる途中2人は、幾斗と武藤と友一に合流した。安曇がズブ濡れで走っていたのを見て、不審に感じたのだろう。

5人はわかつて、彼女が行く場所が。
屋上。。。たぶん間違いない。

5人は自分の足が速くなつていいくの感じながら、屋上にいそいだ。

屋上は安曇以外誰もいない。グチョグチョに濡れた制服を北風にさらしながら、自然に頬をつたる涙をこらえながら安曇は屋上の端へと足を勧めた。太陽がまぶしく輝いてるはずが、今は雲に隠れて影になつていてる。

死のう

安曇は決心していた。迷惑はもうかけたくない。

屋上から下を見ると足が竦みそうになる。しかし、安曇はしつかりと足を屋上につけて立つていて、死のダンスのはじまり

[安曇はゆつゝと地獄へ足を踏み出やつとしたそのとき

「安曇！まてえ！」

背後から幾斗の怒鳴り声が聞こえた。5人が屋上までやつてきたのだ、幾斗が近づこうとする

「来ないで！」

安曇が。。。あの安曇が、安曇らしからぬ声をあげる。

「幾斗さん、僕に行かせてください。」

武藤が幾斗を見る、幾斗はそうしてくれと念図を送る。

武藤が安曇に数歩近寄った。安曇との距離は約6～7㍍ぐらい。「来ないでえ！」と言い続ける安曇に武藤はゆつくり口を開いた。

「安曇さん。何をしようとしてるんですか？」

「死・死のう・・としてる・・の！」

弱弱しく、しかし力の籠つた声が聞こえる。

「なんですか？」

武藤が険しい顔で問う

「み、みんなに迷惑かけちゃうからだよ。会長さんや美貴ちゃんたちにも今日、迷惑かけちゃったし。私は消えた方がいいよー。」

安曇がそう言つてゐるときに佐々木らが屋上に上つてきた。しかし、安曇も5人もお構いなしである。

武藤は、雛菊と美貴をちらつと見ると、少し考えてから

「貴方は、自分がなんのために生まれてきたか知つてますか？」

その場にいた全員の頭に？マークが浮かんだ。武藤はおか

まいなしに続ける。

「俺もそうですが、きつと死ぬために生まれきたんじゃないです

か？」

「わらご？ マークが浮かぶ

「そして貴方は、その目的を達成しようとしている。そう、死ぬ事によつて。」

もう、わけがわからない。

「じゃあ、貴方は貴方が生きている意味をしつてこますか？」

「そんなもの無いから、死のうとしているんだよお。」

安曇が口を開くが、武藤はうろたえず

「無い？ 違います。見つけてないだけです。」

武藤の目が少しばかりきつくなる。（少しだけね・・・）

「あなたは自分の生きる意味すら見つけて無いくせに死のうとしている。それは、生まれた意味を達成することにはならないんじやないでしょ？ B o r n i n g d e a l . それは、生まれた意味で貴方は生きてる意味を見つけてない！ それは、無駄死にに等しいんじゃないですか？」

武藤は「ゴクリとつばを飲み込むと

「あなたにはまだ、生きる意味をみつける義務がある。」

武藤がそこまで言つと突然友一が

「そうだよ、武藤さんの言つとおりだ！ 収納品をゲットしても赤い木箱に入れなくちゃクエストクリアにはなりませんよ？ 最後まで行つて、旗に飛びつかなきやステージクリアになりませんよ？ あなたが今しようとしているのは、自分から穴に落ちていこうとしているのと同じですよ！ それは、クリアじゃなくてゲームオーバーですよ！」

友一・・・こんなときぐらいゲームから離れろ！

友一がそこまで言つと、女子の集団の中の1人の少女が
「安曇さん。悪いのは私です。安曇さんにあんなことたのんぢいで、
友美の脅しに乗つたりした私が悪いんです。「ゴメンナサイー！」
この少女こそ、安曇に頼みごとをした、あの日彼氏が風邪で休んでた女の子だ！

少女がその一言を言つたあと、女子たちが口々に
「友美さん、どうこいつことつすか？ 安曇が悪いんじゃなかつたんす
か？」

「嘘ついてたんすか？」

「友美さん・・・信頼していたのに・・・私達がやつたのは、ただ
のイジメじゃない」

「…！ …！」

「…！ …！」

女子の集団が崩れる。そしてみんな口々に安曇に・・・

「安曇、おめーが死んだら俺のパンは誰が買つてくれるんだよー。
自分で買つて来い！（ここからは作者のツッコミです）

「あたしのメイクだれが手伝つてくれるっての？」

美貴・・そこか？

「こんど一緒にモン ンやるつけていったじゃないですかー・ティ

2頭！！」

お前はゲームから離れろ！

「私の相談だれが乗つてくるの？」

さすが、まともだ生徒会長

「安曇さんみたいな優しい人にしなれたくないです。わたし、本気
で謝りますから死なないでください。」

まあ、同意してやるわ。

「……」
「……」
「……」

雲に隠れていた太陽が屋上に光を流し込む。濡れていて、水のしずくが落ちるが、それに太陽が反射してキラキラと輝いていた。

安曇はまぶたに涙をいっぱいためて、みんなをみた。差し込む光よりもまぶしい仲間達がそこにいた。暖かい日差しより熱い謝罪の言葉が安曇にふつていた。地獄は終わった。

武藤はそつと安曇に近づく。安曇はもう、なにも言わなかつた。ただ、ぬぐつてもぬぐつても出てくる涙を抑えるのに必死だったのだ。

近づいた武藤に安曇は
「武藤君。わたしはやつぱり死ねないや……わたし、臆病だから。」

安曇が涙をためた田で武藤を見上げると、武藤はいつものスマイルで
「死ねないのはあなたが強いからですよ。死は逃げ道ですか。」
安曇がコクリとうなずく。雛菊も美貴もしぜんと涙がこぼれて
た。幾斗も友一も胸をなでおろしていた。

終わった

終わったんだ

ビュウー

ハッピーエンドを好まないのか、冬の使い魔は安曇めがけて突進した。この秋一番の北風が屋上を襲う。そしてバランスを崩した安曇と、助けようとした武藤が同時に引力によつて地上へ引き込まれていった。

みんなが駆け寄る。

空中で安曇を抱き上げた武藤はもうどうしようもなかつた。でも、最後に自分がやるべきことは分かつていた。

安曇を抱きかかえたまま、自分の背中を真下にむけて、自分を安曇のクッションにしようとした。安曇は目をつぶつている。

2人の人影は5階建ての校舎の屋上から校庭へ落下した。

人生で一番長いと感じられる、命綱無きバンジージャンプ。

そして2人は校庭の1つのテントを破壊して地上に着いた。

実は2人とも無事だった。テントがいいクッショーンとなり死にはしなかった。しかし、下側になつた武藤は救急車に運ばれていったし、安曇だつて保健室で寝かされてた。保健室の先生はだいたいないのでその隙に、イジメをした生徒達が変わりばんこに土下座しに来た。安曇はいいと言つているが、どうにも土下座しないと気が治まらないらしい。

そして、最後に彼女がやつてきた。女のリーダー。佐々木友美。

友美がやってきて、安曇は多少緊張していた。まあ、当然だろつ
が。友美と安曇の間に少々沈黙の時間が流れだが・・・

やぶつたのは友美だつた

「あのわ・・その・・金が欲しかつたわけじゃなかつたんだ。」

安曇が？マークを浮かべる。

「実はさあたし、武藤くんがすきだつたんだ。」

「！？」

安曇が驚くが口を押さえて驚いている。しかし、友美はおかまい
なしに

「あんた、武藤の彼女だろ？嫉妬してたんだ。あんなことしても武
藤くんは振り向いてくれないって分かつてたのに。なんでかやつて
しまつて。」

友美の話を黙つて聞いている安曇

「最低だろ？わたしつてどうかしてる。ゴメン。いや『めんなさい
！』すみません。」

だんだん涙声になつてくる友美に安曇は

「しようがないですよ。誰かを好きになるのは女の子の仕事ですか
ら。」

安曇の言葉が以外すぎたのか、友美は顔を上げる。

「友美さんはその愛情表現を間違えちゃつただけですよ。」

「あなた、わたしを憎まないの？」

友美が尋ねると

「憎んでも、わたしは幸せになれませんから。そして、あなたもね。」

「

頼りない安曇。でも、心の持ぢよつは実はしっかりしてたり。
。 そうでなかつたり。

その日の帰り道、幾斗と雛菊はいつもどうり商店街を歩いていた。
もうすぐ訪れるであろう冬に向けて防寒グッズが多数売られていた。
その帰り道、幾斗は不思議なことを聞いてきた。

「なあ、雛菊。」

「ん？」

さつき話したばかりなのに、なぜか久しぶりに話していくよう

な・・・・そんな気がした。

「力つてなんだろうな？」

幾斗の質問に雛菊は答えられなかつた。解らないからだ・・・・

少したつて、幾斗が口を開いた。

「きっと暴力なんかじゃねえんだろつた。」

北風が一人の背中をそつと押した。

それから1週間もたたないうちに武藤は復活した。どんな生命力もつてんだか・・・

「武藤くん。大丈夫。あの時は・・・『めんなさい。』」

安曇が少しションボリと武藤にあやまるが、武藤はいつもと変わらぬ笑顔で

「貴方を護る事が今のところの僕の生きる意味ですから」

安曇の頬が少々、赤く染まった

第24話・Born in dei・(後書き)

安曇のイジメ編完結。長く苦しい戦いでした。今回は笑い無しだとは思いますがカンベンしてください。次話は笑える話にしていきたいです。なんでイジメについて書いたのか？

詳しくはブログをみてください。

<http://green.app.teacup.com/kao-san/>

ケータイの方ごめんなさい。近々、トップにURL貼るんで、良かったら見てください。

コメント、感想、心よりお待ちしております。

第25話・なむななよお？（前編）

よう。

第25話・なめるなよお？

北風もますます冷たくなり、本格的に冬がやってきそうな雰囲気である。

青海高校は、今や少しばかりの静けさに包まれている。先週の週末に行われたビッグな学校行事、学校祭が終わってから今週の月～火曜日は休暇となっている。高校生はみな友と遊んだり、恋人と語らつたりと束の間の自由を思う存分味わうのである。

そんな中、一人高熱にうなされる少女がいた。。。言わなくてもお解かりいただけるでしょうがいちよう言います。

山内雛菊 である。県立青海高等学校生徒会会長である彼女は学校祭時、膨大な量の書類と、多大な重労働、毎日のように開かれたイベント、予算についての会議に奮闘していた。寒い中、夜遅くまで仕事をすることも屢々^{しばしば}あつたし辛い重労働中に怪我をする事だつてあつた。（たいした怪我じゃありません。）

まあ、そんなこんなで学校祭を大成功に終わらせて、その疲れゆえにこの休暇中に高熱を出して倒れた・・・ということなのだ。
(簡単にするとねw)

とまあ、学校からさほど遠くない雛菊の家では息苦しそうにギザギザーと息をする雛菊と、39度の高熱を出す娘を看病する雛菊の母がいた。

「雛菊。大丈夫？お昼は、なにか食べる？おかゆ？」

心配そうに美人ママが雛菊に問うが、ヒーヒーと苦しそうに息を上げる雛菊はカラカラの雑巾から水をしぼり出すような声で

「お・・母さ・・む・・り・・・ゼええーはあー」

せりに何かを言おうとする愛娘に向かってママをさせしゃしく頭をなでると、

「もひいこから、ゆづくじ休みなやー」

そして、おでこに張つてある熱やまシートを張り替えて薬を飲ませると雛菊の部屋から出で行つた。ゆづくじと扉がしめる。暖房のきいた雛菊の部屋はベットと机とパソコンと。。。優等生の生活感あふれる場所だ。ベットの横には窓があり外が見える。

外には北風によつて落ちゆく色とりどりの落葉や、南に向かつツバメ達がみえる。

39度だった熱は、毎過ぎには40度を超えていた。寝ているのか起きているのかもわからなくな。熱いのか寒いのか・・それすら解らない。ベットが揺れるよつた感じがする。天井がグルグルと周つている。吐き気がする。幻覚がたまに見えるようになつてきて、鯛が部屋の中を泳ぎまわっている気がしてならない。ママさんが部屋に入つてくると愛娘は目をグルグル回しながら天井を指さし

「おかあ・・・さん・・・鯛・・鯛が泳い・・でるー・

と弱弱しく叫ぶのだ。

「ー・?」

さすがにヤバイと思つたのかママさん医者に電話して、今日2度田のお医者さんがやつてきた。すぐにやつてきた髭面にメガネの中年医者は雛菊にブトイ注射をブスッと打ち苦い薬をあたえて、点

滴をさした。人間は体温が43度を超えると、たんぱく質が分解して死んでしまう。つまり、離菊は今死の境に居るといつても過言ではないのだ！あと・・・あとたった3度？お医者さんも、たとえただの熱でも死に至る可能性は充分にあることを承知して自分にできる最善のことを行うと、「お大事に・・・」の言葉を残して帰つていった。

をさ迷い続けた

お医者が帰つてから1時間くらいたた頃、いまだに離菊の熱はおとなしくならない。体温計の数字は39度と40度をいつたりきたりしていたし、ベットの揺れも、天井の回転数も増えている。寒いのに熱い、熱いのに寒い。

苦しい 苦しい 苦しい 苦しい 苦しい 苦しい
くる・・・くる・・・くる・・・し・・・い くる・・・し・・・い

幻覚こそ少なくなつたものの、吐き気と頭に響くシンバルのような音？が全身から力を奪い、何も考えられなくなる。パジャマは汗でびっちょりと濡れ肌に吸い付いている。

苦しい・・・私・・・死ぬのかな？

#苦しさのあまり、そんなことが頭に浮かんできた。（大袈裟ではありません。マヂです。）

息の苦しさ、温感の変感知、幻覚、幻聴、吐き気、頭痛、鼻水、高熱。・・・苦しくて、苦しくて・・・しまいには苦しさのあまり軽く気絶してしまった。ピヨピヨと星が浮かんでいそつだ。

離菊はそれから死境

peculiarities .

s

?

離菊には聞こえた。そう聞こえた。誰が、言っているのかわからないが。

まるで、頭の中に語るよつた感覚。これは夢？それとも地獄かなにか？

誰かが言ったその言葉。異国の言葉。

前文は聞き取れなかつた。でも最後の文は確実に聞こえた。

?

死ぬのは恐ろしいでしょ？

恐ろしい・・・恐ろしいよ・・・

それから少しだって、雛菊が田をあけると身体がものすくへ
樂になつていった。力が入る。熱も・・・ない。

苦しくない！私！苦しくない！

やつた！やつたよ！苦しくない！苦しくない！

そして、

「・・・・・・・・」

歓喜の声を上げようとしたら、声が出ない。口はあけているのに声
がでない。

そして気が付く、自分が居る場所がどこなのか・・・。

なんで、私。自分の家の玄関にいるのかしら。

戸の前に座り込んでいる自分。しかも、戸がいつもより大きい。
チャイムに手が届かない。

手?

離菊は手をみて睡然とした。ふかふかと毛が栄えている。？
手の裏には犬や猫のよつた肉球があり、少し力を入れると鋭い爪
がでてくる。？

後ろを振り向くと美しくのびた尻尾が毛をふわふわはねしてゆら
ゆら揺れてる。

「・・・・・・・・・・・・」

顔を触ると長いひげと丸い輪郭、ピンと張った耳がある。鼻は少
々湿ってる・・・・

ま・・おやか と思い。むつ一度息を吸つてから声を出してみる

「一ヤアー・・・・・・」

ええええええええええええええええええええええええ
えええ？？

私・・猫・・猫になつてゐる。

離菊のママさんは猫アレルギーなので、せひとママさんが外
に出したのだわ。

高熱でついにボケたのかなあ？これ、夢かな？

それでも、こんなところで突つ立てる暇はない。ママさんがき
たら しつしつとか言われるだらうし・・・

夢ならさうと覚めて欲しいところ、もし現実だったらやばいと思つ。

とうあえず、家をでて路上を歩く。

夢ならそのうち覚めるだらうし……それにしても力ラーな夢なんてはじめてだなあ・・

雛菊には聞こえないように言つけど、カラーの夢を観る人つて相当精神がヤバイらしい。前に、精神医学者が言つてたつけ・・

家を出た瞬間、外は危険な場所だと気付く。自転車が横を通りすぎる。ゴオーと音を立てて走る自転車に、下手したらひかれて死ぬ。続いて車が走ってきた。まるで巨大重戦車のような轟音と共にやつてくる鉄の塊は、恐怖である。おもわず電柱の影に隠れてしまつ。車は何事もなく走り去つていったが、怖かった。

また歩き出すと、アリがいつもよりでっかく見える。巨大だ！いつもチリぐらいのクロヤマアリが粉チーズの筒の底の方に固まつた塊をむりやり棒でつつつにして出てくる欠片ぐらいの大きさがある。（解りにくう！）そんなことを考えながら下を向いていると向こうから犬ずれの近所のおばさんがやつてきた。おばさんがつれるゴールデンレトリバは怪獣のよう、雛菊を見つめてくる。雛菊からは冷や汗がしてきた。小さくなると世の中の見方が全然変わる。今まで普通に見てきたものが怪獣になつたり巨大になつたり、重戦車になつたり・・・・・。

ダッシュで走つて逃げた。周囲にも注意を充分払つてゐる。いつ鉄の塊が自分をひき殺すかわからない。

走つて走つて・・・たどり着いたのは家の近くの公園。いつもならすぐつぐのに、猫になつたために歩幅が小さくて、臆病になつてしまつているから慣れるまでスピードはでそうにない。猫も大変なのだ・・・

公園のベンチに座り込んでいると腹が減ってきた。いつもの倍以上の広さがある公園を見渡していると、一匹の猫が近づいてきた。片目がつぶれた黒猫。このあたりのボス猫だろうか？耳や目に傷跡が痛々しく残っている。その黒猫は怖い目を効かして雛菊の方へ近づいてくる。よそ者が俺のテリトリーでなにやつてんだあ？ああ？って感じに。喧嘩のプロだろうから戦つても勝ち目がない。逃げようとした後ずさりしてたら後ろは行き止まり・・・・前には黒猫・・・・死？それはなくとも、顔が傷物になる・・・・やだあ！！！右も左もわからない、ソーックとは恐ろしい（間違い！パニック）

相手の黒猫は喧嘩なれした動きで雛菊に飛びつこうとした

バコ！ ギヤウ！

怖くて目をつぶる暇も無かつたのだが、そのせいで今の瞬間を見てしまった。黒猫が赤いランドセルに殴られて吹っ飛ぶ様子を・・・

どうやら助かったらしい・・・（こんなところでカワイイ主人公が傷物になるわけが無いよねえ・・・笑）

女の子が一人、ランドセルを片手にもつて立っているから、彼女が雛菊を助けたのだろう。

小学生の女の子は黒猫に喧嘩売られてブルブル震えている離菊をジッとみつていた。少女の澄んだ瞳は純粋そのもので美しく、髪を後ろで結んでいてクルンとカールしている。肌は白くて、無表情…・しかし、かわいい少女。赤いランドセルをもつてるので小学生に間違いない。少女は離菊に

「大丈夫」

と語りかけると未だに震えている離菊に

「食べる？」

と食パンの余りらしきものを差し出してきた。

ぐうー

昼からなにも食べてない離菊には格好の食料である。今は猫だし、夢だしと思いパンに食らいつく。パンが美味しい。

「いやー

ぐうー

「私の家に来る？」

ぐうー

とりあえず鳴いとく。それが猫の礼儀だと思つたからだ。

淡々とした乾いた言い方だが、たぶん彼女にとつての精一杯の気持ちだらうか…

「いやー

ぐうー

困ったからとりあえず鳴いてみた。

その声を聞いた少女は無表情なその顔に少しだけの微笑をともし、離菊を抱きかかると持つっていた布袋にここんだ。

はたからみたら、誘拐に見える。（猫の）

いかん！なんか、展開速いよくなあ・・（作者へへ・）

「アーティザンの、ハンドメイド。」突然の訪問に、アーティザンの、ハンドメイド。

暗くて怖いのでとりあえず鳴く。てか、突然の行動で多少の焦りも入っていた。いや、鳴くしか出来ない。じたばたと暴れる。

少女はナップザックを背負うと歩き出した。後ろで「んぐく」鳴きわめく猫なんて全然お構い無しに歩き出す。ボーッとしているのか、無表情なのか・・・

じたばた暴れて、やつと雛菊は頭が出せた。
・・こわあ！
ナツブザック
布袋から猫の生首が・

そんなことして約10分後、少女は「ただいま帰りました」と言いながら自宅らしき所に到着した。そこはボロボロマンションの2階だった。布袋から頭だけを出している状態の雛菊。ある意味怖い。

「兄さん。これ飼つていですか？」

布袋」と、お兄ちゃんに少女は突き出す。お兄ちゃんは布袋を開けると雛菊を引っ張り出して、目を丸くするが田を丸くしたのは雛菊も同じだった。

—
猫？

「一九四九年十一月一日」

「はい。猫です。」

少女の兄貴は猫を抱き上げると猫を優しく抱いてみる。離菊の顔に肩まで伸びた美しい青色に染められた髪があたる。くすぐったい。

兄貴は雛菊を床に降ろすと雛菊をジロジロと見てくる。見上げて、兄貴さんをジロジロと見ていた。
雛菊も上

またか、毎朝やつてくる家に運ばれるとは…

雛菊は忘れていた。いや、少女の髪型がいつもと違うのがだいたい悪いのだが…。彼女は間違いなく雛菊の”愛人”の妹！である。（なんでこんなに強調！？）つまり、口々は雛菊の”愛人”の家！（しつけえ！）つまり、好きな人の自宅…。

回りくどい！赤城幾斗の家だ！（最初から書け！…）

あせつた！

運がいいのか悪いのか…？まあ、知らない叔父さんとかよりいいかもしないけど…。そんな雛菊の恋心と自分の身体の変化への心配心など幾斗はまったく気付かない様子で

「露子！こいつメス？それともオス？」

「知りません。」

幾斗の間にたい焼きそうに妹は答える。ちつと軽く舌打ちしながら幾斗は

「さあ…お前はオス？メス？」

とか言いながら雛菊を捕まえると、ひっくり返して後ろ足の間を開こうとした

「ここやああつああにゃななやなやなや…」

幾斗くんのえつひつち!バカあ!いやあ!

「おい! 暴れんな! つて! いてえ! ひつかくな!」

「いややあなたにやあなたや」

「クッソ! 股開け! おい! お前、玉つにてんのかあ?」

「ういやあああつあ! !」

たとえ体が猫でも、精神は人間と変わらない。好きな人に突然、股開け!なんて言われても、顔から火が出る思いになるのはしょうがない。みなさんも考えてみてください、雛菊の立場になつて。

雛菊が必死に抵抗し暴れてるし、幾斗もなにやらムキになつてるのでバカみたいな1人と1匹を冷静な妹は白い目でみていた。見ているだけ、止めない・・・

「股開けよ! 死にやあしねえよ!」

「ういやいやいや! !」

ヤバイ! だんだんただの変態小説になつてきてないか? (作者)

バカみたいな争いを続ける兄と猫をみてあきれたのか、妹さんは猫を抱き上げて幾斗の目の前に突き出す。

「どうですか?」

顔の前にはしたなくぶら下がる猫をみて幾斗は

「オスじや・・・ねえーみたいだなあ・・・・・」

「いや・・・あ」

弱弱しく雛菊が鳴く。誰か私を殺してえーつてほど恥ずかしかつたようだ。

猫になりてえーとか思つてゐやつは多いだらうが、
猫つてのはそんなに樂じやねえーぞ？

そんなんで、雛菊の猫ライフがはじまつてしまつことになる。しかし、雛菊は嫌でも夢と信じたいのか時折起きり起きりと身体に念じては頭をポカポカ叩いたり、顔をひつぱたりしている。そんな猫をみて妹様は

「兄さん、どうやらモづくろいしてゐよつですよ?」

と勘違といつても妥当な勘違いを行つてこる。

雛菊の気なんてまつたく解つていない兄妹は、猫を抱いたり触つたり、いじめ?たり・・・・(注)あきらかに最後は幾斗です。

「じゃあ、名前をつけよつ!」

当然ペシトを飼うとなると、名前が必要になつてくるわけで、しかも呼びやすいやつが・・・名前決めとは以外に重要なことなのかもなあ・・・

2人が考察モードに入つて、名前をあれこれ言つてゐる。

「にやああつあにやあ」

雛菊はチャンスだと思つた!「にじで自分が雛菊だと氣付いてもらえば、もしこれが現実ならもとの姿に戻る手助けをしてくれるかもと思つたのだ。こういう時は思いきりが大切なのだ!やれえ!

雛菊は、自分の名前を必死に考へる兄妹の目の前に行くと「にや

あにゃあー！」と呟んで注目せしむ落ちてこるペンを握つて、いらぬと思われる広告の裏に握るのも困難な手でたゞたゞくペンを走らせた！字はグーヤグーヤになるがなんとか「ヒナギク」と書いた！幾斗も露子も田を丸くしてしまつた。（何回丸くするんだ！）そんだけ、驚く事の連発なのである。

ぐちやぐちやだが、なんとかヒナギクと読めないでもないその文字をみて・・・幾斗は

「すいにお前・・・自分の食べたいもの書けるなんてなあ・・・」「ひや？」

食べたいもの？

「それにしても贅沢な猫ですね？」

露子もその離菊の必死の想いを書きつけた紙を見て、哀れな動物を見る田で離菊を見下ろした。

へつ？

「じょうがねえーなあ！今日だけだぞー露子、買つてきてやれ。一

番安いのでいい・・その他、必要なものも

「解りました。では、行つてきます」

幾斗は露子に野口秀雄を数枚渡すと、露子は小走りで家を出でつた。

「でも、まさか”ラザニア”が好きな猫がいるとは思わなかつたぜ？」

ラザニア？

ヒナギク＝ラザニア？

どう読んだらラザニアになるのよー。

「ニヤア！ニヤア！」

勘違いとは恐ろしいものだなあ・・・ついでにみんなは、ラザニアを「存知でしょうか？」

ラザニアは、平たい板状のパスタの一種、またはそれを用いたパスタ料理である。アメリカでは、平らな板ではなく、トタン屋根のように波打っているものが広く使われているそうだ。料理の場合には、イタリア語で「オーブンで焼き上げたラザニア」を意味するラザニア・アル・フォルノと呼ぶこともあるそうで、深さのある耐熱容器に、ベシャメルソース、ミートソース、ラザニア、チーズを何層か重ね、最上段のホワイトソースに焼き色がつくようにバターを乗せて、オーブンで焼いたものなのだ！もともとイタリアの家庭料理で、非常に高カロリーである。

露子が帰つてくるまでの間、幾斗は雛菊を抱き上げてみた。微妙に雛菊の胸の鼓動が早くなつていてるのを感じる。

身体は猫、心は雛菊・・・

幾斗は雛菊を膝の上にのつけると、頭をナゼナゼとななる。

猫になるのも悪くないかも・・・

そんなことを思つてしまつた瞬間があつた・・・茹でぬえの過
たりあ・・・

幾斗にナゼナゼされて、ギュウと抱かれて16歳の少女の恋心には充分すぎる幸福感とドキドキ感が胸を襲つ。悲しいけど、人間の時じや絶対にそんなことはしてもらえない。猫になるのを悪くないと思つのも、当然なのである。

「じゃあ、ラザニア好きのお前の名前は”パスタ”だ！決定！」
「いやいや？」

と、言つわけであな菊の名前は今日からパスタとなつた。ややこしくなるので、口からあなた菊のことはパスタと呼ぶ事にしよう。

それから少しあつと、ラザニアを近くのスーパーで買ってから帰つてきた露子はラザニアをパスタの前に出してきた。パスタはラザニアを前にされ、ここで食べなかつたら失礼なので高カロリーのラザニアを誇りにかけて平らげた。実際、彼女は死ぬかと思つたらしい。

だいたい、腹いっぱい死ぬなんて贅沢な話なのである。

「そつとつラザニア好きなんだなあ・・・」

しかし、パスタの必死の行動は幾斗と露子の誤解を深めるだけであった。

やっぱ猫になりたいなあ！…と思つ人がいたら必ず次回を見てくれ！

今日は疲れたので

つづく！　おひい！

第25話・なめるなよお？（後書き）

今回なんと、非現実的な小説を書いてしまいました。でも…書きたかったんですね…何故かは知らないけど書きたかったんです。実は家には猫が2匹いましてねえ…2匹とも野良猫から出世して飼い猫になつたんですけどね…幼い頃その猫の1匹に猫と俺の人生を教えてくれと神様に願つた事がマジメにあるんですよ。バカでしょう？で、願つた日の夜に得意な想像力で猫になつたらどうしようと考へたんですね。すると、マジでなつた気分になつて、想像の中でイロイロ苦労した覚えがあつたんですよ。その経験から書こうと思つたんですね…。

長々とすみません。感想、コメント、評価…マジで待つてます。
もうつたらかなり嬉しいですw

あと、ブログもヨロシクですw

第26話・夢は時に現実となる。そんなことあつたら俺は死ぬ。（前書き）

いつもお久です。

第26話・夢は時に現実となる。そんなことあつたら俺は死ぬ。

私は猫である。

夏目漱石先生もこんな感じの出だしをした有名な小説を出版されていました。そして、今もなお親しまれている。

そんなことは、もともとこの物語にはあまり関係をもたない。では、なぜ書いたのか？

人生、意味を持たない」とのほうが多いからだ！

そして、今私が猫になつていることもそれほど意味を持つているとは思えない。

前回、山内雛菊は高熱にうなされた後に目を覚ますと外界は巨大に・・いや身体が縮小し世間一般に猫とよばれる小形動物に身体が変形していたのだ！そのせいで、自転車におびえたり野良猫に襲われたりと苦労してなんとか赤城家のあるボロマンションに流れついた。

そしてそこで、恥ずかしいことをあせられたあげくに、リザニアを腹いっぱい食わされた。

はあ・・・

幾斗の妹である露子は幾斗が雛菊に”パスタ”と言つ名前をつけたと聞くと大反対した。

「兄さん、もつとかわいい名前はつけてあげれないんですか？女の子ですよ？」

幾斗は反対する妹に対して

「悪かったよ、じゃあカワイイやつを考えてやれよ」と、あっさりと反対意見を聞き入れた。幾斗にとつて、名前など、どーでもいいことなのだろう。

妹に対してはまったくもつておだやかな性格を維持しているようだ。

夕刻に近づき、今日も一日の仕事を終えた太陽が西へと沈んでいく。空は真っ赤に染められ、美しい光を撒き散らしていたと思えば、いつのまにか青ざめ、暗い夜へと向かう準備にかかる。幾斗の住むボロ家は現在露子、幾斗、雛菊の2人と1匹だけである。

リビングでグダグダと流れゆく猫との戯れの時間を過ごしたあと、幾斗はなにやら台所へ消えてしまった。その間、雛菊は露子につかまっていた。しかし、捕まっているとは言つてもそんなに悪い気分じゃない。なぜか知らないが、そこまで嫌でもないし頭をナゼナゼされるのや首元を触つてもらうとものすく幸せなのだ…

もうやつてだんだん心までも猫になつてしまつたりして？

ないない　ないと信じたい

日はすっかりと落ち、明るい星達がキラキラと瞬きはじめる。青海町は大都市ではない・・大都市の近郊にある小規模工業工場群の工業団地が出来た事をきっかけに出来た町であり、人口もいたつて普通である。

あちらの家庭、こちらの家庭と螢光灯の光が付きはじめてついには空を覆つ星よりもキラキラと輝いていた。

「おおー、露子～飯できたぞ！」

やつぱいながらHプロンを纏つた幾斗が台所から戻られた。

「…………」あわなー・・・

雛菊は心底思つた。Hプロンにはかわいいひよじが書いてあつたし、なにしろ幾斗のイメージとなにかずれてる氣がするのである。

だつて、幾斗不良だよ？

しかし、これも幾斗が普段雛菊達の前ではけして見せないすがたで、なんだかとても新鮮に思えた。

幾斗はこつもこつやつて飯を作つてゐるといふ新たな発見

秘密とこづか、なんと書つか　いやこづかとを知る事で、少しだけ自分と幾斗の距離が縮まつた氣がする・・雛菊であった。

「えーと、お前はラザーラ食つたからこれだけな」

と幾斗は雛菊の前にタマの煮付けを少しだけ皿に盛つて差し出した。とても良い匂いだ。

「こやあー

とお礼を言つと早速食べてみる。手を使えないから食べこくいがラザーラほどではない。鋭い歯でタマを噛み切り、口の中によく噛む

「つこやあ・・・」

お・おこしへ・・・

柔らかくなるまで煮込んであるタマがよくしみこんだ甘い醤油・・まるで母の味のような懷かしくて香ばしい・・・そんな味がした

幾斗くんは料理が上手なんだ・・・　とこづか発見

ちやぶ台の上に露子は煮付けやつ飯、味噌汁などをならべていた。

どれも大そう良い匂いをあたりに撒き散らしていた。全部幾斗の料理だ

はたからみるビンボー臭そうにみえるが、そのへんにある安物の冷凍食品よつよつぽど上手そうだ。

露子が晩飯を並べ終えると、幾斗が2人分の箸を持ってやつて来た。

- そして手を合わせて食事を開始する。

ガツガツ モグモグ

幾斗も露子もガツガツと飯を食べる。相当お腹が減っていたようだ。2人とも食事のスピードは半端無くて、食事開始から5分もたたない内にお皿は空っぽになっていた。ついでに、雛菊はまだ食い終わってない。。

「露子、今日は早く寝ろよ！」

食器を片付けながら幾斗が露子に言った。

「今日、なにがありましたつけ？」

妹は不思議そうに問うと兄貴は

「今日は御袋が帰ってくるから。俺はバイトなんだよ。すぐ帰つてこれると思うけど、もしかしたらお袋のほうが先かもしれないから寝てろよ」

幾斗がそこまで言つと露子は納得したよつよづなずいて、自分の皿を幾斗に渡すと風呂場へと向かつたよつだ。

御袋へお母さんのことだよね。帰つてくるから寝てろつじつといふ？

雛菊は不思議がつた……実の母が帰つてくるのに寝てろつて意味がわからない。もしそれが雛菊のことなら、母が帰つてくるとなると家を片付けて首を長くして待つてこね」とであつた。不思議でしかたない。

お母さんのこと嫌いなのかな？

幾斗はしづらしくみると、家を出て行った。やつしの話からしてバイクだつた。ところどりのヒジが走り、土塗りの壁は永い年月をかけてかとも色褪せていく……それでも汚いという感じはしない。たとえるなら、ボロボロで今にも倒れそうな龍骨をさりすばん船のような感じ……

しばらひ雛菊はボケッとしていた・・

幾斗の家は外から見ても中から見てもやつぱりボローマンションだった。ところどりのヒジが走り、土塗りの壁は永い年月をかけてかとも色褪せていく……それでも汚いという感じはしない。たとえ

る「じ」となく懐かしい、まるでおばあちゃんの家のようだ。

おばあちゃんの家＝龍骨をさりすばん船か？仮にしたら負けつてゲーム？（作者）

數十分後に露子が風呂から上がりてくれる。いつもクルンとカールした髪は水を吸つてしまつすぐになつてあり、額に髪がべつとつくつついていた。

「いけません……もうこんな時間です。」

時計を見ると9時を過ぎていた。幾斗がバイトへ出発してから30分ほどの時間がすぎてくる……露子はなにやらイソイソと寝間着を着

ると、雛菊に

「一緒に寝ますか？」

と尋ねてくる。「ヤアーぐらうしか言えない雛菊はどうしようもな
くヤアーと鳴くしかないのであった。

返事をした猫を抱き上げ、露子はリビングの隣にある露子の部屋
に連れて行かれた。女の子らしい部屋が、少々ボロイ和室に広がっ
ていた。リビングと露子の部屋をは引き戸で結ばれていた。

露子はさつわと毛布を用意して、雛菊を抱いたままベットに転が
った。ほのかに香るシャンプーの匂いが雛菊を包む。清潔そうな白
いシーツの上に、露子はピンクのふかふかとした毛布を並べると雛
菊をベットに下ろしてから自分もベットに横になった。

かなり冬が接近しているので、露子にとって雛菊はいいカイロで
あつた。ふかふかだし、あつたかいし……。

ベットに転がって数十分とたない内に露子は寝息を立ててしまつ
た。

寝るのハヤッ！作者じや無理だ！」の速度！

よつぽど眠かったのが、よつぽどお母さんが嫌いなのか…

雛菊は横で寝るまだ小学5年生の少女を少しの間見ていた。自分
に引つ付いて寝る幼い小学生を見て、雛菊は妹が出来たような心境
になっていた…

なんか可愛いかも……

といつても今雛菊は猫なので露子のほうがでかいけど……

窓からこもれる月明かり。静かな静かな夜……電車の音や、露子のスースーという寝息、

そんなかすかな音たちが聞こえるが、睡魔という魔王は雛菊を夢の世界へ引きずり下ろそうとする。雛菊は抵抗することもせず、夢といつ名の深い谷へと落ちていった。

「こじはね？」

延々と続く純白の空間……畳空間とでも言つのか、真っ白な世界は水平線が見えるまで真っ白だ。空も床もすべてが真っ白で、自分の存在が分からなくなる。純粹な白……それは何故かとても不気味に思えた。何も無い……不安と寂しさがこみ上げてくる。

「こじはね？」

人一倍寂しがりやな雛菊がその亜空間にたつた1人で突っ立っていた。真っ白な世界に真っ白なロングT・シャツだけを着こんでいる。なか異様な光景だ、白の空間に白の服、唯一違うといえば真っ茶色の長い髪、真っ黒な瞳だけであろう。

「こじはね？」

ここには自分の場所はない……ここには安曇や美貴や武藤や友一や……そして幾斗もない。母も父も先生達もいない。まるで孤独の化身

のよつな場所だ。

「何はどう？」

もしかしたら、あれこそ自分の居場所ではないのかもしれない。こここそが私の居場所なのかもしない。

そう思つたとたんに天上から、地平線から、大量の真っ赤な液体が流れ出してきた。床を紅に染めながら雛菊に迫つて来る。真っ白だつた世界はすぐにも真っ赤になり、赤い液体はすぐに雛菊の下へ届いた。形の良い素足が真っ赤に染まつていく。液体は生温い、そして生臭い。まじうことなくそれは血だった。

人一倍怖がりな雛菊が叫んだ。

ドアが開いた音がした。その音で現実世界へ雛菊は引きずり戻されていた。怖い夢を観たためか、心臓はいつも以上の速度で脈をうつている。もし自分が今人間なら体中が汗でビッショリと濡れていたに違いない。しかし現在は猫なので体は濡れない…代わりに鼻がビシヨビシヨであつた。

ドアの音がしたのだから、誰かがやつてきたのだ。幾斗が帰ってきたのか…または幾斗の母か…

少しどキッとした。幾斗の母。幾斗が妹である露子に早く寝ろといつた元凶。すこし体が恐怖し、露子のベットから降りるとリビングに通じる引き戸へ向かい、そこで隙間から様子をうかがう…誰が帰ってきたのか？注意深くあたりを覗くが良く見えない…しかたなく、爪を出してから引き戸に引っ掛け、少しだけ引き戸を開けようとした。

ガラアーー

引き戸を開かれた。無論、雛菊の力で開かれたのではなかつた。あきらかに外部から強力な力で（猫にとっては）開けられたのだ。突然すぎる出来事に、高鳴っていた心臓は爆発しそうになる。

「なんだ、寝ただと思ってた…」

聞き覚えのある声が頭上で響いた。まじつことない赤城幾斗であつた。

まん丸に目を見開き、今にも壊れそうなぐらい高速で心臓を鳴らす雌猫を幾斗は抱き上げるとリビングに連れて行つた。

壊れそうなソファーに腰掛けると、雛菊の体にノミ取りグシを入れる。なんだか心地がいい…

ダメだ！心まで猫になりかかる？

残念ながら、ノミは一匹も出てこなかつた。幾斗はノミのいない元野良猫を珍しそうになつた。

さつきとは全然違う意味でドキドキしていた。雛菊だつて健全なる乙女である（多少ズレてるが）。好きな男に体を撫でられ飯をもらい・抱きつかれと、ドキドキの連續なのは当然である。読者諸君だつて、猫になつて好きな男だか女だかに拾われあれやこれやされるのを想像すればドキドキするんぢやないですか？今夜のベットでの妄想材料になつたろ？（気にしないで）

つかのまのひと時…つかの間は永続きしないのが法則である。

ガチャ

また音が鳴つた。古いドアが開く音が部屋中に響き渡る。幾斗の顔が一瞬硬直した。

赤と黒の混ざつた色の髪の毛を揺らしながら、その女性は入ってきた。赤黒い髪は腰まで伸びており、つややかであった。前髪は長く伸びてすっぽりと右耳を隠している。美しい肩を大胆に露出させ、谷間が見えるような黒いドレス。手にはドレスと同じ生地で作られた長い手袋をしていた。綺麗な人だ…雛菊はそう思った。どことなく幾斗に似ている目、背丈は確実に雛菊より高く幾斗と同じぐらいある。甘い香りのするタバコを吹かしながらリビングに入ると彼女はこう言つた。

「ただいま」

どことなく澄んだ声…それでも強大な威圧がある声だつた。つまり怖い。幾斗は気に入らなさそうに彼女を見ると一言、言い放つた。

「お袋……」

まぎれもない赤城ママであった。

＊＊＊

「雛菊？大丈夫？」

夜中、雛菊のママさんは雛菊の額に手をのせる。まだ熱い。熱を測つてもかるうじて下がっているもののやはりまだ熱がある。まだ汗をだらだら流しながら寝ている愛娘にもう一度声をかけると、雛菊は苦しそうに一言言つたのであった。

「いやー

まるで本物の猫のような鳴き声だつた・・・

第26話・夢は時に現実となる。そんなことあつたら俺は死ぬ。（後書き）

どうも、またまた続くーの形で終わってしまったことに深くお詫びいたします。もとより、猫になっちゃう非現実的なお話でしたが（口ラ！まだ終わってないだろ）猫の視点で人を見るとは大変です。実際に経験したわけでもないので、なぜだかベタに…いやもうベタベタになってしまいます。赤城ママの登場、次回はもつと怖い人が出てきたりします。前々回の予告で幾& amp; 雛の急展開なんていつときながら、こんなんでスミマセン【泣】もう、それしか言えません。やっぱ非現実的は難しい…もうメチャクチヤ非現実的な簡単なもの…現実に非現実が混ざったなんて難しいです。

泣き言言つてるわけには行かないでの、よければ次回にご期待ください。読んでくれた方には深く感謝します。コメント、感想、評価してくれた人、本当にありがとうございました。これからも、評価とかしてくれたらメツチャ嬉しいです。ヨロシクです。

では、長くなりましたがこれで…

あつ！キャラ人気投票やつてます。よかつたら投票してみてください。では…

第27話・学校にはついたベルトをつけて行きますがなにか？

冬の色が濃くなってきた。まだまだ冬ではないものの、すぐそこまで迫つてきている気配があつた。

今年は冬が来るのが早い。大人たちは日常会話で「こんな」とを口走り、子供達もそれを机身で感じていた。

10時12分16秒。北風があたりを吹きぬけ、一軒のボロマンションへとぶつかる。今にも壊れそうな姿をさらすそのマンションは、たぶん耐震強度もそれほどないだろう。地震でも来れば、すぐに壊れそうである。

そのマンションの前に、1台の高級車が止まっていた。周りの風景からはまったく合わない黒い車体が妙な威圧を持っている。ドイツ生まれの高級車は、メーカーも日本車とは比べ物にならないぐらい数字が高い。そんな真っ黒な車体に寄りかかって、1人の男が烟草をくゆらせていた。

黒いスーツを纏い、長い髪をセツトしているのにまるで自然になつたかのように整えている。目は細く閉じていて、まるで寝ているかのようであった。手に持った煙草ケースには日本ではあまり見かけない名前のアルファベットが黒い色でケースに並んでいた。

「ここが彼の家？」

男はもう一度煙草を口に咥え主流煙を深く吸い込むと、口からため息のように静かに吐き出した。

吐き出された煙は、フワフワとあたりを回ると星が輝く空へと登つていいく。

まるで、はやくその男から逃げたいかのように煙は空へと消えた。

「お袋・・・」

幾斗の言葉に赤黒い髪をした女性は少しばかり唇を吊り上げて、リビングの真ん中より少し東側にある大きなソファーにじどりかりと腰を落ち着ける。まるで我が家にでも帰ってきたよう。

「あわあーお袋。なにげない顔しつつけどさあー『』は俺の家なんだけど?」

幾斗が抗議の声を上げるが、彼女はまったく気にしていない様子だ。
細長い煙草シガリロを咥えると、ライターで火をつける。

「幾斗。お母さんが帰ってきたんだよ? お酒ぐらいだしなさいよねえ?」

フウーと甘い香りの副流煙があたりを漂う。その匂いとまったく正反対の念が離菊ねこには2人から出でるように見えた。まるで龍と虎の戦いのようである。強大な威圧とただならぬ空気があたりを濁す。

2人の睨み合い。

あの怖い目つきの幾斗と互角・・または互角以上の怖さを彼女は目から、身体から、放出していた。離菊はもし、今人間だったら冷や汗をかいているだろうと自覚した。とにかく怖かった。

「はあ?」

「はあ? ジゃない! あたしは密だよ?」

「ああ? 招かざる密だろ?」

「なにが招かざるよ!」

数分間・・・離菊には無限に感じたその数分間。幾斗と幾斗の母の口喧嘩は続いたが、結局幾斗が負ける? ような形で終わりお酒を取りに台所にいったん消えた。幾斗ママは勝ち誇ったように鼻を鳴らすと、深くソファーに座りなおした。煙草から甘い香が立ち込め

る。

何故だらうか？どうしてさつまで怖いと思つていた人に私は近づいているんだらうか？

「こやあー

不思議に身体が前に進み、彼女の足下に雛菊は歩み出でいた。雛菊の茶色い長めの毛は幾斗ママの美脚にフワリとあたり、まん丸に見開かれた瞳は彼女をしつかりと見つめていた。猫に気付いて、猫の首根っこをつかむと、そのまま引き上げ畠吊りにしてから幾斗ママは雛菊をまじまじと凝視し、台所からなにやらワインとグラスを運んでくる幾斗に対して幾斗ママは声を出した。

「幾斗！あんた猫なんて飼い始めたの？」

「ああ？・・・ああ・・・その猫あー露子が連れてきてよおー頭のいい猫だぜ？」

「頭のいい猫？露子が拾つたの？」

「ああ…」

コポコポと幾斗がグラスにワインを注ぐ。お客用のワインであつたが、たいしたお金の無い幾斗の家なので、よく普通に手にはいる素朴なワインだった。幾斗ママは幾斗の生温い返事を聞いてから注がれた紅色の赤ワインをゴクリと一口飲むと満足そうにニヤリと笑みを浮かべてグラスに残つたすべてのワインをいつきに流し込む。プハアーと息をもらしてから緩んだ唇をキリッと結び、唇についたかすかなワインを赤い舌をチロツと覗かせて舐めどる。

「そんなワインで満足げな表情見せるなんて、お袋も貧乏癖なおつてねえーなあー」

幾斗の皮肉めいた言葉に一瞬目を強張らせたが、一つ小さなため息をつくと

「私は、今でも貧乏だよ。」

と小さく囁いた。その囁きに「まあ」と生返事を返すと幾斗は「つーわけだからさあ、キヤットフード代もかかるから少しお送り増やしてくんないかなあ?」

と、とんでもないことを呟く。

「はあ? あんたねえ! バイト行ってんでしょう?」

「はあ? 俺のバイトなんてなんの足しにもならねんだよ!」

「悠治さんの貯金があつたじゃない?」

「あれは学費、露子の未来のな」

そう言うとカエルの絵が描いてある貯金通帳を彼女に渡す。幾斗ママは貯金通帳にするぞい目つきを通して、小さな溜息をこぼすして机の上に通帳を置いた。

「ふう、贅沢はいけないよ!」

「俺のじやねえー露子のだ! 年頃なのに兄貴のお下がりの鉛筆とかさあー可哀想だろ!」

実際家計が厳しいときは鉛筆もペンも幾斗が使ってたけど使わなくなつたものが多い。

「・・・・・わかった・・・・・1000円アップね!」

「んん? いやいや5000円だろ?」

「はあ? よし、1500円!」

「4500」

「2000!」

「4200!」

「2150!」

「...」「...」「...」

壯絶な言い合い。最初こそ冷静だった2人は今は龍と虎の如く激しく

い喧嘩をはじめた。が、離菊にしてみれば、幾斗と同等に喧嘩できる人をはじめて見たので、どちらかといふと新鮮な光景だった。しかし言い争いがますます過激になつて来た瞬間に

「俺の家に来れば毎週1万はあげるよ」

そう誰から声が上がった。今まで言い争っていた幾斗もお母さんもいっさに静まつた。その男はリビングのドアに立つていた。ひどく細い目に長い髪が自然にセットされてゐる。ピシッときまつたスーツを着て口にはにきつい臭いの煙草がくわえられていた。その様子を見ていた離菊はどこか怖いその男を見てゆつくりとソファの後ろに隠れる。あたりがいっさに静まり返つた。離菊にはその男の目がひどく冷淡にみえた。

「山下さん…」

「やあ幾斗くん」

煙草を咥えた口がニヤリとゆがむ。まるで火のようにならぶることを知らぬ幾斗がこの男の前ではやけにおとなしい。

「幾斗、実はそれを今日は言いに来たの、ねえ龍夫さん」

山下龍尾これが彼の本名なのだろう。山下は幾斗ママに相づちをつ

つ。

「は？あんたらが結婚すんのになんの文句もねえーけど俺は赤城の姓を捨てる気はないって何回も言つてるだろ？」

「でもねえ幾斗、あんたらもお金がなけりや」「うぜえ！」

幾斗ママの猫なで声を幾斗は一喝する。そして、困つた顔を作る幾斗ママを見て山下は

「でも、お金に困つてゐつてさつきたよね？」

「・・・・・」

押し黙る幾斗。山下は細い目の方を少しだけ開いてかすかに苦笑した。

「じゃあ、決まりだな」

と山下が口を開いた。黙つて動かない幾斗を少し見る、山下は部屋

を出て行こうとした。しかし、幾斗の声がそれを許さなかつた。

「俺は…俺は…ヤクザになる気はねえ！」

山下は立ち止まる。ものすごい空気があたりを支配した。雛菊のひげはその空氣に敏感に反応し、ピンと伸びていた。

幾斗ママも空氣を感じ取ったのかぐくつと睡を飲んだ。山下の機嫌が悪いならば、良くとも半殺しさりえん。

「・・・・」

しかし、意外なことに山下はまたしても苦笑していた。

「そうか、残念だ。気が変わつたらいつでもおいで」と呟く。それだけだつた。そして、幾斗に今週分の仕送りの封筒（

仕送りはだいたい、この人が出してる）を胸ポケットからだと幾斗の足元に軽く落とした。淡い微笑みを顔にててながら山下は背中を向けた。幾斗ママも続いて立ち上がる。幾斗は足元に落ちている封筒をただひたすら見つめていた。まるで、死の宣告が書いてある封筒のよう。

山下は帰ろうとした。そして、その瞬間雛菊は見てしまった。机の上に置かれた貯金通帳を山下がスリとつたのを！

息を飲んだ、幾斗はまったく気付いていない。幾斗ママも何も言わない。今、何かを出来るのは自分だけだ！しかし、雛菊には自分がどうすればいいのかわからなかつた。怖いという概念だけが自分の心を飲み込む。でも、でも…体は動いていた。後ろと前の足を上手に使い、放心した幾斗の横を通り過ぎ、今にも閉まりそうなドアを潜り抜け、2人の後をつけるように、いやつけて階段を降りた。追いかけるとも言つ。2人はボロマンションを出ると、止めてあつた黒々と闇に溶ける漆黒の車に乗り込む。雛菊も車にすべりこもうとしたが、ドアを閉められてしまつた。じついエンジン音、闇が創り保つてきた静寂をその音によつて乱し、最初こそゆっくりと走つていたが、少しづつスピードを上げて追いかける小動物をあざ笑うかのごとくエンジン音を響かせた。闇を引き裂く闇のように車は悠悠と走り抜けた。

「あれ？ 起きた？」 それが幾斗と私の始めての会話だった。中学のころから人付き合いが苦手で、あまり友達も居なかつた私。寂しかった。羨ましかつた。家に帰つても誰も居なかつたし、学校へ行つても話す友達は少なかつた…いやいなかつたが正しい。会話は両親との電話か、必要最低限の生活会話だけだつた。孤独だけが私の心を蝕んでた。でも、

彼は万人が創つた私の孤独を、たつた1人で壊してくれた。そう暗い暗い孤独という牢獄からたつた1人で救つてくれたのだ。だからだろうか？ 恩返しでもするつもりなのだろうか？ それともたんに、彼を愛しているからだろうか？ だからまるで、敵を狩る矢の如く、物を壊す砲弾のごとく私はかけついているのだろうか？

漆黒の闇夜を真黒な車体が通り抜ける。時刻はかなりまわつているだろう、国道を走る車は少なかつた。そして、珍しく通る車はやけに闇に映えた車だつた。おなじ漆黒の色なのにだ！ いや、だからこそだろうか？ 闇の中に溶け込む漆黒は強大な威圧と怪訝である。その車のやや後方を追いかける一匹の猫^{ベンツ}がいた。説明しなくとも、幾斗ママと山下の乗る車を追いかける雛菊^{ねこ}であつた。

本来猫は、短距離タイプの動物だ。最高速度は実に60キロとも言われるが、出せるのはほんの数秒…長くとも10秒だろうか？ 一方、車となればエンジンが健全で、燃料となるガソリンが入つていれば60キロなどというスピードは余裕以外のなものでもない。

出そうと思えば100キロ以上だつて常時出せる。そんな人類の優秀ともいえる発明に、ついさつき猫になつた雛菊がこの後、追いつけたのは奇跡に等しい。いや…ただ運がよかつたのだろう。

「・・・・・」

雛菊は少しビビッていた。そりや、車が止まつた先が青海組とか書かれた暴力を生活手段とする人々の巣窟だつたりしたら、だれでもビルだらう。正直、ダッシュで帰りたいが正しい本音に違ひない。ドアの前には妙に怖そうな男の人が2人ほど立つていった。正門から入るのは不可能だらう。もつとも、裏にまわつたら誰も居なかつたつてので、かすかに開いた窓に飛び乗り中に侵入する。その後、建物の中をグルグル回る。この建物は2階のよつだが、上に上の手段は非常階段か、エレベーターしかないらしい。つまり、どうにかしてエレベーターに乗らなくてはならない。そう思い、この建物をグルグル回つているといかにもな中年男性が重そうなダンボール箱を抱えてやってきた。チャンスだと思い、その男性の死角に入ると、雛菊の予想どおり男性はエレベーターに乗りこむ。死角に入つたまま雛菊も乗り込むと2階へエレベーターは動き始め、ほんの数十秒で2階についた。

階段を作つてくれたらいいのに…

2階は4つの部屋に分かれているようだつた。ダンボールを抱えた男性は手前の部屋に入つていた。でも、雛菊のお目当ての部屋はその男性とは別ほうこじうだつたらしくこつそりと男を離れると奥の部屋に向かつた。雛菊のいつもより発達した耳は山下の声を奥の開け放されたドアの内側に聞いたからだ。男性が手前の部屋に消えるのを確認してから奥の部屋に進む。隠れるものが少ない廊下を小走りで進み、声の聞こえるドアをそつと覗く「山下さん、美穂さんとはいつ一緒になるんですか？」

部屋の奥には大きな机と高級そうな椅子があり、部屋の中央にガラス張りの小机、その机を挟むように向かい合つた2つのソファーアゲ

並べられていた。そのソファーに座った男が奥の高級椅子に座った山下に話しかけているようだ。

「ああ…彼女の家に子供がいるんだが、息子さんがなかなか同意してくれなくてね」

「結婚に？ですか？」

「いやいや、俺の息子になることだよ」

「ああ…」

男は少し微妙な顔になると少し間をおいてから苦笑混じりで口を開くと

「さすがにね、お父さんがあなたじゃ」

「ああ…さすがに抵抗あるだろうな」

こちらも苦笑まじりで答える。

「マジメそうな子なんですか？」

そう聞かれて山下はポケットから煙草を取り出すと火をつけて、口中で煙を楽しむと

「ここの辺のワルガキの蛇つて知ってるか？」

「はい、たしかこの辺のワルガキをまとめてた…そいつが？」

山下は細い田をさらに不気味に細めると、煙草を咥えた口を吊り上げた。

「いや、その蛇を単身で倒したガキがいたる？」

男の搔き揚げていた髪が額に少しだけハラリと落ちた。笑っている山下をみて男は口をすこしひくつかせるとポケットから煙草を取り出し咥えた。

「幾斗？幾斗なんですね？」

「ああ…」

山下も男もあとは何も言わなかつた。妙な沈黙の中、煙草の煙を吹く音だけが部屋の中を駆け巡っていた。しばらくその時間が続き、雛菊は妙な思考を巡らしていた。不良に関わったことは少なくないが、自分が不良になつたことはないし、興味もない雛菊に蛇が誰か、

どんな奴かは知るよしも無かつたが、幾斗が過去にやつたことの大きさは場の空氣で理解できる。山下の微笑や男の硬直をみても同じことだ。

「そ…それでは私はそろそろ失礼します。」

そう言ひつと男は立ち上がり部屋を出ようとして、山下も立ち上がり見送りうと外へ出ようとする。離菊は慌てて廊下にあつた消火器の影に身を潜める。出来る限り小さく小さく身体を丸めて動きを止める。山下たちの靴が接近するたびに心臓が爆破されそうになるがなんとか耐え抜く。そのこうしている間に、山下たちはエレベーターに乗つていつてしまつた。

セーフ かなり危なかつた！

少し安堵の溜息をつくと、山下たちがいた部屋に駆け込む。検討はつく、山下の座っていた椅子の前にある机！いっきにジャンプして机によじ登ると机の上においてあるカエルの絵が描いてある貯金通帳を咥えて机を降りる。しっかりと貯金通帳を噛み締めると、部屋を出ようと走つた。中央の小机を飛びこえて、ドアまで到達するとエレベーターを目指す。腹に手がまわつた。走つていた前足、後ろ足が宙に浮く。その瞬間、離菊の頭は真っ白になつた・・・・・・

きこ

深い夜、離菊のママさんは愛娘の眠る部屋に入ると離菊の熱を測つた。まだ熱はあるが、昼間より引いている。もうほとんど能力を失つた熱冷シートを離菊のおでこから剥がすと、新しいものに張り替える。息もたほど荒くないし、明日には熱が完全に引いてしまうかもしけない。そう思うと少し安心できたようで、かすかな微笑を

顔にたたえながら雛菊の上質なブラウン髪をそつと撫でた。

愛。愛だろう。子供を想う愛なのだろう。熱でうなされ、苦しむ愛娘が心配で心配でたまらなかつたのだろう。普段、仕事で家にいることが出来なく、寂しい思いをさせてしまつてゐる。そんな思いにママさんは包まれているのだろう。ただ、娘が愛しいのだろう。どんな状況であれ、人は人を愛す。

「主人が死んで幾斗や露子の生活費、学費、に困つてから、私は死にもの狂いで働いた。夜も昼も、身体が動く限り働いてお金にした。そんなことしてたから、家には帰らない日が多くなつてね。とくに、露子はまだ小さかつたから悪い事したと思うよ。幾斗だつて、優しいから何も言わなかつたけど辛い思いをさせた。それでも、それでも働かないとあの子達に食べさせていけなかつた。主人の死に、犯人を今でも深く恨んでいるんだよ。だつて、それまでの生活が幸せすぎたから。でも、そんなの永くは続かなくてね。いつしか身体はボロボロになつてたよ。すぐに身体は倒れるし、めまいと頭痛が常時鳴り響くし。苦しかつた、辛かつた、死んでしまつたかった。なにより犯人が。犯人が憎かつた。憎かつた。でも、どうすることも出来なかつた。ボロボロになつた身体をどうすることも出来なかつた。その時ね、彼はね・・・山下龍尾はね、たつた1人で私を救つてくれた。お金とか、服とかも与えてもらつた一部だけど、惜しみも無い愛を彼は私に与えてくれた。前の主人には悪いと思うけど、今は彼が何よりも愛しいの。彼は不器用だし、あんな仕事してゐるから幾斗もああ言つんだろうけど、優しいところもいっぱいあるの

走っていた。国道を走っていた。雛菊は走っていた。夜道には車は少なく、人もいない。青海組の事務所から一度も止まることなく走っていた。あの、ボロマンションを目指して。

あんたは頭のいい猫だつて幾斗が言つてたけど、これほどとは思わなかつたよ。本当にすごい。貯金通帳を取り返しに来るなんてね。でも、勘違いしないで、山下はあんたの主人を苦しめるためにこんなことやつてるんじゃないのよ。それは、幾斗はいやかもしけないが龍尾さんだつて一生懸命なんだから。だから…

走つていた。冷たい冷たい夜道を雛菊は走つていた。

いい？ 猫ちゃん。愛つてのはイロイロあるのよ。私は子供達を愛してる、主人も愛してるし、龍尾さんも愛してる。深く、強く。わかってくれないのは残念だけど、やつぱり幾斗にも露子にも龍尾さんのことをちゃんと分かつてもらいたい。そして、納得してもらつてから結婚したい。今はまだ無理でもいつか…いつか…。あなたも、いっぱい幾斗や露子に愛してもらい。

何故か涙が浮かんだ。猫なのに、涙が浮かぶのか？悲しいような、嬉しいような

貯金通帳、おとせなこようにな。」

あの時、幾斗ママに捕まつてイロイロ話しこそした（一方的にしゃべつただけです）。あの山下つて人のことや、幾斗のこと、そして逃がしてもらつた。だから私は落とさないようこ、自然に力が顎に入るので感じる。ただ、冷たかった。

幾斗の家のチャイムをならし、幾斗がピンポンダッシュと勘違いしている間に入る。そして、幾斗に貯金通帳をみせる。部屋はぐちゃぐちゃできつと探していたのだろう。幾斗は雛菊が貯金通帳を持つているのをみて大喜びし、ひたすら猫を握つたまま万歳を繰り返した（アホだ！　作者談）そして、雛菊に喜びのキッスをしてからソファーに寝転び雛菊を抱いたまま寝てしまつた。雛菊の心境的には、抱きつかれキスされ、死ぬほど脈をはやくしなくてはいけなくなつていたとだけ書いておこう。そして、ソファードで寝転んでいる2人は今度こそ深い眠りに落とされた。

時間切れ

田をあける。手を見るどり本の指がちやんとあり、足をみるとやはり人と人間の足だった。2足歩行もできる。髪もちやんとあるし、顔に髪はない。

ひたすら爽やかな太陽の籠れ口や小鳥達のさえずりを聞きながら、雛菊は自分の部屋を出てリビングに向かった。いつもならこなにはずに雛菊ママが朝ごはんをつくりってくれていた。ママさんは愛娘に気付くと「ひねみ」と優しく微笑みをたたえて言つてくれた。

「ねむへ、ひねみ

今日分にぎりある、精一杯の母への感謝と愛を雛菊はその言葉に込めた。

第27話・学校には2つ穴のベルトをつけて行きますがなにか？（後書き）

いやあ、みなさま大変おまたせしました。雛菊、猫になる がやつと終われました。死ぬかと思つた。

みなさま、コメント、感想、どうぞアロシクです。

あと、応援してくださった人々、本当にありがとうございます。そしてこれからもアロシクお願いします。

では、28話で会いましょうノシ

第28話・おい！馬鹿犬！頼むから静かにしてろー（前書き）

生きてる間に
もし、天国を垣間見れるなら
きっとあの瞬間ではないだろ？

T・K・ねこたん 著

第28話・おい！馬鹿犬！頼むから静かにしてろ！

夕刻も近い、下校時間。

それは突然のことだった。

「おめーらどこのシャバ高？ いつちよ前に学ラン着崩してんじゃねーよ」

ブレザーを身にまとつた数十人の不良に囲まれた青海高校の不良、数人は圧倒的な人数に睨みを入れられた。不良の世界ではよくあることだ。だが、少しもビビルことなく相手に言い返す。ビビッた奴は不良廃業である、と信じている奴等だからだ。

「てめーらどこに喧嘩売つてんのわかつてんのか？」

「青海なめんなヨなあ」

青海高校不良達は睨み返した。その睨みはヤンキー独特のもので、相手を威圧しようとしてか、顎をあげ眼球を下に向けるものだつた。自分たちより圧倒的に人数の多い相手に、ビビルことなく挑む姿はどこか自信をただよわせていた。そりやー幾斗や武藤に喧嘩売つたことあるこのメンバーは、こんなブレザー不良数十人なんかより怖いものを知つてゐるからこんなことできるのかもしれないし、たんなる馬鹿なのかもしけない。ただ、人数が人数である。肝が据わつてるとかそんな次元ではない。

普通、高校生の喧嘩の勝率とはほとんど決まつてゐる。それは、人数が深くかかわり、1対1なら5割。1対2なら7割、1対3以上になると8割9割の確率で少ないほう負ける。現在の青海の不良たちの状況は5対15くらい。つまり1対3に等しくなる。勝率は1割2割そこら…

注 幾斗、武藤は論外で…普通の高校生とは呼べないからね

ブレザーの1人が殴りかかつた。一瞬で間合いをつめ、ダボダボのコシパンズボンで動いたとは思えないほど素早い動きだった。ガードも避けることもできないまま、鈍い音と共に青海の1人が宙を舞い、後ろの仲間を吹き飛ばして転がっていく。転がった先にも敵はいて、顔面や足、手や腹に蹴りを食らう。仲間を助けようとした1人も羽交い絞めにされ、身動きできないまま殴られ、蹴り倒された。学ランのボタンは見事にひしゃげる。ほかのメンバーも鼻血を噴出し、無数のかすり傷を体に刻まれて、整えていた髪はぐちゃぐちゃになっていた。もともと、この青海のメンバーは青海不良の本隊ではない。以前、雛菊や美貴を殴った青海不良グループのリーダーが統べている本隊とは違い、その下つ端の分隊なのだ。もちろん、戦力もたいしたことないし、ずば抜けたリーダー格がいるわけはないので、敵さんの数に圧倒されてたちまち全滅することになる。

ブレザー集団は青海不良数名を真ん中に集めて囮う。それでもヨロヨロと立ち上がり、必死に抵抗を試みようとする青海。青海不良も殴りかかつた、しかし、あと一步のところでパンチを避けられ、その勢いで地面に転びそうになった青海の不良をブレザーは蹴り上げた。その一撃は腹へと突き刺さり、激痛を全身に伝えながら、転びそうになつたのとはまったく逆のほうへと体の運動エネルギーを変更する。青海の不良は馬鹿ばかりだが、それでも徐々にわかりはじめていた。

こいつらは、人数もいるし、喧嘩の実力もあるんだと。

ヨロヨロと力の入らない足で震えながら立つ不良にブレザーの少年たちは軽い蹴りを入れて、再度、青海不良を真ん中に集める。そして、圧倒的入数で囮む。息を荒げながら、痛む体を仲間に預けあいながら倒れることを防ぐ青海不良達は最後のあがきを見せた。

「おめーら…んなことして覚えてろよ、てめーらカス高校と全面戦争じゃああ、本隊に20人は兵隊いるぞこらア！」

すると、ブレザーの不良達はニヤニヤしながら

「言つたな、なら青海と全面だな。決まりだ」

「二二二二にほなー一〇〇人はいるんだよ。」

「なんもしらす、全面とか言つてんじやねーぞ」

ブレザーの不良達は笑う。青海を罵るように笑う。そして、なにか面白いことを思いついたように顔をゆがめると。

「てめーら兵隊だけがやられるとか思つなよ、青海皆殺しじや。もう二度とそんななかつこうも生意気な口もきけなくなるからなあ

そして、蹴りを入れた。何発も何十発も…

「青海高校か…今度遊びに行くから、せいぜい20人で頑張つて高校守ってくれよお」

そつ言つて、最後の一発をくらわした。

「さむ」

冬だ、もつみに近い。

「有理数。無理数の用語を定義にあてはめて・・・。数学教師の柳原先生がいつものように数学の授業を行つてゐる。そして、いつもと違うのは幾斗、武藤、安曇が眞面目に授業をしていくことぐらいである。は？あの3人が？」

「では、今日の授業はここまで、宿題は先ほど言つたとおりだぞ」授業が終わり、休憩に入ると、氷漬けにされていたところを、解凍してもらつたような声を3人は出した。

「死ぬかと思ったよー。授業があんなに大変だったとは・・・。」

「たしかに・・・リアル死ぬところだった」

「まあー学園祭のためですから、頑張りましょー。」

そう、3日後にある学園祭（通称：青海祭）を補習で潰さないよう頑張つているこの3人。高校になつてはじめて訪れる文化祭に心を弾ませる3人なのである。

「俺、中学のとき、出たことないからなー」

と幾斗

「私もー」

と安曇

「僕の中学は、学園祭といづれか歌を歌う発表会でしたから」と武藤

いろいろわけあって、中学でのまともな思い出がない3人。高校こそはと思っているのだ。

そんな彼らを補習の心配が100パーセント無い雛菊と、何故か余裕な美貴が現金な奴らといふ田である。

ついでに、雛菊達のクラスがやる出し物は焼きそば屋と平凡で、仕組みもローテーションで店当番という、普通のものだった。このク

ラスは”やる”より”観る”の願望のほうが強かつたようだ。ほかのクラスでは、お化け屋敷やメイドカフェ、迷路などがあり、その他、生徒会の出し物や各クラブ活動の展示や出し物がある。ついでに6人はクラブに所属していないため、雛菊を除く5人は焼きそばだけである。（雛菊は生徒会長だよ！）

「いやーマヂで楽しみだわー」

と幾斗がほざき、武藤、安曇がそれに続く。

そんなどこか、ほのぼのとした1日。平和な1日。そんな1日で終わればよかつたのに…

安曇、雛菊、美貴の3人の下校途中でのことである。いつもなら不良2人とオタク1名がいるのだが、今日はいろいろあつていません。（生徒指導室）

しうがなく、3人で下校し高校の近くにある青海商店街を歩いているのだった。

「ね、会長さん。文化祭に赤城くん誘わないの？」

安曇の唐突な質問。

「へ？なんに？」

「だあーかあーらあー、文化祭で赤城と一緒に回らないのか？ってことだよ。」

美貴が説明する。

「へ？あつ…でも…その…迷惑じゃないかな？」

生徒総会の朝礼挨拶はあんなに堂々としゃべるくせに、いつもことになると小心者になるとはどういふこと？

多少、安曇と美貴をイライラさせながら会話は進む。

「だいじょーぶだつて、赤城だつてあんたと回りたいよ」

「そーだよー会長さん」

どこか、イライラを抑えてやさしい笑顔で接する美貴と安曇。

「そうかな？」

少し乗つて来る雛菊

「そうだよー！たぶん」

「そうそう、絶対そうだつて！たぶん」

美貴と、安曇が最後の止めを刺す。しかし

「た…たぶん？」

しまった！つと雷撃に打たれる2人…たぶんという言葉に深く違和感を感じる雛菊。

「…！…！…！」

「…！…！…！」

ぎゃーぎゃーわーわーなんたらかんたら宝船

そこに、大乱闘を繰り広げる3人に不意に近づいた4人の男女グリープがいた。そして

「おお？お前ら、青海の生徒あ？」

急な呼び止めに驚いて振り向く3人。そこには、ダボダボのズボンに、ゆるゆるのネクタイをしたブレザーの不良男子が2人、かなりのミニスカ、ゆるゆるネクタイをした不良女子2人が立っていた。

「どなたですかあ？」

不良慣れっここの安曇が臆することなくたずねる。

「どなたって？オメーらが喧嘩売つた相手だよ」

不良は3人に飛び掛つた…

「なー頼むよ赤城さーん」
いつか雛菊や美貴を殴った青海の不良グループの頭リーダーは幾斗と武藤に
たかつていた。

「はあ？全面戦争？隣の不良高校と？勝手にやつてればいいじゃん
か」

生徒指導室から出てきたばかりの幾斗は心底たじろぎに押しのけ
る。

「いやー人数が足りないんだよ」

「しらねーよ」

「もう言わないでさあー頼むよ。」

武藤も、幾斗も学校の事情なんか気にも留めない性格で、隣の高校
が攻めてくるって言われてもいまいち「えつー・マヂ? やつたらーな
ー」という気は起きないらしい。そもそも、味方になつてくれと言
つてきている連中は昔、美貴や雛菊に対して暴力を振るつた輩で、

先輩の癖に幾斗や武藤に対して下手に出るという情けないやつ（じょうがない）なので…幾斗も武藤もあまり乗り気にも、やる氣にもなれない。

だが、青海高校のメンツを奪われるわけもないのに、不良グループのリーダーはしつこく協力を要請する。

「頼む。」この通りだ。」

頭を深々と下げる不良。しかし、幾斗も武藤もまつたくもって興味をしめさない。最終的には帰ろうとまでするので。

「まつてくれ、絶対に負けられないんだよ！」

と、叫ぶ。そこで、一瞬2人は止まるが、振り向かずに廊下を歩く。

「おい！お前らの女になにがあつてもしらねーぞ？」

その言葉に2人は歩みを止める。その言葉こそ、不良グループのリーダーの最後の一手だった。

「どーゆーことだ？」

幾斗が訪ねる。武藤も不機嫌そうな顔でリーダーを見る。その顔は、鬼の顔であった。鬼面。比喩にして、こんなにもあてはまる言葉があるだろ？つてぐらい威圧と狂気に満ち溢れた顔。そんな顔を、リーダーに向ける。そこへ

「幾斗さん、武藤さん。大変ですよ…！」

と我らがヲタク、佐山友一が駆け込んできた。携帯電話を握り締めて、どことなく焦っている。

「あのさあー友一ー、今、話中なんだよ。空氣読めよー。」

幾斗が不機嫌な声を上げるが、友一は顔色ひとつ変えずに、

「それどころじゃねいんだからー！美貴、糸河さん、会長さんの3人が、隣の高校の不良4人に襲われたそうですよー！」

えらくタイミングが良すぎると思った。しかし、あの不良グループの頭が言おうとしてたことが少しづつわかつてきた。

「それで？3人は無事なんですか？」

武藤も少し冷静さを失いかけているのか、どこか焦った声になる。

「はい。青海不良の数人が戦闘に乱入して救出されたそうです。」

友一の言葉に2人は肩をなでおろした。

「そういうことですよ、赤城さん、武藤さん。」

リーダーは言った。

「なるほど、それはそれはまたなんともいえねーぐらー、めんぢうだな? おい」

幾斗が不機嫌に言ったあと

「でも、あの3人をお前の手下が助けてくれたみたいじゃねえーか?」

と付け足す

「俺らにも、青海のメンツがかかつてつからさ」

リーダーは言つ。

「よし、今日の礼に手伝つてやるひじゃんか。」

幾斗がそう言つた。

「では、私もお手伝いしますよ」

武藤も続く。

「2人とも、怪我しないよ! こね」

友一が心配そうに言つ

と・・・

「なに言つてんだ? ユーチ? お前も行くんだぞ?」

「つて? えええつえつええええええ? ? ? ?」

「えええ! ジヤねえーだろ? 仲間だろ? 連帯責任じゅねえーか」

「そんな、バカな話があるかよ!」

「友一君、がんばりましょ! うね」

「武藤さんまで・・・」

「そうと決まれば(「」)

「そんなーそれこそ(「」)

「ゴホン

リーダーが咳払いを1つする。

「で、攻めてくるのがなんだけれどあー、文化祭の前夜祭真っ最中
つてどこだな」

リーダーの言葉に3人が唖然とする。

「てく、メーワクな野郎どもだ」

「せつかく、美貴と楽しい前夜祭がおくれると思ったのに・・・
「本当に無粋なやつらですね」

3人は怒った。攻撃力が上がった。タラララッタラ

「でも、文化祭となるとこのことは安曇さん達には言えませんね。
「そーだな、心配するだろうし、何よりまきこみたくないし」

「・・・なら僕も巻き込まないで・・・」

最後の、友一の発言に、怖い視線を向ける武藤と幾斗
「とにかく、あの3人にはバレるなよ」

今、大戦が始まろうとしていた！！

「本当に、びっくりしたよ」

安曇が声をあげる。美貴も雛菊も続く。

「てか、なんで青海北高校やつらが喧嘩売つてくるわけ?」

美貴が不機嫌に言つ

「とにかく、みんな無事でよかつたね。」

雛菊が安堵の息を漏らす。

商店街を抜けて、それぞれ自分の家の方向に曲がらなくてはいけない場所にさしかかった。

「で? 文化祭どうする?」

美貴が話題を戻す。

「私は、前夜祭を武藤君と2人きりで過ごうと思つ。」

安曇は言った

「私は、友一と過ごすから。」

美貴も言った。

「だから、会長さんも赤城くんをわざつてみたら? きっと良いくつと言つてくれるよ。」

「そうだよー赤城、誘わなかつたらあんた、ポイジル(ひとつ)よ?」

2人は、雛菊に詰め寄る

「そ・・うだよね・・・・・」

「そうそう」

「そうそう」

2人はうなづく。

「わかった・・・勇気を出して誘つてみるよー。」

「おおおおおおおーー！」

2人から歓声が上がる。さつき、不良にからまれたことなんてこれ
ぼっちも気にしていない様子のこの3人。肌寒くなってきた冬の空
氣に、3人のどこか幸せな笑い声が反響する。そこにあるけど、な
にもない、気づけそうだが気づけない、重要なことがあるのにわか
らない。そういう状況に陥っている。それは、幸せである。知らず
知らずのうちに、誰かに守られている。

冬は寒く、彼らの心は熱く、彼女らの想いは切なく甘い。

そんな、そんな文化祭がはじまりうとしている。

おまけ

「龍尾さん。幾斗の文化祭があるけどいく？」

「そうだな、好感度を上げるために行こうかな・・・」

青海興行の事務室で幾斗ママと山下の会話が行われていた。どこか威圧を感じる部屋だが、今の会話を聞いていたものがいるとしたら、その威圧もすこしだけ薄らいでしまうだろ。そのくらい、どこかほのぼのとしていた。

「でも、幾斗くんが文化祭ね・・・中学の頃の彼からは、想像もできなよ」

山下が、ため息のようなタバコの煙を口から吐き出す。煙はどこか寂しげで、ふらふらと浮遊すると、各地に霧散した。

そんな山下をみて、幾斗ママもタバコを咥えると、マッチで火をつけ、ゆっくりと口に吸引し、その味を楽しむ。

「きっといのよ、幾斗にも・・・一緒にいて楽しいと思えるような人達がね・・・」

幾斗ママも山下に続いて、吐息のような煙を口から吐いた。

そして、彼女もまた、ただよう煙が霧散していくのを見送った。ただ、その目はどこか寂しげで、そしてどこかうれしげにも見て取れる・・・とても不思議な表情だった。

まるで、息子を想う母のように

第28話・おい！馬鹿犬！頼むから静かにしてろ！（後書き）

いつも、お久しぶりです。今回は不良小説っぽく喧嘩の話です。おとなりの青海北高校という不良高校が攻めてくる話ですね。前半ですが。次回は幾斗と武藤も動きます！そして、文化祭の前夜祭はいつたいどうなる…？雛菊、美貴、安曇の運命は？

そしてなにより、友一君が生きて帰つてこれるかどうか……。

作者へのコメント、感想、評価をできればお願いします。もちろんります。

第29話・不良のくせになまいきだ。② 注・破壊神は出ません（前書き）

いましめ

君はどうでもさすがに気が。
見よ、よきものは足下にある。
ただ幸福をしつかりと?むことを学びたまえ、
幸福はいたるところにあるのだから。

作：ゲーテ

戦力とは数である場合が非常に多い。

無敵と言われたスペイン艦隊は、英國のエリザベス艦隊に数の差で圧倒され、無敵の名を奪われた。

青海高校の戦力とはたかがしれていた。戦力は2年生の不良グループとその分隊約30名、3年の先輩ヤンキー約6名と元安曇をいじめていたイジメグループの佐々木友美とその仲間のギャル12名、1年の武藤や幾斗、友一の3名。

数を合わせても約51名ほどである。対する敵高校、青海北高校は一学年に50人上、少なくとも150人以上の兵隊がいることになる…

戦闘は学園祭終了までの1週間に青海高校学区内での戦闘が行われ、防衛線が崩れ次第、敵は青海高校に雪崩れのごとく押し寄せ、青海を全滅へと追い込むだろう。平凡な高校である青海は大した兵力も集められずにいる。対する青海北は大兵力をそろえている。

負け戦

そんなこと、誰でもわかっていた。不良グループも、幾斗も武藤も佐々木や3年だって…

だが、抗うしかない。無罪の青海生徒や先生、校舎を巻き込むわけにはいかない。

戦うしかない。恋人や仲間を守るために。

学園祭4日前の出来事であつた。すでに、青海北高と青海の中間地點にある、ゲームセンターでの戦い（人呼んで、ゲーセンの変）に大敗した不良グループは、生徒達にゲーセンに近寄らないことを伝える。もともと、あまり頻繁には出入りされていないゲーセンだったので、なんとかなつた。が、もしもゲーセンから南下され、青海中央運動場ぐらいまで制圧されれば、近辺で青海に通う生徒の人は通学が不可能になる。ゲーセン撤退以来、青海の士気はいっきに下がり、巻き返しが図れる確率は下がつていた。

作戦指令本部（校舎3階の空き部屋）の長は戦略ゲーム好きの友一が担当している。

「ユーチ、ゲーセンがやられたけどこのままじゃ、すぐに飲まれるぞ？」

幾斗がイライラと足を揺らす

「たしかに、そうですね」

武藤も若干不機嫌である。

「で…でもねえー戦力的に無理があるよ。戦略がどーとか言つ前にね」

友一は友一で冷静に戦局を理解しているようだ。友一が何も思いつかないのも無理は無い。実際、ゲーセンの変の時にだつて武藤と幾斗は参加していないものの不良グループ屈指の喧嘩名人たちが次々に倒されたとの報告が上がつており、青海は何の戦果も上げることなく撤退したそうだ。人数と実力を兼ね備えた集団が相手だのだ…

「とにかく、今は相手の出方を見るしかありませんね。」

戦略ゲームとはまったくもつて違うリアルな戦い。こちらが動けばあちらも動く。単純な行動は厄介で邪魔になる。

友一は考え込んだ。たとへ無謀だとわかつても、彼にも守るべ

き存在がいるからである。

当初は他人事だったが、実際話を聞いているうちに身の危険を感じ取ってきた。自分ならまだマシで、美貴に火の粉が飛ぶかもしれないと考えるとどことなく憤怒が湧き上がる。美貴だけではない、安曇や離菊などの親友兼恩人たちがそう易々と傷ついていい気分なわけがないのだ。

それなら、自分にできる最大限のことをしたい。

そんな気持ちで作戦指令本部長をやっているわけである。
だが、そういうことにはいかない。

持っている脳みそのすべてをフルに活用し、策を巡らせ、効率的に高確率で戦争を勝利させなくては意味がない。

無力承知で全員、玉碎したとしても、それは形だけで、美貴たちを守るという目的を達成することはできない。

形などはいらない、確実に勝たなくてはいけない戦い。

そして、本来の玉碎の存在意義である時間稼ぎは、稼げども後方は味方兵力零といった絶望が広がっている。これでは、51名で玉砕して150人にことごとく敗れ去り、あとは野をかける狼のように、青海高校を蹂躪されるだけである。

友一は考えた。頭をフルに活用して、1TBのHDDをかき回す。
Cのように、持てる知識をすべて使い、策を練ろうとする。
そこへ

「青海運動場にて戦闘が勃発！」

不良グループの1人が駆け込んできた。そしてよからぬ報告を口走る

「敵の数は80人上です」

敵兵力の半分以上。たしかに運動場まで南下すれば攻撃もたやすくなる。だが80は圧倒的だつた。

報告によれば現在戦闘が始まっているそうだ。
不良グループの頭を先頭に計10人の仲間が死闘を繰り広げている
とのことだった。

無謀だ、あまりにも無謀すぎる。

10対80？リンチの次元を軽く通り過ぎた圧倒的な人海戦術だった。

しかも、不良グループの頭が引き連れていたのは彼のグループの本隊ではなく、分隊の下つ端達であった。

たいした戦力ではない。頭がそれなりに強いとしても、いつものグループの力よりは劣るだろう。劣勢である。

絶望、そんな心境の中、もう1つの連絡が入った。

「大変です、青海小学校付近の稻妻神社に敵が集結中です。数はおよそ60人」

その他の兵力のようだ。しかも稻妻神社とは青海運動場より南にあり青海の学区内に余裕で入る。

これは、すでにその他と言うより、敵のメインはそこにあるようだ。稻妻付近で勝利すれば、孤立した運動場部隊を挟み撃ちできる。

あとは、守りに入った青海に攻め込む。

徹底している。

数もそれゆえの策も、徹底している。

「くっそ！武藤、お前は運動場へ、オレは稻妻に行く。」

幾斗はたえかねた。その声に武藤も軽くうなづくと

「わかりました。御武運を…」

「お前もな」

2人の不良はたがいに見つめ合い、少々うなずきあうと、少々緩んでいた口元を閉め、完全なる戦闘体制に体を入れ替える。

言えば、これは2人の初陣なのだ。

空き部屋を出た2人はそれぞれ12人の不良をつれて自転車置き場へ行き、12台の改造自転車に2人ずつで乗り込みそれぞれ戦場へ向かう。幾斗を筆頭にした自転車連隊（6台、12人）は稻妻神社へ、武藤隊（6台、12人）は運動場へ向けて出発していく。

青海北から大切なものを守るためか？

校門を出る12台の自転車と24人の少年たち。彼らはどんな思いでこの門を出るのだろう。

そして、笑顔で帰還することができるだらうか？

作戦指令本部部長の友一は直接は戦地には赴かない。

指令長は、部屋で携帯電話を握り締め、結果を待つしかないのだ。
そんな友一は、少しずつ遠くなつていく自転車連隊をどこか切なげな目で見送った。

決してあつてはならぬ未来を脳裏に浮かべながら：

不良グループの頭である、山木戸直也は仲間の不良たちと運動場の中央にある公衆トイレの障害者用トイレに籠城していた。敵は約80人の大軍、味方は傷だらけで疲れ果てている。こんなスライド式のドアなど、今にも壊れそうである。鍵は閉めているがそれでも心配で、仲間は恐怖ゆえに力の入る手を必死にドアに当てて敵の侵入を防ごうとしていた。

「本部には連絡したのか？」

「はい、もうすぐ武藤さんが援軍にくるそうですが…」

はたして武藤達は80人相手に戦果を上げれるだらうか？

山木戸は不安であった。いかに武藤でも数に勝てるだらうか？
かの世界最大最強の戦艦も多くの雷撃機の爆弾の雨をくらい、撃沈されている。

山木戸の頭にはそんなことが浮かんだ。今でも、スライドドアはゴンゴンと敵の蹴りか何かを受けているし、時折換気扇の隙間から水などを入れられるという精神攻撃をされたが、一いちらが健全であることを示すかのように落ちていたホースを水道につなぎ逆のことをしてやつたりしていた。

敵に包囲されている。

この籠城はいつまで続くか。

つらそうに息を荒げる仲間や、ぐつたりと動かない仲間たちを見て、この状況のヤバサが伝わってくる。

なぜにこんな戦いを始めたのか。

ああ…分隊の奴らが肩に当たつたからだつたな。
本当にぐだらない。

そんなことで、こんなにも圧倒的な戦力を見せ付けられるのか？

「か…かしらあ…」

ドアを必死で守つてきた少年が呻くような声を発する。
その手はガクガクと震え、今にも手を離しそうだった。

「ああああ

少年は精一杯力を入れる。

仲間の数人が立ち上がり、少年を手伝つ。

ガコンガコンと蹴られるドア。借金取りに怯える人のようにガクガクと震える仲間。

本当にぐだらない。なんで、肩に少しばかりあたつたぐらいで…こんなことに。

ぐだらない。

本当にぐだらない。

ぐだらない理由に漬け込んで、結局は内あおりまを配下に置きたかつただけだろう。

こっちが少数で、人員も不足していることに漬け込んだゆえの。やつらが欲しかつただけだろう。ぐだらない。本当にぐだらない。

ちょっと戦争の口実を作つて、戦いを正当化しただけだろう……

くだら……ない……
だが、彼は気づいた。

それは、少し前、まだ、学校に不慣れな少女に肩をぶつけられ、気弱そうなところに漬け込み、カツアゲのネタにした自分も同じだったと。

あの時、助けに入つた生徒会長のあの少女はなんとかこゝにことだろう。

殴られても、殴られて目頭にいっぱいの涙をたたえても、自分に反抗してきた。暴力には屈しなかつたあの少女はなんともかつこよかつた。

くだらない正当化などには見向きもせず、現実を、実際に誰かが悲しんでいるといった現実をしつかりと見据えたその瞳は、いくら殴つても、脅しても、自分の意見をのんではくれないだろう。

そして、そんな少女を助けたあの不良。幾斗はなんともかつこいい存在なのだろう。（勘違い）

こんな状況になつて、ようやく気がついた。雑魚で何もできない自分は、雑魚にしか相手にできない自分はなんともかつこ悪いのだろうか。

調子に乗つていたとかそういう次元ではない。

こんな状況で……いいや、こんな状況だからこそ気がついたのだろう。自分のやつてきたことがどれほど恥ずかしい行いだったかを。くだらない理由で、いきがつてたのは自分も同じだった。

肩をぶつけられたら、大丈夫かと尋ねる。これは普通のことだろうに。

なんとも恥ずかしい。山木戸は赤面を隠せずにいる。

周りでその状況を見ていた仲間たちはものすごく不思議な気持ちになつた。

頭である山木戸は少しだけ大きく息を吸う。トイレ独特の臭いが肺を駆け巡るが、まったく気にした様子はない。

ドアの前で必死に力をこめて抵抗している少年たちの前に言って、
退くように支持する。

山木戸はドアの鍵に手をかけた。

「か・・頭？ 何するんですか？ 敵が、津波のように敵が雪崩れ込んで
できますぜ。」

失敗すれば、敵はこの狭い部屋になだれ込むだろう。狭い部屋なので下手をすれば圧死だろうか？

だが、山木戸はその手を止めなかつた。さっきまでの恐怖はその顔にはひとかけらも残つておらず、ただどこか爽やかな笑顔だけがその面に張り付いている。状況だけをみれば最悪だが、なぜかこの男は恐怖をたたえていない。

なぜだ？

仲間たちは不思議だつた。この数十分の籠城が、この男に何をもたらしたかは仲間たちはわからなかつた。

「口口は俺たちの青海だ、恐れるこたーなんもねえーだろーがあ？」

山木戸は仲間たちに言つた。力強く。力強く。
もう逃げない。その男の瞳にはあふれんばかりの闘争心と、みたこともないような誇りが漂つっていた。

ゴツイ、ブレスレットが巻いてあるその腕はなんの躊躇も無く鍵のロックを解除する。

ガチャリ

死の音。希望の音。戦いの音。

感じ方は人それぞれだつたが、たしかに鳴つたのだ。ロック解除音は外にも中にも響いたのだ。

そして、山木戸は開けた。パンドラの箱を。くだらない、憎しみや嫉妬や、恨みが詰まつたパンドラの箱をスライド式のドアであけた。

だが、忘れてはならぬ。パンドラの箱に詰まつているのは、なにも憎悪だけではない。

最後に入っているのは希望だといつゝと

は忘れてはならない。

幾斗隊が到着したのは、報告を受けた10分後ぐらいであった。6台の自転車は、この神社へ続く長い階段の前に止められる。木刀、バット、鎖で武装した不良たちの中心に、とくに武装した様子も無い幾斗が先頭で歩いていく。

かなり急な階段ではあるが、さほど歩くのに支障は無いようだ。幾斗の後ろを歩く不良達はどこか緊張していた。

不良が全員、喧嘩が強いわけではない。もちろん、本当に強い奴もいるが、形だけの奴も少なくは無い。

不良のようなかつこうをするのは一種の威嚇である。
カマキリが敵に出くわしたら、釜を広げ、羽を鳴らし、敵を威圧しようとするあれと同じなのである。

幾斗との後ろの少年たちはそれに近いのかもしない。

喧嘩はそこそこでも、自分の喧嘩力に自信を持つていらないものは多い。

ましては、相手が大兵力、圧倒的な力を有しているとしたらなおさらである。

階段に積もった石がコロリと落ちる。

もうすぐ頂上だ、広場があるがそこは60人の大軍で埋め尽くされているだろう。

不安だが、いつものヤンキー歩きの足取りは変わらない。仲間の1人が緊張をほぐそうとポケットから煙草の箱を出した。口に咥えて火をつけようとする。

「やめとけや、喧嘩する前に煙草はよくないぞ?」

幾斗が顔も向けずに言つ。その背中を見上げてから、口に咥えた煙草を震える手でケースに収める。

コツコツ・・・

階段を上つていく。

コツコツ・・・

戦場へ上がつていく。

そして、やつと頂上が見える位置まで上つた。

そこには想像通りの光景が広がつている。

広い神社の広場に数十人のブレザーヤンキー達が群がつている。そして、そのまま奥には階段に座り込んだ、周りの奴とはまったく違う空気を醸し出している男がいる。奴がこの稻妻神社進行軍の隊長だつた。

幾斗は仲間に耳打ちした

「あの中央の男を倒せば、ぐずれるぞ」

仲間たちは軽くうなづく。そして再度、幾斗の顔を見ると軽くうなづいた。

ブレザー達も立ち上がる。舞台は戦場になつていた。

風は冷たく、が不良たちの魂は熱く。

くだらないことで引き上げられたハンマーが装填された幾斗という超絶弾を撃つ。

この瞬間こそが、青海最強の不良の力がもろに出た瞬間だった。

かつて、青海周辺でおこつた2つの暴走族の抗争。その抗争を見事に粉碎せしめた、青き稻妻。

幾斗が飛び出す。一瞬で間合いをつめると、手始めに目の前の男を

ぶち殴る。胴体ごと飛んでいく相手を最後まで見ることなく、幾斗は次の相手にかかつた。

ほかの不良たちも攻撃を開始する。なにやら叫びながら、バットや木刀を振り回して攻撃する。

幾斗の突然の襲撃にうろたえるブレザー達は、そのままやや後ろに引きながらも、攻撃態勢を崩そうとはしなかった。

そんな敵を、眼下に捕らえたら無事では帰さないのが幾斗であった。目の前の敵を片つ端から殴り倒し、後方に回った敵に殴った遠心力でさらに殴る。幾斗に近寄った不良達は強制的に半径3メートル外に吹き飛ばされる。

そんな幾斗の蒙闇つぶりに空気の流れを乗せて、青海の不良達は徐々に徐々に戦いを有利に進めていく。どどまるこ^トとを知らない蒼髪^{そうべん}の幾斗を戦闘に、青海高校は前進を続けた。目指すは敵将。壇上の偉そうな奴！

幾斗が神社の砂利だらけの地を蹴つたかと思うと、軽々と数メートル前まで前進し、そこで構えていたブレザー野郎を2人まとめて吹き飛ばす。崩れた隙をついて残り5人の青海も適当な奴にたたみ込みをかける。

また一步、敵は退いた。ジリジリと。

「群れててもこの程度か？ カスが！」

幾斗の後ろにいた不良が一言そう言う。幾斗はすこしだけ怪訝そうな顔をその少年に送つたが、すぐに前方に顔を戻す。

そこで、たえかねた敵の1人が鉄バットを持って幾斗に飛び掛つた。喧嘩に強いといつても幾斗は人間だ。まともに食らえば死ぬ。

うおーと雄たけびを上げながら、幾斗へ狙いを定め、バットを振り下ろす。

残念ながら、幾斗にはバットはあたらなかつた。幾斗が相手の利き手を蹴り上げ、手首をひねつた相手はバットを放してしまつた。カラソカラソというむなしい音だけが神社を支配する。

「いい加減たいがいだろおーが。そこで偉そうに座つてる野郎。下

りてきて俺とタイマンはれ！」

幾斗が壇上の男にそう呼びかける。ブレザー達は一瞬、男を見た。男は少しばかりニヤニヤと笑みを浮かべて。

「俺はたいきくないねえ。自分でやるより、見てるほうが好きかもねえ。」

そう返答してきた。幾斗はたいそう不服そうに男を見上げる。本当にたいきそつな目つき。

めんどくせえ・・・

幾斗は心中で、そう呴くとまた戦闘体勢に入る。幾斗が入つたと同時に敵も一斉に突っ込んできた。

またもや神社は少年たちの雄たけびと、殴りあう音と、何かがあらぬ方向に曲がったような鈍い音が混ざり合つ。さきほどとなんら変化もなく幾斗は眼下に入つた敵を容赦なく吹き飛ばす。木の棒で殴りかかった奴は幾斗の蹴りで棒を粉碎され、バット、木刀ならば手からもぎ落とされて、素手でかかつたならば、拳が幾斗にかかる間もなく変な方向に投げ飛ばされる。

止まらない幾斗を見ながら壇上の男はクスクス笑っていた。その行為がさらに幾斗の機嫌を悪くしていた。

ブレザー不良達は、だんだん幾斗に飛び掛つていいくことが無意味に思えてきたのか、飛び掛るのをやめてジリジリジリジリと後ろに下がり始めた。壇上の男はそんな光景を見てもニヤニヤと汚らしい笑みを浮かべ、なにもせずにただ青海と青海北の戦いを見ていた。

だが、戦意を喪失しかけた仲間を見て、少々焦りを覚えたのか、男は仲間に何かを耳打ちした。

男の言葉に頷き、ブレザー達は急に幾斗から半径7メートルほどまで離れて下がり、距離を取つた。

「死ね、青海の薄汚いドブ猫め！」

男が放つた言葉と同時に、こぶしほどの大さの石を幾斗に向かつて1つ、男が投げつけた。

軽々と身をひねり、その石を回避すると、得意げに壇上の男に向か

つて幾斗は笑つた。

「そんなんじゃ死ねないよ。」

男は黙つてゐる。幾斗はさらにかまつてやうとした。口をまた聞く。

なにがおこったのか？

ただ、頭がヒリヒリと痛む。どうやら石が頭に直撃したようだ…誰だ？幾斗があたりを見回そうと顔を上げた瞬間、一斉に敵から石の雨が降ってきた。さすがの幾斗もよけれない。打ち所が悪かつたら軽く死ねる。とつさに頭を手で覆つて、ガードするが、手や足、腹にはもうに石が直撃する。

動けないのは他の奴も同じで青海はみな頭をガードしてゐるが、もう直撃して伸びてゐるかであった。

幾斗は初めてそこで動きを止めた。攻めが得意な彼
ている。というより、防戦以外は無謀という状況。

力アガアと直撃する石たちは無残にも幾シの豚の皮を剥ぎ
腹に痣を残そうと強打を加えてくる。丽はやまない。

かぶると、石を投げた。ビューンと風を切る音がしたと思ひと、幾
斗の腹部に正確に打ち込まれた。

その石は他の雑魚とは違つた。速度も正確さも、そして強さもまたく別格である。防戦で動けない幾斗に正確に打ち込まれた石は、幾斗に激痛を腹から広がるように走らせ、あの幾斗を後方にのけぞらしたのだ。思わず、床に伏せてしまう。こみ上げてくる吐き気。だが容赦なく石の雨が伏せた幾斗の背中に「ゴンゴン」とヒットする。苦しみながら幾斗はもう一度、あの男を見る。そこには想像した通り、下品な笑みを惜しげもなく披露した男が気持ちの悪い視線を送つてきていた。

頭に血が上る。あの顔をみたら、もう殴りすにはおれないといつたように、幾斗はそつと立ち上がつた。ガードもせず、石の雨も気にしなくなつていた。走り出す。目指すは壇上のある男。目的は壇

上のあの男を殴ること。それ以外、何にも考えなくなつた。どんなに石が幾斗を叩こうと、まったく気にせず、前進した。

とどまる」ことを知らぬ蒼髪蒼炎の名が帰ってきたような気がした。石石石石・・・ぜんぶ受け止める。そして進む。今なら足をもがれても進み続ける気さえする。

そして地面を蹴り上げた。壇上まで飛び上がる。敵は、男は目の前。拳に力を入れ始め、敵の顔面を正確に狙う。あと2センチでこの男は殴られる。宙に浮いた幾斗は全体重を拳にかけてついに相手に殴りかかつた。

突然、目の前に大きな黒い塊が見えた。直後、腹部を何かに押されたようになり、その押す力が前に落ちようとする幾斗の力を上回り、幾斗を後ろに吹き飛ばす。吐き気がする。目の前が真っ白になる。さつきまでとはまったく別の。言つならば幾斗は地面を蹴った場所に回帰していくような形になつた。しかし、体勢が悪く、背中を地面で強く打つてしまつた。せきが自然とこぼれる。肺が圧迫されたのだろう。またひどく腹部が痛む。一般に言う溝に入ったのであろう。幾斗はそこで戦闘能力を失つた。

汚らしい笑みを浮かべながら男は幾斗を壇上から見下ろした。さげすむような目線、優越感に浸る唇。

最後にトドメをと思ったのか、男は落ちていたやや大きめの石を持ち上げた。

武藤のチャリ連隊が青海運動場についた時、そこには驚くべき光景が広がっていた。報告によると、山木戸をあわせた不良達はトイレで籠城していたはずだ。なのになぜ、今、彼らはこんなにも勇敢に戦っているのか。

山木戸は顔から鼻血をダラダラと流しながら数人の相手に蹴りを加えていたし、正規のグループメンバーでもない雑魚な不良達までもが山木戸に同調したのかかくも勇敢に戦っていた。無謀という言葉が良く似合うはずのその光景だが、なぜか見ている武藤や仲間達にまで闘争心が強くなるのを感じる戦いだった。

「たった1人に何やってる！」

敵の1人が山木戸にひるむ仲間に叫んだ。奴らには戦力としてみなされているのが山木戸だけなのだろう。だから1人なのだろう。だが、

「はあ？ こっちには10人いんだよ！ ナメンなあ！」

鼻からドロドロと流れた血は山木戸の唇に触れて唾とまざり、山木戸の声とともにあたりへ飛び散った。滴り落ちた血は山木戸の学ランを染め始めるが、本人はまったく気にしていない様子だ。

彼の言葉に、仲間達が静かに頷く。

団結。彼らは団結した。願わくばもっと平和的な団結を望んでいたに違いないだろうが、とにかく彼らはここで団結したのだ。

「俺らの地元でワヤすんのやめてくんねえーかなあ？ さもねえーと

俺ら10人で全員シメてやんぜえ」

山木戸がどじめの言葉を吐き捨てる。その気迫に押されて、敵の数人がのけぞる。

「ふざけやがつて。調子にのんなよ？たかだか10人で、数で物を言わせてくる青海北は、なんの気迷いも無く10人を見やる。

たつた10人。しかも戦力は山木戸一人。負けるわけには行かない。人海戦術を使えば、こんな奴らどーってことない。

「10人？数え間違ないでくださいね。16人です。」

どこからか口が挟まれた。援軍に駆けつけた金髪ピアスの丁寧な不良は、さわやかな微笑を浮かべながら青海北の連中に言ったのである。

だがそのさわやかな微笑一転し、鋭い目つきになると青海北に向かつて行く。切り替わったのだ。

やわらかで優しげな普段の彼の顔からは想像もできない強面。さわやかなはずの金髪が金獅子のような威圧に化ける

「安曇さんに何かしようとしたらどうなるか、教えてあげますよ。」その言葉を合図に武藤が敵に突っ込んだ。武藤の後ろに、味方の不良少年5人が続く。

まるで戦国時代の合戦のように両者が正面から衝突する。木刀、バットを持つ敵に対し、武藤は素手でかかる。最初はとび蹴りを放つ。前方の1人がやられ、吹き飛び、それによつて後ろの数人も倒れる。

「お話にならない方はひつこんでてくださいね。」

武藤が少しだけ微笑を取り戻してから言った。

「ちょーしこいてんじやねえーぞ、コラああああ！」

武藤に対して手持ちのバットを振り下ろす少年。だが、武藤にはあたらない。まるでダンスでも踊るかのように軽やかにステップを踏んで、バットをかわし、その勢いで背後に回り込む。焦つて振り向いた相手は顔面を殴られて倒れた。

「耳が遠いのですね。もう一度いいますよ？カスは引っ込んでく

ださいね。」

武藤の言葉に青海北の不良が頭に血を上らせるが、今やられ、地面でのびてはいる奴の姿が一瞬目に入り、少したじろぐ。

武藤の仲間の不良、数人も武藤の作った勢いにのって、それなりに奮闘していた。

たった1人の強大な存在感が、自信となり、勇気となる。俺達にはあの人気がついてるんだ！

武藤に向けられる信頼。そしてその信頼に答えるほどの圧倒的な力。両者は均衡を保ち、青海の喧嘩の流れをつくりあげていた。

「武藤、来てくれて助かっただぜ。」

山木戸が武藤に言つ。鼻血をダラダラとたらした顔は痛そうだったが、その顔には笑みが覆つっていた。

「なに言つてんですか。なままでしょ」

武藤が言つ。山木戸も照れくさそうに笑う。青海北の不良は、青海を囮んではいるもののうかつに手を出せなくなつた。

金髪ピアスの敬語野郎

武藤勇氣の存在と、山木戸の思い切つた行動に北は若干戸惑い、焦り、戦闘への集中力が極度に低下し始めている。

青海中央公園の何も無いグラウンド。2つの高校に通う不良達。

「さて、山木戸さん。そろそろ片付けませんか？」

武藤がニヤリと笑みを浮かべる。山木戸も血をぬぐうと首を縦に振つて了解の合図をする。

他の14人の不良たちも、それぞれ頷いたり、拳を握つたりする。

「おっしゃあああ、行くぜえええ！」

武藤の掛け声と共に、青海高校はいつせにに飛び掛つた。

目の前では敵の大将的存在の男が伸びている。こんなチャンスをのがすわけにはいかない。

壇上の下で延びている、幾斗を見下して男はどじめの一発を放とうと決心した。

「悪く思うなよな」

少々、下品な笑みを浮かべ男は足元に置いてある大きな石を持ち上げた。

投げる必要は無い。これほどの重量を持つ石をわざわざ力を入れて投げれば、逆に的をはずしてしまうのである。

かるく力を入れて、ほとんど落とすだけでいい。あとは重力が石を幾斗まで届けてくれる。

壇上からあたりを見回したら、仲間達も石を投げ、青海高校の不良は大半が全滅していた。

これで終わりだ。

稻妻神社陥落を完遂すれば、中央公園に進撃して奴らと合流できる。あとは、青海を挟み撃ち。

そこで転がってる蒼髪の少年も、喧嘩は強いみたいだが、これで終わりだ。

男はズシッとした重さを感じながら石を持ち上げる。石につけた口ヶが彼のブレザーにハラハラと落ちるが気にしない。

「青海北に喧嘩を売ったこと、後悔させてやるぜ。」

石を持ち上げた。ああ、重い。さつさと落としたいに違いない。

周りを針葉樹林で囲まれたこの神社。神主もここ数年みつからないらしい。

だからわざわざ戦場に選んだ。

地元不良との戦いで怖いところは地の利を生かされることである。だが、今回は関係ない。ここは人数も、戦法も、北が勝っている。そして手を離す。ゆるんだ笑み、汚らしい目。幾斗が倒れたままこ

ちらを見ているのが見えた。

ああ、かわいそうに

そうは思つものの、男は躊躇ちゅうちょしなかつた。

終わりだ。

そして・・・

激痛。体が反応できない。男は笑みをこぼしたままだつたが、顔の右側。耳の少し前あたりにひどい激痛を感じた。

あまりにも唐突なことに、体が反応することができない。

自分の体がどうなつたかもわからない。

手に持つていた石は、手から滑り落ち。幾斗とはまったく違つた場所に落ちた

よろめく体をなんとかささえ、何が起つたのか頭の中で整理を始める。

いつたい、何が？

だが、考える暇もなく2発目が来た。次は首の根元やや上。また3発目。今度は額。

どうやら壇上から見て右側から何かを飛ばしてくるらしい。しかし、次の1発で男は地面に倒れてしまった。

仲間達も気がついた。右側からなにかを投げられてる。いや、撃たれてると。

全員が右側を向いた。必死に敵を探す。

しかし、事態はそう単純ではなかつた。

右側をみた北の不良達の後頭部に激痛が次々に走つた。その射撃の正確さは、驚くべきことであつた。

ほとんど全員、同じ場所にあたるのだ。

1人の少年が気がついた。

さつきから痛みをさそつてゐるのは、なんとただのBB弾である。と、今度は左側に集中しはじめると、右から小石が正確無慈悲に飛んでくる。小石やBB弾がここまで強力な武器になるとは不良達は信じられなかつただろう。

そのつち、あまりの痛さに耐えられなくなつた奴が逃げ出していく。逃げるといつ空氣の流れが出来てしまい、不良達は出るための階段に殺到する。

逃げる間も、神社の敷地を出るまでは容赦なく発砲が続けられた。北の数人は、小さな痛みが延々と広がるBB弾とくゆうの痛みに涙し、泣きながら走り去っていく。

情けない下つ端をなんとか起き上がつた男は壇上からみていたが、やがて仲間がほとんど出て行つてしまつたころになつて我に返る。血だらけの幾斗がおぼつかない足取りで立ち上がるのとそれは同時に殺された。

幾斗は驚いた・・・

幾斗が目をさますと、そこには不思議な世界が広がつているでわないか。

俺が眠つてゐる間に、幾千年もすぎていたようだ・・・といつオチはありません

幾斗が目を覚ますとそこには不思議な光景が広がつていた。

壇上の男は倒れ、周囲の敵は拡散、すでに逃げ始めたものまでいる。仲間のだれかがうまくやつてくれたのか？

と思って後ろを振り向いてみたが、仲間は全員そのへんでのびている。

何かに怯えて逃げまとう敵

味方は全滅しているのに・・・

だが、迷つことはない。体はそこいらじゅう痛むが、なんとか立ち上がる。

丁度、壇上の男も幾斗が復活していることに気がついたようだ。

男は幾斗を見て、その目を驚愕に染めたが、すぐに目をそらし逃げ

る仲間を追うように自分も逃げようとした。

「させつかよお！」

今度は幾斗が落ちていた小石を逃げる男の足へと投げる。多少狙つていた位置とはズレたものの、当たった。

足に石を食らつて無様にこけた男は少々そのままの体勢だったが、意を決したのか落ちていた鉄パイプを拾つて幾斗へと向く。その目は殺氣を帶びていたが、幾斗はそんな男をみても動じない。むしろ呆れているような顔つきだ。

「てめえ、ぶつ殺してやる」

幾斗の顔を見て、男はすこしうごんだ。

そして、落ちていた釘バットを幾斗に向かつて投げつける。グラングルンと上下に回転しながら幾斗へと近づく風かすり抜ける透き通つたような音とともに飛来したバットを幾斗は軽く身をひねつてかわす。

が、これが狙いだった。かわしている、この一瞬の時間に男はいつきに幾斗との間合いを詰める。

当初、お互の距離は5メートルはあつたが、一瞬にして2メートルまで迫つた。

鉄パイプの長さが約1.5メートル。幾斗は射程圏内に入った。男は軽くパイプを振りかぶると力を手首に入れて、パイプを幾斗に向かつて押し出す。透通つた風鳴りがパイプの速度を表す。

「しねクソがきやあ！！！」

だが、パイプが幾斗に致命的ダメージを与えることは無かつた。振り下ろしたパイプは幾斗の片手でつかまれ、静止していた。

射程圏内とは決して自分だけのものではない。自分が射程に入ったということは、相手からみても自分は射程に入っているのだ。

おぼつかなかつたはずの足を力強く踏み出し、幾斗は拳を男の腹にぶつけた。

くの字に折れ曲がつて飛んでいく男。その長めの髪は乱れ、汚らわしかつたあの笑みはすでにどこにもなかつた。

数メートル先で地面に落ちて、そのまま氣絶してしまった。

終わった。

青海戦争稻妻神社の変　ここに終結せん

「ずいぶんとかつこいいことで」

声がした。聞き覚えのある声がしたと思うと、神社を囲う林から1人の女の子が出てきた。

後ろで結んでクルンとカールした髪、白い肌、少々無表情な顔・・・

「露子？」

赤城露子。幾斗は妹の名前を口にした。

「おにいちゃんがここで喧嘩していると、友達に馬鹿にされました。」

と少しむっとしながら幾斗に告げる。

「なので、やめるよう言いに来たらこのあります。なので仕方ないですから周りの三下は私達が片付けました。」

そう言うと露子は手に持っていたバチン口を見せる。ビリやら敵はこれに怯えていたようだ。

「そうかそうか・・・・・・私達？」

幾斗が露子の発言の文脈で納得できないところをもつ一度尋ね返した

「私もいるんだけど？幾兄。^{いくあに}」

声とともに今度は露子がてきた場所と反対方向の林から女の子が出てきた

長い天然パーマのかかった髪、どこか得意げな顔、小柄な体

「露子？おめえーもバチン？」

糸河龍子。露子の幼馴染にして親友である・・・安曇の妹。

「ちがうしー。露子はあーコレ」

そう言って、手にしていた恐ろしい物を幾斗に見せる。

「？・・・・！ちよつ・・・・おまわw」

それは露子の身長の3分の2はあるだろう、ライフルであった。コッキング式、銃身以外は木で出来た第一次世界大戦に出てきそうな

見栄えは旧式の銃。

だが、銃身の上に乗つたスコープや、それにさつきの戦闘で逃げまとつていた敵の顔を思い出せば強力な銃なのは間違いない

「エアー ガンか？」

「NO。ガスガンだよ。」

ヘリウムガスを圧縮して力にし、その力を使ってBB弾を撃ち出す銃。たとへおもちゃといえど、危ない代物である。

注：ガスガンは年齢制限がある場合があります。ガスガン、エアーガンなどは決して人に向けて撃たないでください。

露子のバチンコ、龍子のライフル。2人の小さな狙撃手によつて青海はなんとか勝つた。

60人の不良をたつた6人（龍・露子コンビをあわせれば8人）で倒したのだから大勝利といつても言い過ぎではないだろう。

「それにしても、オメーらの射的能力はすげえーなあ」

幾斗が本心から感心したように言うと

「半分以上氣絶してみてないくせに・・・何を言つているんですか？」

と冷ややかな言葉と目線を妹から送られていた。

「本当に・・・私達がいなかつたらどうなつてしたことか」

と、少しだけ心配の色に目を染める。

「ああ、今回ばかりは助かつたよ。オメーらには感謝してるよ」
幾斗は頭をかきながら無造作に言う。

「ならさあー今度、ステーキおじれよー」

龍子が口を挟む。

「むちや言つたな！家には、んな金ねえー！」

貧乏な幾斗の家にそんなお金はないです。はい
とにかく、幾斗とその仲間達は稻妻神社を死守に成功した。これで
敵の進撃は遅れるだろう。

武藤から何の連絡もないのに、あっちもあっちで援軍無しでもやつていけるのかもしれない。

少し前向きな考えを頭で構想し、ひとつ安堵のため息をつくと幾斗は立ち上がった。

絶望なんて、切り抜ければこんなにもすつきりしているものか。数だあー戦力だあー関係ないのかもしれない。

とにかく今日は勝つた。明日、明後日、どうなるかわからないが、今日は無事に帰れそうだ。

体を動かして火照った幾斗の体は外気に触れて温度を弱め始めた。もう冬だ。

戦闘終了後学校に戻ると武藤、山木戸達が少々傷だらけだったが、笑顔で幾斗達を迎えた。

やはり、武藤、山木戸もあっちで一暴れしてきたみたいだった。

今日は勝つた。80人、60人、そんな数字で怖気づいていけないのかもしれない。

無謀？いや、怖いもの知らずなんだよ。

だが、喧嘩を目撃していた近所のおばちゃんが高校生が喧嘩していると学校に通報したこともあって、幾斗、武藤、その他諸々は後日生徒指導室に

送られることとなつた。それに加え、わりとおしゃべりな性格の龍子（安曇の妹）によつて安曇に喧嘩についてもれてしまつた。

当然、そのことは雛菊、美貴の耳にも入ることになつたわけだが・
・・・。

「はあ？おめえーいらはアホかあ？」

青海北高校の裏庭で、この学校を仕切る幹部達が頭をそろえていた。
「何十人も頭そろえて、何返り討ちにあつてんだよ！」

その中でも、ダントツ偉そうな男が色落ちした古いドラム缶に腰を下ろしている。

「てめえーいらにはがっかりだ。負けそ娘娘たら逃げんのか？玉砕しろ！何、平気なツラでノコノコ帰ってきてんだ！」

男はそう怒鳴り終えると、煙草を咥えた。隣の男がライターを出し偉そうな男の煙草に火をつける。

濃い臭いを撒き散らしながら、男はゆつくつとため息をつく。

「どんな奴にやられた？」

「はい。青い髪の男です」

「俺らは金髪の男です」

青い髪？男は少々いぶかしげに眉をゆがめると

「はあん、幾斗かあ。それなら、お前らが返り討ちにあつたのもわかる・・・・・か」

「蛇さん、知つてるんすか？」

蛇と呼ばれた男は、ドラム缶から立ち上がった。

「ああ、知り合いや」

蛇はそういう捨てると、もう一度タバコを深々と吸い込む。有毒な

ガスが肺を黒く汚す感じがする。

「よおし、白龍爆走連合に連絡しろ。青海一掃に付き合え、青海はオメーラにくれてやるつーな」

はい。と一人が返事すると校舎に去つていった。この男は隣町、宝美町の暴走族を従えている。そして高校どうしの喧嘩に、族を利用しようとしている。だが、文句を言う奴はない。それだけの力がこの男にはあった。

「幾斗があ、今度こそぶつ殺してやるぜえ」

啖きと共にいつきに主流煙を吸い込み、吸殻をポイっとなげかる。

戦いが動き始めた。

気がつけば5ヶ月以上も更新しておらず・・・なんという放置プレイ・・・

ですが！ついに今日一更新されました。それで勘弁してくださいました。今日は前回の続きです。武藤くんなり、幾斗くんなりが一生懸命喧嘩しました。

不良グループの頭も、自分の男を磨きましたね？（ハア？）彼らの活躍？見てくださいってありがとノノ

そして、おそろしくスケッチも2枚出しあきましたね。結構、このコンビ好きなんで今後もたまにちょくちょく出てくるかも？

今回も女性陣は出番なしでしたね・・・

みなさまの「メント、評価、お待ちしています。もういたらないま
す！」
ココ重要

次回予告的な何か

次回はついに青海北の本隊が動きます。もちろん女性陣も出ます！
幾斗、武藤、山木戸の3人もさらなる活躍をみせてくれると思いま
す。

複雑な過去、繩張りにつるをこ暴走族、イロイロからんで大爆走で
しゅ

では

第30話・我が逃走（前書き）

ねむねしぶつです^ ^

第30話・我が逃走

校舎は次々と派手な飾りで満たされていく。

青海高校文化祭、通称青海祭が着々と近づいているからである。生徒達は忙しそうに、だが楽しそうに準備をすすめていた。

幾斗、武藤、山木戸も例外ではない。

彼らの場合は一般人よりも重い仕事をさせられていた。いわば生徒指導による喧嘩した罰である。

軽音部のライブ会場となる体育館のパイプ椅子1300席を出す仕事をたつた3人でやらされることとなっていたというわけである。

「ダ・・・ダルすぎる・・・」

頭に鉄十時を浮かべた幾斗が怒りで震える手で椅子を持ち上げる。幾斗や山木戸にくらべればぜんぜんたいした傷のない武藤はいつも軽い微笑を顔に浮かべ、椅子を悠々と運んでいた

「ですがよかつたじやないです、怪我けがも生徒指導もたいしたことなくて。椅子出しで許されたことに感謝しましょうよ」

と、かなりポジティブな発言を鼻頭やら足やら手やらに包帯やらガーゼやらバンドエードをつけた2人に言ひ。

「つたく」

幾斗はそんな前向きな説得を聞いて、胸糞悪い思いを吐き捨てる。

「で? 奴らの動きはどうなんだよ?」

「ああ、あれ以来派手には動いてねえ」

山木戸が幾斗に言葉を返す。敵はまだ動いてない。だが、いつ動いてもおかしくない。向こうつも、この前の戦闘で随分腹が立っているだろう。

「今は様子を見ましょ」

武藤が微笑を崩さぬまま言つた。山木戸も幾斗もきびすを返す。賑わう校舎、文化祭が近づいている。3人だけしかいない体育館はまるで別の空間のように静まりかえっていた。

それから椅子も半分ほど並べた頃合のことであつた

「山木戸さん、大変つす！！」

そう言って体育館に駆け込んできた、山木戸の下つ端は荒い息を落ち着かせる間もなく話し始める。

「こうもんに・・・校門に族が来てます。で、頭を出せつて言つてます。」

下つ端はそこまで伝えると息を静めると専念しばじめた。

「ああ？族？」

「武藤、元ゾッキーだろ？なんか聞いてねえーのかあ？」

「私は別になにも

「とにかく言つてみようぜ」

山木戸の言葉と共に3人は体育館を飛び出した。あれやこれやで賑わう校舎を抜けて、校門へ急ぎ向かう。

校門には青海の不良達が集まっていた。山木戸の下つ端、分隊の連中や3年の先輩ヤンキー等である。校門を半円で囲むようにして密集した仲間を搔き分けて、校門に出る

「ういっす、武藤さん。お久しぶりっす」

ひとりの少年が武藤に言つた。黒い色の服。俗に言う特攻服を少年同様、その族の仲間は全員着ていた。それぞれ刺繡がほどこされており、爆走天使、鬼魔愚零、喧嘩上等など統一性はない。ただ唯一の同じ刺繡は背中に大きな文字で3文字「爆鬼天」という文字が書かれていることだろう。

つまり彼らのチーム名である

「近藤さん。立派に総長を務めているようですね。」

武藤が少年、近藤に最初はOBとしての言葉をかける

「はい、武藤さんのおかげです。」

近藤は少しばかりハニカミながら武藤に答えた。まわりの奴らにそ

れに続いた・・・

「ところで、今日はなんの用ですか？」

武藤が主題に話を向ける。これが武藤、幾斗、山木戸の一一番の問い合わせである

「はい。実はつすね、隣の宝美町の族の白龍つてあつたじやないですか？」

「はい、私が現役だつたころ激しい対立と抗争をしていましたね」

武藤のすこし懐かしそうな目を幾斗は見た。

「まあ、あの抗争は武藤さん、湯水さんが”蒼鬼”の力借りて終わらせましたよね」

「はい」

武藤は近藤が蒼鬼という言葉を出したとき、チラリと幾斗を見た。幾斗は何も気にせず近藤の話を聞いている。

「実は最近、爆鬼天と白龍の対立が激しくなつてゐるんすけど、武藤さん達、青海北高校と抗争やつてるそつじやないっすか？」

武藤、山木戸は首を縦に振る。

「青海北に蛇が入学してます。北は蛇が指揮つてゐつす。どうやら蛇は宝美の白龍を使つて青海に侵攻するみたいなんすよ」

それ聞いて山木戸がツバを吐いた。

「やれやれ、また敵が増えんのかよ。クソウゼエなあ」

「蛇は白龍に青海を渡すみたいつす。そーなつたら俺らはすげえ歯痒いわけつすよ」

近藤が続ける

「それなんで、青海北対抗勢力に俺ら爆鬼天も加わりたいんすけど？」

と最終的な目的を伝える。武藤、山木戸はそれを聞いて歓迎した。

「そりやあありがたいね。こちとら戦力不足ですんげえ困つてたわけよ。そりやあ助かるわ」

山木戸が近藤に右手を出す。近藤も握り返す。

ここに青海連合が結成された。いかなる外敵をも跳ね返す連合とな

りえるために

「あと、敵には蛇がいます。武藤さん、蒼鬼は仲間に引き入れられませんかね？」

近藤はかつて、この地で起こった戦闘で唯一、蛇に対抗できた男のあだ名を出した。それを聞いて武藤はまたチラリと幾斗を見る。

「大丈夫です。蒼鬼はすでにこちら側にいます」

その言葉に近藤は「マジスカ？」と驚いて、その後「さすがつす」と言っていた。

当の蒼鬼本人は、自分が蒼鬼と呼ばれてることも知らないので、違う世界の話のようにその話をきいていたが・・・

「今日のところはこれで引き上げます。作戦会議なり、集会なり、流しなりの時は呼んで下さい。」

近藤はそれだけ言い終わると仲間を引き連れ校門を出た。校門の外に止めてあつたバイクにまたがり、爆鬼天のメンバーは走り出した。時折、爆音をバイクから発しながら、その後姿を学校前の大通りへと溶かしていった。

「なんか大変なことになつてきましたねえ。まさか蛇がからんでいるとは」

武藤も、山木戸も蛇の名前ぐらい知っている。本名は中川裕也。なかがわひやうや喧嘩の腕つ節は、本当に強い。最強の称号が良く似合う男である。

以前の抗争時、爆鬼天を壊滅まで追い込んだが、爆鬼天に味方した通称”蒼鬼”にやられ、結果的に白龍と爆鬼天は停戦した

「せつかくの文化祭。僕達に椅子並べをやらせたこと蛇に後悔させてやりましょう」

武藤、幾斗、山木戸がニヤリと笑った。

「1年B組、赤城幾斗くん。至急、生徒会室までお越しください」
校内のあるところに設置されたスピーカーから、生徒会長の声が
した。幾斗を呼び出しているようだ。

体育館で椅子並べの続きをしていた幾斗は急な呼び出しに、心底面
倒くさそうに歩き出した

「つたく、何の話だつーの」

文句をブツブツ言いながら体育館を出て、本館3階の生徒会室へと
向かう。

5分歩いてたゞりつき、ノックもしないでドアを開ける

「なんか用？」

幾斗は、雛菊に加え、大量の先生が待っているものだとてっきり思
つたが、実際は資料の山に埋もれた机に座る雛菊だけであった。

「い・・・幾斗くん。ごめん、呼び出したりして。」

「別に、で？なんか用？」

幾斗の質問を聞いてから雛菊は立ち上がり、立てかけてあつた折り
たたみパイプ椅子を幾斗の前に出す。

「うん。とりあえず座つて。」

いつもそれなりに明るい女の子だが、今日は少し緊張しているのか
言葉がたどたどしい。

幾斗はとりあえずパイプ椅子にどかっと座ると雛菊に顔を向ける。
雛菊も椅子を出し、幾斗と向き合つ形で座る。

「ねえ、幾斗くん。もしかして、何か重大な事件に巻き込まれてた
りしない？」

「はあ？」

雛菊の突然の問いに幾斗は戸惑った

「例えば、隣の高校と高校同士で喧嘩してるとか・・・そんな感じ
の事件」

雛菊は幾斗に問うたが幾斗は真正面からは受け止めない

「なんでそう思うんだ？」

「このまえ稻妻神社で喧嘩した件と、最近、青海北高校の生徒に青

海高校の生徒が襲われる事件が増えているから・・・

雛菊は目線を自分のつまさきに送った。とても幾斗の目を見て話せる内容じゃないと思ったのだろう

「もし。もし、俺がその事件とやらに巻き込まれてたら、雛菊はどうするつもりなんだ？」

幾斗も自分が一番気になる質問を雛菊に持ちかけた。

だが、雛菊がとても自信なく言葉をつむいでいた原因はここにあった。もし、幾斗が事件に巻き込まれていても、自分はどうしたらいいかわからないのだ。だから、もしも本当だった場合の具体的対策なんてあるわけもない。

「雛菊。俺らは、あんたの予想通りの事件に巻き込まれてるよ。だがなあ、もうこうなつちまつた以上、やるしかねえんだよ」

幾斗は雛菊にすっぱり言った。

「やるって・・・喧嘩？」

「そうにきまつてるだろ？」

またまたスッパリと言い切られ、雛菊は少し絶句するが

「でも、私、安曇から聞いたけど青海北って人数多いんでしょ？」

「人数なんて問題じやねえよ」

「でも、ほら、喧嘩なんかしなくても話し合いでなんとかなるはずだよ」

必死で幾斗を説得しようとするが、それでも幾斗は聞き入れてくれない

「あのなあ、話し合いでなんとかなるなら、こんなことにはなつてねえーつーの」

「じゃあ、他に手があるはずだよ。だって、相手は不良だけど人間だよ?きつとなんとか・・

雛菊の言葉は幾斗には届かなかつた。雛菊が必死で搜した言葉は、残念ながら幾斗には響かない

「わざいけど、今回ばかりはなあ会長の言つことだとしても聞けね

え

幾斗は鋭い目つきで雛菊を見る。

「話し合いで和解といきたいのはやまやまだがなあ。そんなに甘い世界じゃないもんでね」

そこまで言い終わると幾斗は何気なく席を立つた。雛菊はどうしたらしいいかわからない

雛菊には不良の世界がわからない。今まで人生で、一度も不良をやつたことがないのだ・・・当然だろ？
だから、雛菊は幾斗にどうアドバイスすればいいのかわからない。
彼女は、困惑し、それでも彼をどうにか引きとめるための言葉を捜す。

この前も稻妻神社で喧嘩したという幾斗。体には無数のシップ。顔には絆創膏。

その程度で今度もすめばいいが、そもそもいかないのではないか？
という考えが雛菊の頭に根を下ろしていた。

だが、困惑する雛菊に幾斗は言った。

「それによ、武藤も俺も、お前らになんか被害がされることだけは絶対避けたいんだよ。俺らにとつてお前らは大切な存在だからよ。」

幾斗は少しばかりの微笑を雛菊に向けた。武藤のようにさわやかではなかつたが、その笑顔はいたずらっぽく、優しかつた。
胸がドキつとした

幾斗の言葉が明らかに、自分を守ると言つてくれていることにも、自分では彼を止めることが到底できないほど彼の決心が固かつたことにも、どこか嫌な予感がすことにも雛菊はドキつとしてしまった。
複雑な気持ちであろう。

学ランのすべてのボタンを開けていた幾斗は、寒くなつたのか2つ3個ボタンをしめて未だに不安な顔を向ける雛菊に背中を向けた。
幾斗は生徒会室から出ようとすると。

生徒会室の外はガヤガヤと騒がしい。文化祭の準備で賑わう生徒達、指示を出す役員、先生達の声・・・

そんな中、どこか薄暗く、静寂が支配する生徒会室

「まあ。話はここまでな。またあとで・・・」

幾斗は雛菊に背中を向けたままそつまつと、スライド式の生徒会室のドアを開けよじとした。

「まつて！」

突然立ち上がった雛菊は幾斗に弾みで飛びついてしまった。だが、そんなことを気にしている余裕など無い

「だからよお俺は・・・

力を込めて握られた、幾斗の制服。幾斗は雛菊を振り返らない。雛菊も握つてはいるが、幾斗を見上げない。

「おい・・・

幾斗が呼んでも雛菊は少しばかり黙つていた。

「私だつて・・・私だつて・・・幾斗くんが傷つくといふ見たくな

いよ・・・

雛菊は本音を幾斗に告げた。幾斗や武藤にとつて、雛菊や安曇を守るために自分が犠牲になることは別にたいしたことではないし、どうでもよいことなのかもしない。自分達がボロボロになつても、守るべきものを守れれば、それでいいと考えている。それが、彼らにとつての誇りであり、目的であり、命運だと信じている。

だが、守られる側としては心配極まりない。

男と女だと、彼氏だ彼女だと、そんなのを通り越して雛菊にとって・・もちろん安曇や美貴にとつても幾斗や武藤・・・友一はかけがえの無い存在なのだ。自分を守るといつてくれたことは嬉しい。だが、それで傷ついて・・・痛い思いをして・・・そんなことになつて欲しいはずがあるわけがない。

彼は大切な存在なのだから。

2人はしばらくの間、無言でたたずんでいた。

幾斗を握る小さな手のひら。細い指を精一杯学ランに食い込ませて・・・

がやがやと賑わう外と、静寂の支配する生徒会室。たつた一枚の薄いスライド式ドアに遮断された、沈黙の世界。

「なあ、さつき話してた蒼鬼って誰のことだ？」

幾斗が生徒会室に呼び出されてから、山木戸は武藤に尋ねた。

「昔、宝美町と青海町の族・・・白龍と爆鬼天が抗争していたのは地元不良の世界では有名な話ですよね？」

武藤が出し終わつた椅子の1つに腰掛けて話し始める。山木戸は踵きびすをかえす。

「その時、敵・・・白龍といったほうがいいですね・・・白龍は蛇と呼ばれる最強の不良を仲間に引き入れることに成功したようで、当然、蛇を味方にした白龍が抗争で優位を獲得したわけです。」

「ほお・・・」

「蛇の力は予想以上で、爆鬼天はほぼ壊滅。抗争は白龍の勝利間違い無しと言われるまで追い詰められました。」

「ですが、いたんですよ。蛇に対抗しうる少年が・・・私の通つてた青海中学の隣の中学・・・青海西中に・・・どういう経緯で彼が爆鬼天に加担することになつたかは知りません。しかし、彼は最後の戦いの時に先陣を切つて攻撃にかかりっていました。そして・・・」

「蛇を倒したってわけか。」

山木戸が武藤の最後のセリフを取る。武藤は気にした様子も無く「蒼鬼。本名、赤城幾斗・・・」

武藤は親友の名を言った。族時代は恩人であり、まったく別の世界の格の違う人物だと思つてきた幾斗・・・。今では良き友であり、

信頼に足る仲間である。

「幾斗が・・・蒼鬼か。まあ、納得は出来るな。」

山木戸は不思議には思わないそぶりで言った。

「蛇か・・・ちつさいゴタゴタがこうも発展してしまつとはね。予想外だなあ」

山木戸の言葉を聞いて武藤は軽く否定した

「いえ、蛇はもともと青海を傘下に入れることを強く望んでいたので、今回の口実をきっかけに乗り込んでくるのは必然だつたのかもしれませんね」

蛇。最強の男。だが、青海の不良2人はひとつも動じない。

「まあ、何にせよ楽な戦いにはならないだろうな」

山木戸の発言を最後に、2人の会話は途切れた。椅子を並べ終わつた体育館は静かさという霧につつまれたように、ひどく静寂であつた。

体育館の窓から差し込む優しげな光や、外の賑やかな雰囲気から離れた、どこか寂しげな、それでいてどこか懐かしいような気がする。

静寂を打ち破つたのは山木戸だった

「なあ、武藤。俺達、不良つてなんなんだうな?」

「はい?」

突然の問いに多少戸惑う武藤だが、山木戸は構わず続ける。

「俺は中学の頃、気が弱え・・・いわば、いじめられる存在だった。あだ名なんて、パシリだつたからな」

自分の過去を振り返りながら、苦笑をする。

「だから、俺をまったく知らないこの学校に来て、不良になつた。今までいじめられてきた分人を見下し、今まで舐められてた分人を見下げるためにな」

話の内容が出始めが酷く滑稽だが、武藤は真剣な表情で山木戸の話を聞いていた。

「お前も知つてるだろ?。俺は弱い奴をいじめるし、平氣で暴力を

振る。俺はそれを平氣で続けてきた。おかげで仲間も出来たし、人に舐められなくもなつた。すべては中学時代の暗黒の思い出への復讐だとずっと自分の心に言い聞かせてきた。

山木戸はそこまで言い終ると、武藤の隣の椅子へドカッと座る。足を広げ、ふんぞり返る不良式の座り方。

「だがよお、実際は復讐なんて攻撃的なことじゃなかつたんだ。俺はたんに怖かっただけなんだよと気がついたわけ。強い自分を・・・人を容赦なく殴つたり、イジメたりできる地位を示していないと、またイジメを受けるんじゃないかつてな。嘘やでまかせや、派手なことやって・・・人を見下して俺は今の地位を身につけた。でも、それってやっぱ結局は臆病な弱虫のやることだつたんだよな。」

山木戸は自分のやつってきたことを鼻でわらつた。惨めだった。

「おめえーも聞いたかもしけねえーが、俺は一度、まつたく関係ない女を絡んだことがある。そこで、幾斗の女に止められた。自分を止められたことで自分が間違つていると否定されたようで、いや・・・実際は俺が間違つていたし、それもわかつていたがあからさまに批判されたようで、俺は幾斗の女を殴つた。そこに幾斗がやってきてな、俺を瞬殺して、女を保健室へ運んでいった。そこで気がついてた・・・もしそれをヒーローショーに例えれば、俺が怪人なんたらで、幾斗は仮面ライダーなんたらなんだろうってな。」

体育館の中では山木戸は不良後輩に自分の心をおおつていた何かを取り払うように話しかけた。

後輩不良は少し考えてから言葉を返した

「山木戸さんはオビラプトルをご存知ですか？」

「は？なんだそりや？タイ料理か何かか？」

武藤の質問に山木戸は多少なりと困惑する。が、当の武藤は気にせず続ける

「白亜紀後期に生息していたといふ、恐竜の名前ですよ。」

「・・・・・」

まったく話の読めない山木戸

「オビラップトル。意味は卵じろぼう。なんでそんな名前がついたかと言ふと、発見された化石の近くに卵があり、その卵はプロトケラトップスという他の恐竜のものだと考えられ、つまりこのオビラップトルは卵を盗んでそれを食べて生活していたと考えられたためなんですよ」

両親が2人とも生物学者。幼少期から家に山とつまれた生物、地質、古生物の本を読み成長してきた武藤勇気の膨大な知識のかけらを山木戸は聞かされていた。

「ですが、最近の研究で、実は卵を泥棒したわけではなく、その卵は自分の産んだ卵で、オビラップトルは食べていたのではなく卵をあたためていたんじゃないかといわれているみたいでして。むしろ、そつちのほうが有力な説と言われているわけですよ」

よくわからないというような顔をしている山木戸

「卵泥棒・・・オビラップトルに言わせれば、なんと不名誉な名前なんだと言つていそうですね」

武藤は軽く笑つて言つた。

「山木戸さん、人というのは相手をまず第一印象で固定し、その印象を軸にして相手との接し方を決めます。そして相手と接して、ある程度親しくなつたらどこまでなら自分わがまま・・・言い方悪いですね。自分の考えが通じるか、自分の考えを行動してくれると大まかに測りなおします。そうですね、自分より下だと考えれば悪ければパシリにしてみたり好意をもつたならばおせっかいをやいてみたり、対等だと思えば友人や仲間に、上だと思う場合は従うか・・・または関わろうとしなくなるものです。第一印象では怖かった人も話してみるとなかなか気が合い、今では仲良しなんてことはいくらでもあるものです。」

山木戸の不良脳は武藤の言葉をひつつつしに理解しようとしていた。「そこで人というのは自分のキャラをつくり出そうとするわけです。オビラップトルは卵がそばにあつただけで卵泥棒の名前がつきました。つまり、人と人のコミュニケーションをする中で、第一印象がとても

大切というわけです。第一印象というのは、主に容姿や行動でついてくるものです。例えるなら・・・そうですね。ボンタン、長ラン、リーゼントの少年がいたら？あなたはどんな印象を受けます？」

説明が質問に変わった。

「ああ？「ーん。昔ながらの不良だなあ・・・と思つかな・・・」と返事しておく。

「では、路上にツバを吐いたり、肩を怒らせて歩いていたりしたら？おまけに怖い目つきでジロジロと周りをみていたら？」

「・・・そいつは不良なんだなあ・・・と思つ」

「そうでしょう。というように最初は行動や容姿で印象を操作できるんです。あなただけ最初に不良になつたと思つた時・・・格好から入つたんじゃないかと思いますが？」

そう聞かれると山木戸も心当たりがある。

「ああ・・・そうだ。」

「でも、第一印象は親しくなるうちにだんだんと崩れていくものです。だから人というのは一生懸命、維持しようとするとするんですよ。自分が考える人から見た自分の理想像を。だから、あなたは喧嘩したり、弱いものをいじめたりした。自分が喧嘩に強い、逆らつたらただじゃ済まされない不良だとみんなから思われるために。そういう自分の姿や存在をつくっていく。印象操作。だが、印象操作によつて塗り重ねられて創り上げられた自分があまりにも相手の印象に根をはつてしまつと、本来の自分が出せなくなつていく。そして嘘の自分に逆らえなくなつて・・・自分は心の奥ではダメだと思つてることをやつてしまつたりする。」

そこまで言い終わると武藤は少しばかりだまつた。また体育館に静寂が戻つてくる。

だが、それもほんの数秒のことだつた。

「・・・・・お前も自分を創つて来たのか？」

山木戸が武藤に尋ねた。武藤はすこしぶかり黙つていたが、

「そう・・・ですね。私も演じて来たのかも知れません。不良、武藤

勇気を。」

武藤はそこで一息置いてから、また口を開いた
「でも、最近は演じなくなりました。私を・・・武藤勇気を武藤勇
氣と見てくれる仲間ができたからでしょうか。」

武藤勇気はそこでいつもさわやか微笑スマイルへと変わっていた。
その、誰もを優しく包むかのような柔軟な笑み。温かい笑顔。

「そうかよお・・・なら、俺はどうすりやいい。」

「幾斗さんがなぜカツコイイかわかりますか?」

質問をしたのに質問が返ってきた・・・

「わからんなんあ」

とりあえず言つとく。

「彼は自分に素直なんですよ。自分が不愉快だと思えばそつ言ひつい
悪いことだと感じれば悪いといつ。例えるなら・・・すみませんね。
・例えが多くて・・・」

「いや、例えがなきや、おめーの話、一個もわからんし」

「・・・そうですか・・・例えば、ある教室でイジメがおこったとす
れば自分がいじめられるのが怖いからとかいう理由で周りの人もい
じめたり、関わらないようにしたりします。つまりその教室ではそ
の子をいじめる空気が流れが作られたわけです。ですが、もしその
クラスに幾斗さんがいたら、彼はその流れを一切無視するでしょう。
彼はイジメを容認するような人ではないし、イジメがカツコイイと
思っているわけではありませんからね。」

武藤は親友を自慢するような口調で話していた。まあ・・・實際そ
うだつたが

「つまり・・・?」

「あなたも素直になればよいんですよ。自分が正しいと思つことを
精一杯やればいいじゃないですか?」

武藤勇気はまたもや優しげなスマイルを山木戸に向かた。

「簡単に言つてんなや。大変なんだぞ・・・それ。」

山木戸は苦笑交じりで武藤に返した

「大変なことをやつてるから」や幾斗さんはかつこにいんじやないですか？」

ああ・・・

ああ・・・

やつと気がついた。

山木戸という不良は自分では制御しているつもりでも、いつのまにか制御しきれなくなつていた偽の自分を必死に必死に守り続けてきたんだな・・・と

そうやつているうちに、勝手に自分の心にあきらめをうつてしまつた・・・

情けない。

結局は、相手の目線が怖くて逃げてたんじゃなくて、そんな自分が逃げていただけ。

「なあ、武藤。よく小学校のセンコーがいつも言つじやねえーか。自分から逃げるな つてな。ばかばかしいと思つてたが、今の自分にこんなにも当てはまるなんて夢にも思つちゃいなかつたさ。」

体育館には自分と武藤と・・半分までは幾斗と並べた椅子が綺麗に並んでいる。当日は軽音部やなんやの演奏会場になるだろう場所。今は2人しかいない。

「ありがとよ、武藤。」

「はい?」

「話聞いてくれたのがおめでよかつたよ。」

山木戸はその強面の口を二ヵつとさせると、武藤にそういつた。

「ああ、私が言つたのはたくさん存在する人の一つのパターンですよ。人が誰しも演技をしているわけではないですから。」

武藤は二ヶ口と言つた

「そうだな・・・幾斗や幾斗の女、お前の女やあのオタク野郎やギヤルがお前に向かつて何かを演じているようにはとても見えないな」山木戸はもう一度ありがとよと言つと、ポケットから安っぽい煙草

の箱を出しながら体育館のボロトイレに向かって歩き出した。

武藤はその、どこか重い荷をおろしたような先輩不良の背中を少しばかり見ていた。

ありがとう・・・か

武藤は自分に言われたその言葉をもつて一度心の中で呟いてみたりした。

それから数時間後。学校内はほとんど抜けの空となつた。なにやらハデな飾りや、よくわからない看板が立ち並んでいるわけではあるが、人はさほどいない。校庭に出て部活してるか、帰ってるか・・・または部室で活動中か・・・。

「ゴーチ、爆鬼天のことは？聞いたか？」

幾斗が尋ねると、ゴーチは軽く頷いた。どうやら武藤がメールを送つたらしい。

爆鬼天が戦力に加わったことでそれなりに勝率は上がるのだろう。

「それにしても、なにやら事が大きくなりましたね・・・」

まだ前線には立つたことがない友一は、戦場の厳しさを知る由も無い。後方で・・・安全地帯で作戦を立てるだけの役職。

「まあ、なんにせよ・・・俺は俺がやるべきことをやるまでだわなあ」

山木戸が壁に寄りかかりながら言った。

「いつ攻めてきますかね？」

「たぶん。文化祭の日だ。」

なにぶんめんぢくをそうに幾斗が言つ。実際、めんどくさいのだろう。

幾斗はなぜか、雛菊からの呼出し後、どこか不機嫌である。武藤や友一や山木戸が聞いても何も答えない以上、なぜ幾斗が不機嫌になつたのかわかるわけがない。雛菊に聞くといつのも手だが、彼女の場合、すぐ自分を責めてしまつという癖があることを友一と武藤は知つていたため、下手すれば話をさらによじしくしてしまう可能性があるということを考慮して雛菊には聞かないことにしておいた。「いつ攻めてくるか定かではないといつのは作戦立案上とても不利です。何かいい案はありませんか?」

指令本部長佐山友一が聞くが

「うーん。スパイでも送れってのか?」

「いえ、盗聴器をしあげましょう

「つか、適当に北を捕まえて聞き出せばよくね?」

不良の脳みそなんてこんなもん。スパイが見つかったときこちらから援護ができないので危険。盗聴器なんて高校生が持つてゐるわけないし、捕まえて聞き出すのも難しい。もし聞き出した情報が嘘だつたり、または下つ端は知らなかつたり・・・

しかし、不良で編成された指令本部。友一が何を思おうが関係なく話はすすめられた。

「スパイを送るか? 盗聴器は無理だろ。」

「北を捕まえるのもそれなりに大変ですからね。スパイを送るしかないでしょ。」

「だな」

「・・・」

となると、問題は誰が北に忍び込んでスパイ行為を行つかである。各々、誰が適しているか慎重に考える。

「あ・・・あのさあ・・・なんというか、その作戦はちょっと・・・

「友一が言いかけるが見向きもしてくれない不良諸君・・・

「つか、俺や武藤、山木戸は相手に顔をわられてるよな・・・

「ああ・・・」によ「」によ

「でもさあーー」によぎよによぎ

「はあ？そこはあえての『』によぎよによぎ

3人がなにやら話している。友一にはいまいち聞こえない。
しかたがないので椅子にすわってボヘーとしていると・・・
「で？いいよな？友一？」

突然、幾斗に話しかけられて、反射的に

「あつうん・・・・・・」

と言ってしまった。

「よし、作戦はできた。あとは成功させるまで！頼むぞ友一君！」

山木戸が二コ二コしながら友一の肩をたたく。

「ちょっと・・・まつて・・・何が？」

「友一君を特殊諜報員。別名スパイに任命するという」とですよ
なんともさわやかな笑み。武藤は友一の肩をつかむと、頼りにして
ますよーとでも言いたげな目を向ける。
ここで気がついた。

なにかとんでもなく理不尽な出来事が自分がボケーっとしているあ
の数秒に起こっていたということに。

破滅だ…

幾斗も武藤も山木戸もどっこか楽しげに笑っていた。

寒い風が吹きすさぶ今日、この頃。

爆鬼天と白龍はその時、ついに開戦した。

白龍への攻撃通知。つまるところ宣戦布告なしに完璧なる奇襲攻撃を爆鬼天はかけた。場所は青海と宝美の境にある小さな空き地であった。

青海高校への進撃予備軍として駐留していた白龍20人、単車10台に対し爆鬼天は30人、単車15台の圧倒的・人数差で攻撃。

突然の奇襲に驚いた白龍は総崩れとなり、本部へ撤退を要求。しかし、あの場所から国道をのぼられれば急所をつかれかねないと判断した白龍本部は死守を命じた。援軍が到着したのは約10分後であったが、その時すでに白龍は70%も戦力を失っていた。戦闘から約30分後、白龍は援軍とともに全滅。あるものは逃げ出し、あるものは降伏した。

この出来事を境に、爆鬼天と白龍は完璧なる交戦状態に陥り、町境では攻め込もうとする爆鬼天と攻め込ませんとする白龍の激戦が繰り返された。

このことは数時間も隔てず、青海高校司令部へと伝わる。

爆鬼天3代目総長、近藤は前総長が成し得なかつた、白龍の制圧と全滅を狙つていた。ずっとずっと。

今回のこととて、武藤、蒼鬼が味方につき、その夢も確信へ変わらうとしていた。

少年たちは走つた。

己の信じる道を・・・

第30話・我が逃走（後書き）

今回も完結はできませんでしたね…＾＾；

今回、久しぶりに雛菊が登場。新キャラも数人登場・・・

呼んでくれた方、コメント、評価してくれた方、お気に入り小説に登録してくれた方…心から感謝いたします。

あなたがたがいるから、私も楽しんで小説がかけるというものです

＾＾

コメント、感想、評価、お時間あればお願ひしますね □□重要 w

PS

今回のサブタイトルの元ネタがわかつた方。いれば、教えてくださいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4235d/>

～生徒会長が愛死天流～

2010年10月10日18時51分発行